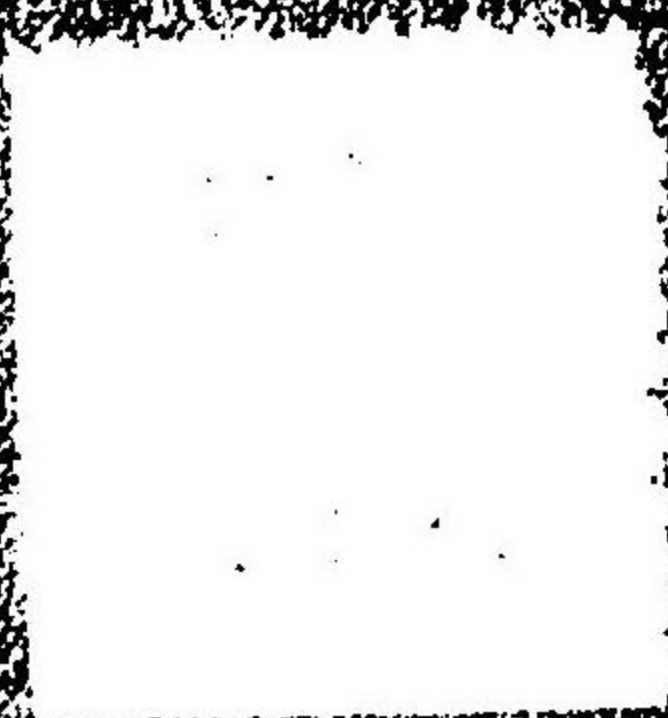
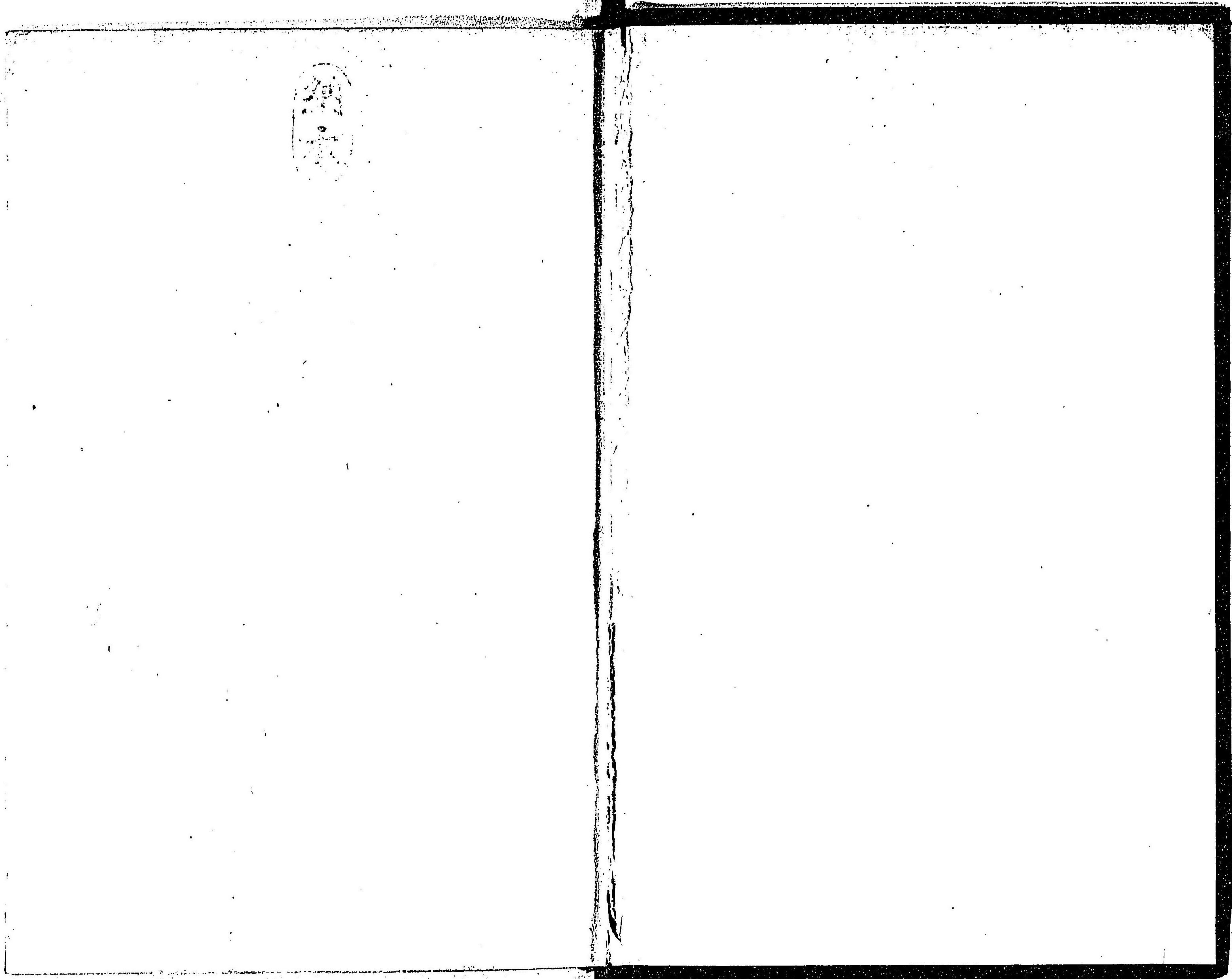


講談文庫

俠客傳





特10
392

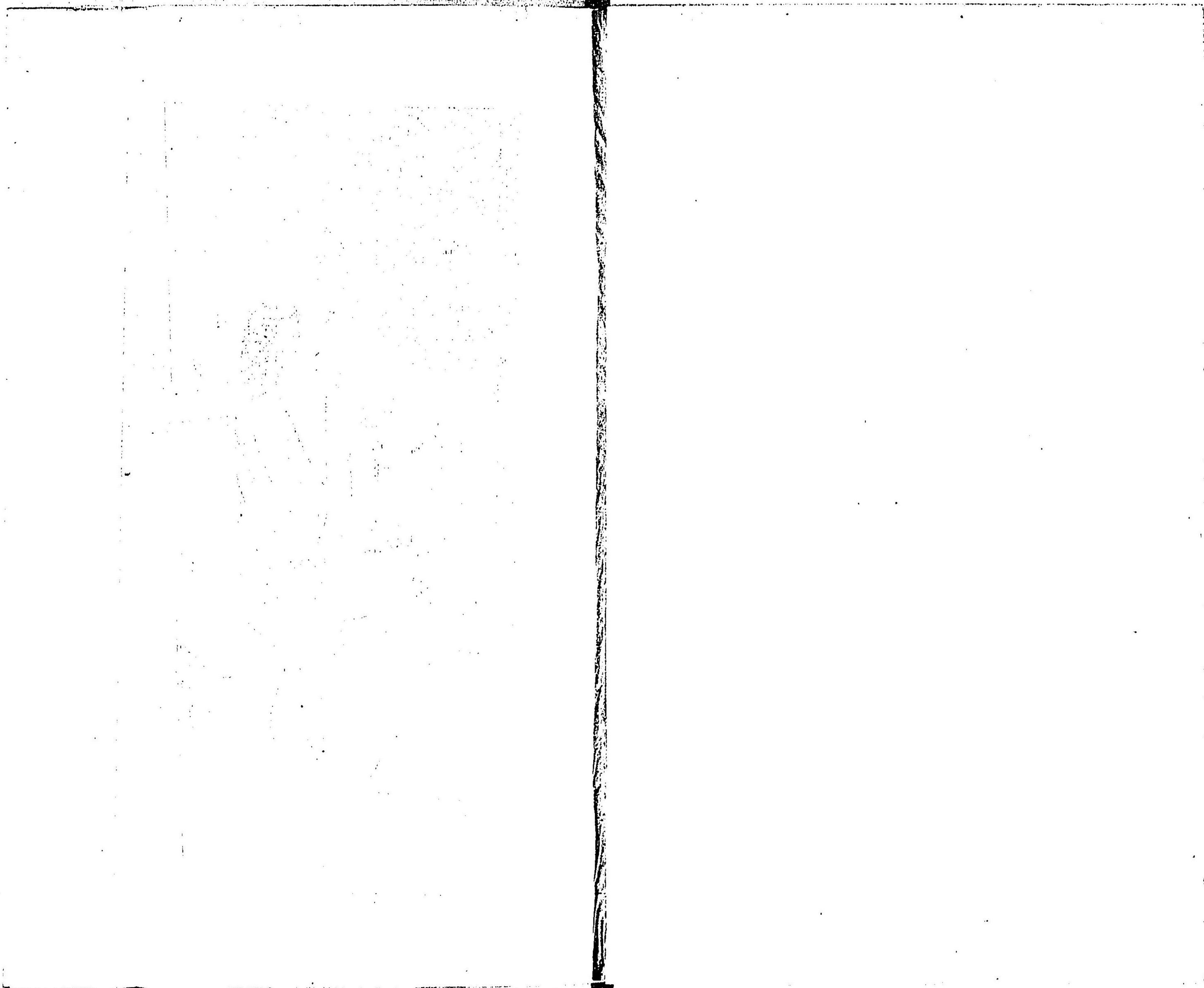
講談
文庫

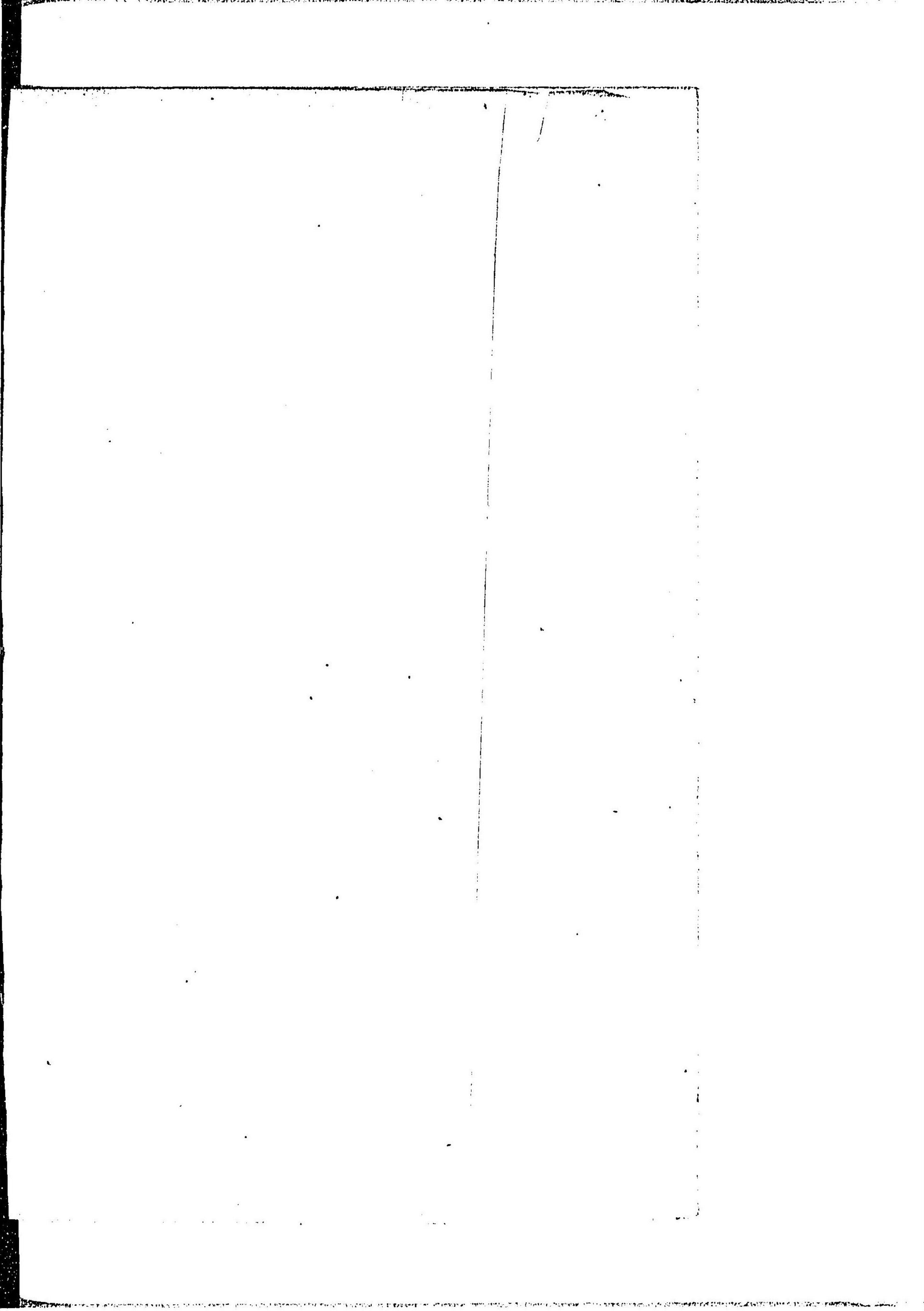
俠客傳

明治

43.10.29

丙寅







講談文庫 俠客傳

目次

幡隨院長兵衛……………	(一頁)	邑井一
花川戸助六……………	(六頁)	寶井琴凌
金看板甚九郎……………	(二九頁)	桃川實
奴 杉 初……………	(四四頁)	金城齋貞玉
飯岡助五郎……………	(三四頁)	松林伯圓
新門辰五郎……………	(五九頁)	松廼家太疏
清水の次郎長……………	(三九頁)	眞龍齋貞水
江戸の相政……………	(三七頁)	放牛舎桃林
小喧嘩五郎吉……………	(四六頁)	一龍齋貞山

講談 俠客傳

隨院長兵衛

第一壺席

邑井 一口演

江戸自慢隨院長兵衛の傳を一席言上仕ります。

鍛冶橋外の堀端に、誰れが書いて建てたのやら、高札があるので、奇を好むのが人情の常でありますから、黒山のやうに取巻いて見て居りますが何んだか解りません。甲「何だらうな乙」俺に解る位なら友達同士の事だから、元價限り話してもやるけれど、俺程のものにも少し解兼ねるテ 甲「是れが字が書いてあつて解らないといふの

なら仕方もないが、繪がかいてあるに知れなくツちやア残念ぢやアないか 丙「さア字の方だと俺が読んでやるんだが、惜しいかな繪では讀み悪くいや 乙「そんな奴があるものか 甲「是れは俺の考えでは、判じ物だらうと思ふのだぜ 乙「さア俺も多分さうだらうとは氣がついて居るのだけれど、それが解らないので困るのだ 丙「按摩が踏抜をして居る繪だな 乙「さうよ 甲「何の譯だか解ったか 丙「イ、ヤ解らない」と三人計りの職人風のものが、話をして居る傍で聽いて居りましたのは、十一二の小僧らしい小供で 小「ヤアお前方は、鼻の間に二つ並んで光ッて居るものがあるぢやないか 甲「何だと… 小「お前方の鼻の間に二つ並んで光ッて居るのは、何だといふことよ 甲「いやな事を吐す小僧だ、鼻の上に光ッて居るのは眼よ 小「其眼は何のためについて居るのです 甲「知れたことよ、物を見るためだな 小「それでは分さうなものぢやアありませんか 丙「だから按摩が踏抜をして居るといふのだ 小「それは誰でも解りさつた話だが、其所が判じ物で、能く判じて御覽なさい 甲「生意氣な

ことをいふ小僧だ、手前には解るのか 小「勿論よ 甲「聽かして貰ひたいな 小「按摩さんが足を痛めて居る所を書いたのは、當節の政事を悪く言たんだよ 甲「へ、エ、どういふ次第だね 小「上に盲目が多いから、下が痛む、苦しむといふ所を諷たものサ 乙「ハ、ア、ナール程、此小僧は尋常のものぢやアねえぞ、天にくらなして染た切布だ、仲々旨いものぢやアねえか」と、見物人は此小僧の頓智に、アツといった口の閉がらない迄に感心した、スルと後の方から見物人を掻分けて出た赤だ四十三四の立派な武士が 武「コレ、小僧 小「へい何か御用でございますか 武「其方は何所の者だ 小「私は芝口一丁目八百屋藤兵衛の家に奉公をして居ります伊太郎と申すものでございます 武「奉公人か 小「左様で… 武「チト其八百屋藤兵衛と申すものに面會致したいから、送ッてッては呉れまいか 小「へい宜しうございます 人に恐れぬ性質と見えまして、先へ立て芝口へ歸ッて參る 小「旦那、お武士さんが貴方に遇ひたいと云ッて來ましたよ 藤「何だと、お武士が、ハテナ、何の用だらう 伊「大方青

物の御用でもあるんでせう 藤へイ入らッしやいまし、何の御用で…… 武「イヤ、妨を致して相濟まんが、此小僧の素性を聴きたいので 藤又何か失錯でも致しましたか、誠に困ります、年に過たことばかり言ひますので、毎度諸方様からお叱言を頂戴致すやうなことになりますので、大閉口をいたして居ります 武「イヤ別段悪事を致したといふのではないが、此者の素性を聴いた上で、少し相談があるのぢや 藤「へイ左様でございますか、此小僧は、元此長屋に住んで食ふや食はずの瘦身代を張ッて居た御浪士がございましたが、其者の件でございます、所がどうしたことか私 がその浪士と大層氣が合ひまして、朝晩往來をして居りましたが、一昨年の疫癘に、其者が煩付きまして、ドット寝たツきりといふ姿になつたゆゑ、私は及ぶだけの世話を致したのですが、定命といふものは仕方のないもので、五月蠅程の醫者、浴びる程の薬も何の役に立ませんで、臨終といふ場合に私を枕元へ呼んで、實は私は肥前國唐津城主寺澤志摩守の藩中で、塚本伊織と申す者、犯せる罪はなけれども

水清ければ魚住まず、朴訥の私故に人の交際が面白からず、朋友の讒訴に依つて遂に主家を漂流の寄邊渚の小舟に比しく、流の末は此江戸に形ばかりなる詫住居、主家へ歸參を頼む甲斐なく、起居も出来ぬ疫癘は所詮歸らぬ旅の最先、唯此上の願ひには、伴伊太郎の身の上のみと、言終つたが現世の名残り、果敢なき秋の野邊の虫啼音止めぬ有様に、私も涙に咽び、後々の葬式は不及ながら皆私 が引受け、七日の追弔、四十九日に五十兩合せて百兩百ヶ日…… 武「コレ…… 亭主、淨瑠璃を語ッては困るではないか 藤「どうも相濟みません、ツイ乗地になりました…… 武「それから如何いたした 藤「それから此子が生酔の氷入りで…… 武「何の事だ 藤「ズルくベツタリと尻を落付けた譯ですが、何しろ利口過ぎて時々人を困らせます、まア八百屋などに置く小僧ではないのですが、他に好い傳手もないものですから、家に置いて走り廻りに使ッて居ます 武「それは誠に喜ばしき至りである、某は大和國郡山城主本多大内記の家來櫻井庄左衛門と申す者、伴庄太郎の話對手として、此伊太

郎をば貰受けたい心得ぢやが、どうぢや 藤それは願ふ所でございます御武家様の御奉公なら、出世の仕業もありませう」と伊太郎へ話しますと、伊太郎は大悦び、ソコデ庄左衛門殿は、若干の金子を是までの養育料として藤兵衛に遣はし、伊太郎を連れ歸りましたのは、伊太郎が十二の時でありました。是れから庄太郎のお傍去らずで、文武の稽古の伴をして歩きます、劍術の師匠と申すのは、小石川白山下に居る石川軍刀齋と申さる、有名の先生で御座いまして、他の伴をして往く仲間達は主人が稽古をして待つて居る間、奇偶やなんこを掴んで、頻りに袁玄道に耽つて居る有様でありますが、伊太郎一人はさうでない、上手な人の遣ふ劍術は、眼を放たず見て居ります、餘り夢中になるために、折々批評などを試みまして、誰れは勝つか彼は負けるのかいふ必ず其通りに勝負がつかます、此節は段々と見巧者になりまして、立合つて居る間に『ア、悪い』とか、又はあぶなく勝がありますと『ア、旨い』とか、我を忘れて大きな聲をしますから、終には道場の者が氣にして伊太郎に

劍突を食せますと 伊何ですとえ、聲を掛ると邪魔になりますと、馬鹿をいッては不可ません、劍術は何のために習ふのです、スワ戰場といふ大事の時に、主人の馬前に働らき、好き敵を打つて名を上げる爲でせう、若戰場であるとしたならば、鐵砲の音、矢叫びの聲は、私一人が愚圖くいふやうなものぢやあるまいと思はれます、譬へ稽古であらうが、眞個になつて居ないから、私のいふ事が耳へ入るのです自分の未熟を世中へ弘めるやうなものでせう」と、遠慮なく遣込めるから、侍達は眞赤になつて怒る、聲高になつたから、師範代をして居る辻文次郎といふ方が仲裁に入つて様子を聴きますと、伊太郎の云事は正當の理ですから、辻成程それに違ひない」と、其事をば茶話の序に、石川先生に伊太郎の熱心を物語ると、先生も思ふ所があると思えまして、一日伊太郎を一人目立ぬやうに呼び入れて、素性を聴き糺すと、唐津の浪人で、侍になりたいといふことを話しましたから、大に其心中を憐み師範代の辻文次郎に話してやるから、小石川富坂下へ往つて充分に劍術の稽古を

しると、有難い言葉に伊太郎は渡りに舟と喜び勇めば、早速石川先生から辻先生にお話になると、最初文次郎先生が仲裁した縁故もあり委細承知をして、白山下の道場へ出ぬ日は、己が手に伊太郎を我子の如くに愛して教えます、又文次郎が石川の道場へ出て行く日には、師範代に吩咐けまして、本人の倦るまでは教えてやるのでありますから、他人の一年の稽古と、伊太郎の百日と匹敵するといふ有様であります、其内に追々と月日が経ちまして、伊太郎が最早十九才になりましたから、一年違ひの庄太郎も十八才といふ順になりました、併しながら庄太郎は柔和の性質で、遊藝は好みますけれども、武藝は兎角に嫌の方ですから、上達はいたしません、伊太郎の方は之れに反して、最う目録以上の腕前になつて居ります、恰度六月の下旬のことでございます、主人の庄左衛門は不在で、庄太郎は奥で本を讀んで居りましたが、少しく目に勞れを覺へましたから、馬伊太郎へ、伊何御用です、馬此節は日が長いな、伊今が一番長いでせう、馬退屈だから爰にある蹴鞠をやつて見やうと

思ふのだが、どうだ、伊お止めなされ、詰らない事を……、馬何故、伊何故と申して鞠といふものは、公家が飯を食過ぎた時に蹴る道具です、面白い業ではありませぬ、それよりも若旦那、一本剣術を教えて上げませう、馬イヤ剣術は好まんよ、伊それは甚だ困ります、庄デモ泰平の今日に剣術ばかりでは人が交際しないからな、伊人の交際に鞠を蹴ようといふのですか、庄さういふ譯ではない、伊では私に強て蹴ろといふのでもないから、お獨りでおやんなさい、拜見をしませう、庄俺一人では下可んだ、其方が對手をして、蹴返えしたり袖へ流したりするのだ、夫故相談をするのだ、伊主と病氣には勝ぬといふのはこの事、どうも仕方がありません、どうでもお相手を致します、馬何分頼むぞよ」と、庄太郎は蹴鞠を取出して庭へ下立ち、沓を履きまして蹴やうといふのです、けれど仲々此蹴鞠は六ヶ敷もので、旨く往かんものでございます、伊若旦那、口では大層旨さうで、蹴つてやるから蹴返へせと仰有つたが、薩張高く上りませんな、馬が糞をするやうに、バタリ〜と落

るのでは、蹴返えすことも何も出来やしません、自烈體な、もつと足に力を入れて
 ボガと蹴上げて……』と、短氣な伊太郎に言はれるので、殘念だと思ひましたから
 一生懸命に、ボンと蹴て来て来た所を、横に伊太郎の方へ蹴て遣る積りでしたが、
 未熟ですから、目的が整ふて居りませんので、塀を飛越して、隣屋敷の彦坂傳八郎
 といふ人の所へ飛込みました、所が此彦坂といふ人物は鎗の指南をして居るチト底
 意地の悪い男で庄左衛門とは極く仲の好くない人物です、恰當御殿から下ッて来て
 風呂へ入ッて汗を流し、縁側で涼んで居る所へ、隣屋敷から飛んで来た鞠が、今撒
 ヲた許りの水溜の中へ、ボンと落ッた拍子に、バツト泥水が傳八郎の頬先へビシ
 ヤリ跳ねた、泥だらけになッたので、傳八郎は赫と憤りまして 傳又助や、鳥渡來
 い 又へい 傳隣家から斯様鞠が飛込んで来て、余の面上を汚して了ふた、甚だ不
 都合極ッた無禮な奴だテ 又其鞠がですか 傳イヤ其蹴た奴が 又へい 傳大方隣
 家の柔弱武士が遊びにやつたことであらう、若掛合に參ッたら、此庭へ連れて來い』

と大變な立腹であります、此方は庄太郎顔の色を變えまして 庄伊太郎や、飛んで
 もないことをしたのう 伊だからお止しなさいと云ッたのです、今更愚痴を云ッて
 も仕方がありません 庄お父さんがお歸りまでに取返して置なければならぬがどう
 したものであらうな、外ならぬ彦坂傳八郎殿だから、大いに弱るテ 伊どうも致方
 がありません、貴方が餘り強く蹴たんですもの 庄そりやアさうだけれども、父上
 に知れると困るのだ 伊それは知れきッたことです、併しそ御心配になるのなら
 又助とは大の懇意ですから、何とか私が謝罪ッて來ませう』と、伊太郎は別段心頭
 にも掛けませんで、隣屋敷の彦坂の所へ、常に變りし様子もなく、入ッて来て大き
 な聲で 伊オイ又助、鳥渡顔を貸してくんねえ 又伊太公か、何の用だ 伊濟まね
 えが、旦那の留守を付込んで、床の間にあつた蹴鞠を取出して、庭で散々蹴たと思
 ひねえ、所が調子が外れて高く飛上ッたやつが、此屋敷の庭へ飛込んだが、鳥渡取
 ヲつては呉れぬえか 又手前が蹴たのか、それは大變な間違だ、俺の所の旦那が何時

になく早く歸ッて来て、縁先で涼んで居た所へ飛んで来て、横面へ打付て泥だらけ
 今に隣家から来たならば、俺が掛合ふといッて怒ッて居るのだから、俺ちやア濟む
 めえせ 伊『そんな事をいはずに友達の交誼だ、謝罪まつてくんねえな 又『それでは
 駄目としていふて見やう、待ッて居な』と、奥へ入ッたが暫くすると出て来て 又『不
 可ねえやア伊太公、足に掛たものを武士の顔へ蹴付けたのは、結局泥草鞋で踏まれ
 たも同様だといふのだ 伊『それは理窟だ、けれど夫を俺が失錯なのだから内所で濟
 ませたいと頼むのよ、一升買ふから最う一遍話して見て呉ないか 又『不可といッた
 ら… 伊『直ぐ可ける位なら頼むんぢやアねえやな 又『それぢやアお前が一所に往
 ヲて頼んで見ねえな』と嫌がる伊太郎を同道して、庭の切戸から 又『旦那様、唯今
 申上げました伊太郎といふ奴は此でございます、どうか御勘辨を願ひとう存じます
 傳『手前か伊太郎といふのは、今回は差許すが、以來は決してならんぞ、特別を以て
 今度は返してやるぞ』と、立上る伊太郎は悦んで頭を下げて待ッて居る所を、傳八

郎はッと立上り様、右足に穿いたる杉の庭下駄をば、伊太郎の前額へハタと許りに
 蹴付けた、何條以ッて堪るべき、額は破れて流るゝ血汐 伊『是れは…』と驚く伊
 太郎を、心地快げに打見やり 傳『何と伊太郎とやら、好い心地ではあるまいな、鞠
 でも下駄でも蹴付ける工合は同事だ、残念とあるならば、侍らしく立合ふか、夫共
 叶はぬことゝ知ッたなら、主人庄左衛門戻ッてから相談の上取りに來い、腕前に掛
 けて渡してやらう、併し主人の庄左衛門も、鞠などを弄んで、遊藝のみに氣を入れ
 るから、畢竟此様なことが出来るのだと此傳八郎が申したと、庄左衛門に確と告げ
 る、能い態ではある哩と、肩を助かしせ、ヲ笑ッて眼下に伊太郎を睨付けたは、傍
 らに人無きが如くであります、何にも云はぬ伊太郎は、其儘我屋敷へ戻ッて参り、
 豫て仕舞置きたる生父よりの傳來なる、不動國行の一刀を腰に帶して出て往く舉動
 を見て、庄太郎は周章狼狽 庄『コレ伊太郎、顔色を變へて何處へ往くのだ 伊』決し
 て構ひません、お前さんに關係にならないやうにするのですから、御心配なさるな

庄「それでも例になく刀を下げて出て往くとは……伊「それでも先方で、侍でなければ渡さぬといふから、仕方がありません、お放しなさい」と、止める袂を振切つて彦坂さして出て往きます、伊太郎と引違へて入つて来たのは、親父の庄左衛門故、庄太郎も今更詮方なく、打明けて一伍一什を物語りましたから、庄左衛門もどうなることかと思ふ内、庭の方に當つて傳八郎の怒聲、伊太郎も負す劣らず怒鳴合ふ有様、堀の此方に立聴けば、伊「ヤイ傳八、手前は何だ、槍の指南番だといふのを其低い鼻にかけて、人を蔑視げる卑怯者、黙つて聴て居ると何だと、主人の庄左衛門が遊藝にのみ浮身を入れるから、武士らしい掛合は出来ないと吐露したな、出来るか出来ぬか伊太郎の覺えの腕を見せてやらうか、傳「何だと己れ言はせて置けば猪口才な、無禮討にいたすから左様存せえ、伊「ゾンゼイでも町囃でも、手前の勝手の能いやうに斬つてやれば夫迄だ、斬れば赤え血の出る西瓜野郎だ、ヤイ彦坂、遺言でもして置け」と、飽迄太き伊太郎の言葉、對手に取つて面白からねど、先刻の言葉も

あるものと、今更引くにも引き兼ねて、傳「又助槍を……」と立上り、袴の股立高く取り、伊「伊太郎とやら支度に及べ、伊「ナニ、支度だと、支度などは入るものか、御指南番のお前さんでも、二太刀と合せられるものぢやアない、まアお前さんの支度さへ出来れば、いつ何時でも驚くやうな男ぢやアねえ、傳「何だと、さア来い來れ」と庭へ下れば、伊「伊太郎は手拭で後鉢巻、伊「さア無手では餘り興がないから、刀だけは抜いてやらう」と、一足後へ退つた伊「伊太郎は、まだ免許こゝろ貫はねど、辻先生が手を取つて、念を入れての教授を受けし業前なるに、傳八郎は下郎と侮どり輕んじたる事として、槍に充分氣が入らず、とは云へ真劍真槍の事なれば、萬一誤過のある時は、家にも身にも係はることゆえ、油断はせぬが、どうも張合がない、仲間でもあれかしと、思ふ心の出初たれば、矢聲もかけず突出すを伊「伊太郎は仕澄したりと、伊「エイ」と一聲、手元へ跳込むよと見えたれば、傳八郎は槍を莖短かに取直し、身を翻へさんとする途端、取直したる來の國行、叫ぶ聲の一度すれば、憐れなるかな

彦坂傳八、腦天より空竹割、眞二つになつて血煙りと共に、ドツと音して倒れたり血細雨を振つて伊太郎は、「ヤイ又助、主人が眼前に此様な死方をしたならば、嗚呼残念だと思ふだらう、敵と名乗つて来るならば、お心善に愛で、相手になつてやらうから、立上がつて勝負をしる、又どう致しまして……け……つ……して……か敵なんぞとはいひません、御遠慮なくお歸り下さい」と震へて居て立ちません、伊太郎は櫻井の屋敷へ戻り、我部屋に來つて遺書二通を認め、切腹なさんとする有様、始終を見て居りました庄左衛門の驚きは如何計りでありませう、庄何時の間か伊太郎が彼位の腕前になつたのだらう、殺すのは惜いものである』と思つて馳寄つて、庄左衛門に伊太郎早まるな、今爰で切腹したとて何の役に立たぬ、それよりは公然と訴出で、始終を悉皆役人に話して、公けに死んだ方が男であらう』との言葉、伊太郎も其理に伏して、直にお上へ自首して出ましたから、長坂血槍九郎殿が係りで調べが初まりましたが、平常から憎まれて居る彦坂の事ですから、家來の又助ま

でも伊太郎の好いやうなことばかり申しますから、血槍九郎は助けてやりたいけれども、唯其儘に助けることは出来ません、庄左衛門も種々心配して、兼て園茶の友達であります處の、下谷の幡隨院の住持三日月上人といふ名僧がりましたので、それへ伊太郎の話をすると、上人が聽いて、上それなら命乞をして見て上やうと、庄左衛門の御主人本多公と、連印の上で願書を出しました、其主意は坊主にするからといふのであります、素より長坂殿も助けたいと思ふて居られた所だから、早速御承知になつて、下谷の幡隨院へ伊太郎は下げられることになり、本來ならば是から頭髪をすり、坊主の風になつて、經文の一つも勉強しなければならぬのですが矢張持つて生れた性質で、坊主を嫌ひまして、どうしても頭髪をすりません、上人も困りましたが、其儘にして置くことも出来ませんから、花賣にでもして置ふといふので、年來門前に花賣をして居る清兵衛といふ爺父に頼み、伊太郎でも置けませんから、長兵衛といふ名を遣りましたのも、偏に命の長がからんことを祈りました

のでせう、所が此清兵衛といふ男が、以前は名代の悪者で、下谷きつこの正札付五分でも後へは退かぬといふ喧嘩の上の人殺しや、博奕の上の争から、毎度上へもお手数をかけてお白洲の砂利を踏む事も十の上を數へる位、別世界といふ牢屋の生活も五度六度數も重ねたが、幸ひ相手が入墨者とか、凶状持とか片書附とか、斯ういふ連中のみでありますから、好い鹽梅に遠島の難もなくして退けて居ました、けれど寄る年波といふものは。

花の留守年は百草といはれけり

とやらで、若い時分の悪いことは今更の如く嫌になりました、幡隨院の門前で花賣となりましたが、若い時分は太肥した男なので、人が縛號してデツプリの清兵衛といはれましたのです、此清兵衛の所へ長兵衛は引取られたのだから、例の氣質を見て取て、清長兵衛や、お前は所詮出家臭いことは出來ないのだから、一層心持の濟むやうな商賣になつたら可からう、長私もさうしやうとは思つて居ますが、どうも是

と云つて頼み人がないので困つて居ます、清愈々成る氣なら、俺が周旋をしてやらうか、長それは難有う、何所の誰です、清俺が以前遊んで居る時分に、四分六分の盃をやつて置た、花川戸の佛長兵衛といふ親分がある、佛といふ縛號を取る位だから、さして悪い事をする男ではない、此人を頼んで見てやろう、長私が長兵衛で親方にしやうといふ人が長兵衛では變ですな、清それでも仕方ないぢやアないか、お前は十八で人を殺したから鬼の長兵衛とでも云つて宜からう、佛の乾兒に鬼のあゝるのも面白いちやアないか、長ハ、ハ、ハ、左様ですな、そんなら何分宜しく願ひます』と、爰で花川戸へ連れられて参りまして、佛長兵衛に遇ひまして、デツプリア清兵衛からの物語、何分共にといふので、他の乾兒にも紹介を致してくれましたが、他の乾兒の驚いたのは、甲『呼悪い名の奴が來やアがツたぢやねえか、どうしても呼付けにすることが出來ねえな、乙何故……』甲だつてオイ長兵衛といへば親分を呼付けにするのも同じ事だ、乙成程さうだ、それぢやア鬼と呼ばふカ、丙けれどもそれも

可笑いな、オイ鬼、何處へ往ッて呉れとも言悪いではないか 甲「それでは鬼長とでも呼ぶやうにしやう」と爰で鬼の長兵衛と結號されるやうになつた、何しろ鬼といふと大層怖い恐ろしいやうに他が思ひますけれども、逢ッて見れば別段恐ろしい人でもありません、それに引換えて親分の佛長兵衛は、どうも人好の悪い男で、何でも關係をつけて、兎角は弱者を酷め付やうといふ風のある人ですから、今度の鬼の長兵衛には氣に入りません、併し一旦親分と頼み乾兒となつたものだからと諦めて居りました。

第二席

すると或日の事、爲藏に吉右衛門といふ兩人の乾兒が 爲「親分お早う 佛「何だ例になく早いな 吉「少し相談があるのですが 佛「何の事だ 爲「今日吉右衛門兄貴と兩人で、廊を素見して、江戸二の角を出やうとすると出合頭だから仕方がないといへば夫限りですが、茶屋の女中と一所に來た生意氣な侍が唾をしたのです 佛「それがど

うしたのだ 爲「私の横面へ刎かけたのです 吉「それもね親分、危忽だ濟ねえとか失禮だとかいへば、勘辨をしてやらねえものでもないが、セ、ヲ笑ふやうにして行過ぎるから、爲が黙ッて居ないので 佛「それは當然だ、爲、何といつた 爲「ヤイ氣をつける青二才め、人の面へ唾をかけて挨拶もしねえとは何だ、俺は灰吹ちやアねえといひました、スルとお茶屋の女が御免下さいまし、風が持つて往たのですから結局は此方が悪いのです、どうか御免下さいといふから、猶怒つたのです 佛「尤もだとも 吉「私が面倒だから、打て殺めと云つたんですが、どうも相手が大小名の家老か用人の二三男らしいので、巾を付たら幾等かになりさうですから、爲の野郎に號令をかけると、爲が震へて係らないのです 爲「ナーニ、震へて居たのぢやアありません、先方が侍ですから、油断を見て居たのです 吉「僞です、私は面倒だから相手手を蹴飛してやらうとすると、身を變して 爲「兄貴を投げたのです 吉「何だ馬鹿をいふな、投げられたのではありません傍に石があつたのに蹴いて倒れたのです、そ

れから、爲、掛れ〜といふと、此野郎が逃出したから……爲、イ、エ然うちやア
 ありません、兄貴が掛つても叶はねえものを、私がまた耻をさらしても詰りません
 から、一時勇氣を避けたのです 佛「何でも可いや、大概話の様子で知れては居るが
 それから後はどうしたのだ 吉「それから思案をして、男で叶はなければ女に關係を
 付ける方が大丈夫だと思ひましたから、九子尾張の提灯を持つて居たおきよといふ
 女中へ取て掛る内に、相手の若い武士は逃げて仕舞ましたから、おきよに、彼武士
 は何處の奴だかいへ、耻をかけた丈のことをしなければならぬといふと、名前を
 言はないのです、種々と嚇かして聴くと、漸く分めたのは、本多大内記の家來で、
 櫻井庄太郎てえ奴なんです、それで昨夜は別れて歸つて來たのですが、彼限りでは
 顔の上げ場がありませんし、相手が本郷森川の本多の家來だといふのですから、萬
 更でもあるめえと思ふのです、濟みませんが仕返しをして下せえまし 佛「さうか、
 櫻井とは聴いたやうな名だが、何しろ引受けてやらう」と是から兩人を連れて吉原

へ入込んで居りましたが、此事を外乾兒も聴き込んで押出しました、鬼の長兵衛
 は上州の下仁田へ用事があつて出た留守でした、三四日喧嘩もありませぬのは、庄
 太郎も怖いから入らなかつたのでありませう、恰度鬼の長兵衛が下仁田の用事を了
 して、歸つて來たのが夜の五ツ時分でした 長「ハイ唯今歸りました」と、内を覗い
 て見ましたが、例になく誰も居りません、寂として居る有様ですから 長「皆留守で
 もあるまいが」と、獨言して上つて見ると、飯焚は居眠りをして居て知らないの
 す 長「オイお竹誰も居ねえのかえ 竹「オヤお歸りなせえ、私は風呂から歸つて來た
 勢いで、寢て居りやして濟みませぬ 長「それはどうでも宜いが、皆は何所へ往つた
 のだ 竹「今夜は吉原の櫻井に喧嘩があるとかいつて出て行きやした 長「そんなに大
 勢でか 竹「相手が侍だとか云つて……」長兵衛には分りませんが、櫻井といふ二字
 が氣になりましたから、直に衣類を改めて、來國行の一刀を摺差しにして、花川戸
 から田町へ出て、吉原へ來て見ると大門際から仲の丁を一杯の、人山を築いたやう

な有様、人を押別けて仲の丁の丸子尾張の前へ来ると佛長兵衛が先立ちで、二十四五人長脇差へ反を打たせて、佛ヤイ出ろ、櫻井とやら本多の家来と名乗るからは、侍士一人前の腕前もあるのだらう、能う俺の乾兒に耻をかゝしたな、逆縁の敵討だ男らしい立合をしると怒鳴り立て、居るから鬼長兵衛は丸子尾張の臺所へ廻つて来て、女を呼出して聴くと、本多の家来櫻井庄太郎様かと、前夜よりの物語、長兵衛は幸ひに二階へ来て、庄太郎に對面して無音の情を述べ、今の身分の話をすると、庄太郎は身分が怖いから、内濟にして呉れ、金は少し位遣つても宜いからといふので譯を話して長兵衛に頼む、長兵衛も頼まれて困るとは云へ、恩人の櫻井の事なれば、表へ出て来て親分の佛長兵衛に話をして、金といふなら相當なことをといふので、佛長兵衛も乾兒が口を入れて見れば、さう無理なことも言へないから、貳百兩出すなら許してやらうといふことになりましたから、長兵衛はまた戻つて来て庄太郎に向ひ、長ざて旦那、高い者ではありませんが、相手が彼様な分らねえ奴であ

りますから、負けてやつて下せえまし、さうして再度と斯様な所へお出でがない方がお爲めでございませう、貳百兩出せといひますから、それで落着に致しませう」といふのを聴いて庄太郎は悔りして、庄「それは伊太郎馬鹿な譯だ、先方は過日無禮をして、それを此方が咎めたのだけれど、身分があるから五拾兩や參拾兩なら遣はさうと考がへたが、貳百兩といふやうな金は出す事が、長出来ぬと云つた所で、貴方は立派なお侍、先方は破落者でありますから、いつ何時仕返しをされるか知れませんが、高價でも我慢をなさいと申上げて居るのです、庄「差當つて貳百兩持つて居ないから困るのぢやア、長」それでは金子は明日まで伸して置きますから、どうかして下さいまし、私の身體に出来さへすればお立替も致しますが、何をいふにも今の身體では……」と段々諭すやうに申しましたから、庄太郎も納得をして、庄「何分頼む」といふ返事ですから、親分の佛長兵衛にいふと、佛「何か貳百兩に負けてやつた上に、金は明日といふのか、それは不可ねえ、現金で耳を揃へなければ勘辨が出

來ぬ』と跳付けた、伊太郎の長兵衛も頼には觸りましたけれども、長『ぢやア親分、斯うして下さいな、今全く持合せがないといふのですから、夫迄の所、私が持つて居ります彦四郎貞宗の刀を質として、親分に預けて置ませう、それで勘辨して引いて下さい』といふと、佛長兵衛も實は心中に彼刀はと思つて居た所ですから、佛『さう心配をするのなら、勘辨して遣らう』と花川戸の我宅へ歸りまして、鬼の長兵衛から貞宗を明朝までといふ約束で預りました、さて庄太郎は屋敷へ歸りました、口でこそ貳百兩とは申すが、父の手前もあり、即日といふ譯にも参りませんので、二三日長兵衛に届けません、佛長兵衛も別段催促もしませんから、鬼の長兵衛も済まして居たのです、佛『オイ長兵衛や』といふと、自分で自分を呼やうで可けなから、乾兒に『佛アノ鬼を呼んで呉れ』と吩咐けた、長『何か御用ですか、佛』さうよ、櫻井の金はまだ來ねえのか、長『どうも済みません、どうしましたか、佛』済まねえ次第もないのよ、俺の方には貞宗といふ刀が流込みになつたから宜いが、手前が

それでは困るだらうと思ふのだ、長『何です貞宗が、佛』さうよ、明日の朝までといふ約束だから、それが届かなければ、流質といふのが當前ぢやアねえか、長『親分申戯を云つちやア不可ません、彼は先祖代々の寶物で、私の家になくてかなひません刀です、佛』其大事を知つて居るから貳百兩の抵當にしたのよ、それで金が來ないから流込んだと分明て居るぢやアねえか』と口論になりましたのを、傍に聽いて居りました今戸の小吉に庵崎の半六が、少『親分、可憫想に鬼は正直者ですから、眞赤になつて居ます、好加減にして刀を返してやつたら宜うござんせう、佛』手前達は變なことを吐露すな、金の抵當に預つて居る腰の物だから、貳百兩さへ出來れば返してやるのよ』と、更に取合ひません、而已ならず金子より刀の方が宜いといふ有様が見えるので、鬼の長兵衛も心配ですから、幡隨院の三日月上人の處へ來て、右の物語をいたしますと、上人も氣の毒に思ひまして、貳百兩貸してくれましたから、直に花川戸へ來て、長『まア漸く金子が届きました』と出すと、佛『さうかそれは大變だ、

實は昨夜の事だ、彼刀と俺の金剛兵衛盛高と盗まれたらしいのだ、それも今し方氣が付いたので、馬鹿な話だ。長「デモ今朝程刀掛けに掛けて居りました。佛「それでもないから仕方がないや」と、空嘯いて居る、鬼の長兵衛も餘りの事と、飛掛からうとは思たツが、親分乾兒と名のつくものをと、何にも云はず花川戸を飛出して、幡隨院前なる清兵衛の所へ來つて、大略の話を致し、斬て捨てるからと斷りますと、清兵衛も驚入りました。清「俺が盃を貰つてやつたものだから、一所に來い、穩便に話してやらう」と、長兵衛を連れて花川戸へ來て、佛長兵衛に話すと、取つても付かぬ返事。佛「盗まれたから仕方がない」と跳付ましたから、清兵衛も。清「成程鬼の怒るのも無理はない、鬼の心が佛に似て、佛の名のある長兵衛に斯様な心があるとは情けない奴だ」と一言もなく表へ出やうとすると、庵崎の半六が尾いて來て、半「清兵衛親分え、私共の親分は氣が違つたんぢやアありませんか、私も愛想が盡きましたから、今日限り暇を貰はふと思ひます。清「彼刀は持つて居るか。半「居る所ぢ

やアありません、明後日信州の木曾の高市へ出立するのです、それから伊勢參宮をされるといつて居ました」と聽いて清兵衛は鬼の長兵衛に告げて、心任せにしろといはれましたから、伊太郎の長兵衛も最う我慢が出來ず、其夜は清兵衛方へ戻つて、花川戸へは寢ません、其翌日早朝に佛長兵衛を一刀に斬らんずものをと、庄太郎より借受けたる、紀の新太夫行定の一刀を腰して來て見ると、最早不在、表戸は締切つて影も形もありません、庵崎へ來て半六に聽くと、半「實は昨夜の内に佛の奴は出立をした、已に盃を返したからモ一構はない、若長兵衛を斬るならば俺が證人になつてやらう」と、煽動るやうな工合。長「それでは案内を頼む」と半六を先きに立て信州の木曾の有名な、蹴付けの高市といふのに乗込みましたが一山不入同様な有様で、七日の市は手を入れませんか、諸國から集り來る親分、顔役と呼ばれる人計りが、仲々小人數ではありません、江戸からも其頃名代の大親分、唐犬權兵衛、金神長五郎、夢の市郎兵衛などいふ人達も集つて、親分と名の付く者は皆出張て居り

ます、所へ鬼の長兵衛が来て見ると、明日から塔場を開くといふので、皆夫々宿屋を取つて居る佛長兵衛の泊つて居りますのが、讃岐屋又兵衛と申すのでございませう。それへ鬼の長兵衛は呼出しをかけた、尤も鬼の長兵衛が来たとはいつてやりません、他の者の名を假りたのです、往來へ佛の長兵衛が知らずに、出て来る所を物陰より鬼の長兵衛が出て来て、貞宗の刀を返へせと促しました、佛長兵衛は笑つて佛「盗まれたものゆへ仕方がない」と、白を切つて逃げんとするのを、庵崎の半六が「生た證人だ」と飛出しましたので、流石の佛も進退谷まり、辯解の仕様もななく、逃げんとするを、鬼長兵衛は斬付ける、今はハヤ是非なしと、佛長兵衛も扱合はせる、所へ唐犬權兵衛を始めとして、夢の市郎兵衛、金神の長五郎、放れ駒の四郎兵衛など七八十人を引連れて出來り、グルリ周圍を取巻いたり、庵崎の半六は大聲に「親分方へ、是には仔細のあることゆゑ、お助太刀は御用捨を願ひますと云ふたのは、佛長兵衛へ加勢だと思つたのです、所がさうではありません、デツプリ

清兵衛が先きへ来て昔馴染の放れ駒四郎兵衛に詳細を話したので一統が聽いて『それは甚だしい譯だ、俠客者の面汚しといふのは佛長兵衛の事だ、尤も彼は舊悪もあるし、佛に歸依して、改心したといふので出牢仰付られ、それから佛と緯號に呼ばれるやうになつたのだが、又本根を吹いたと見える、清兵衛さんなら嘘をつくことはあるまい、何しろ鬼でも相手が相手だから、俺達一同助太刀をしてやらう』といふので出て來たのですから、其趣をデツプリ清兵衛から話したから、庵崎も大に喜びました、鬼の長兵衛も矢張敵だと思つて居たのに、さうでないといふので、遂に他界の人となりました、さて佛の死體は乾兒が引取りたいといふのを、鬼の長兵衛が貰受けて、同所の寺へ葬り、涙を流して「長親分子分の縁を結びながら、斯様事になるといふも宿世の因果か私の業か、どうぞ御勘辨を願ひますと、墓前に伏したるまゝ、起上からぬやうですから、一同も此事を傳聞きまして、大層感心しまし

て、佛長兵衛の乾兒達は改めて鬼の乾兒になりたいたい、盃を貰ひたいといふことになりました、又所の代官へも俠客が手を廻して内濟といふ事に致し、腕前の出来る所に惚れて、權兵衛、長五郎、市郎兵衛も四分六分の盃の獻酬をして、佛長兵衛の持場を取持ッて呉れました、長兵衛も否哉がいへませんから、皆のいふ通りになッて高市が濟みましたから、江戸へ歸ッて、幡隨院店に世帯を持ッて多くの乾兒を取上げて居りました、スルと其頃大名と旗本が大層に軋轢致したもので、旗本の方の議論では、全體旗本といふものは徳川が累代續いて居ればこそ、我々も斯うして居るので、一朝徳川の家が瓦解をすれば、之れと共に斷絶をする、然るに大名は何だ、織田の熾んな時は信長に諂ひ、又豊臣の世の中となれば秀吉をば戴き又御當家の御代になれば來ッて奉公をする、内股武士といふべきものだ、我々は小祿を取ッて居るから、幸い大名に喧嘩を吹掛けて斬合をすれば、兩成敗は當前だ、兩方斷絶をする事になれば、旗本は三千石か四千石だけれど大名は一萬石から百萬石までである、

猶精しく調べたら、内高二三百萬石位のものもあるだらう、其が將軍様の懐中へ入るとなッたらば、泰平の奉公としては此上もない忠義だらう』といふのが起因で、公方の尻押組、四谷六方白柄組、大小神祇組、なんといふ名を命けまして、無暗と大名へ喧嘩を仕掛けます、水戸の盲目長屋と申して、窓をなくなしたのも此時からだと申します、ヤレ近藤登之助が仙臺候を擲ッたとか、松平紋太郎が池田をへこましたとか毎日のやうに喧嘩が出来て仕方がありませんので、大名衆も相談を致して町奴といふ防ぎを抱えることにしたので、ソコデ先づ最初本多様から長兵衛へお頼みになッたのです、それから池田様が夢の市郎兵衛へ頼むといふことになりましたから、大名と旗本の喧嘩が、町奴と旗本との喧嘩と變化をしたのであります。

第三席

さて鬼の長兵衛、佛長兵衛の後を引受けてから、幡隨院店に居りましたから、人緯號して幡隨院長兵衛と申します、劍術の腕前は充分だし、それで慈悲が深いから乾

兒は殖える計りであります、恰度夏の事で長兵衛は七八名の乾兒を引連れて、江の島の辨天へ參詣をした歸りがけに、川崎の萬年屋へ来て、今夜は泊ふか、まだ早いけれどもと、大勢と共に足を洗って居ると、向ふの方に居る色の白い相撲取が其家の番頭に向つて「相撲取の口から斯ういふのですから、番頭さん、負けて貰つて下せえまし、誠にお耻しいことで……」番「それは僅の事ですから、旦那も何とも言ひもしましけれど、無ければ無いと最初から話してくれば宜いのだ」相「どうも誠に濟みません」といふのを長兵衛が聽いて居て「番頭さん、大きにお世話だかどうしたのだえ」番「へい、彼關取さんが飯を食って終つてから、錢がないから借して呉れろといふので……」長「ハ、ア餘程御難だと見える、アノ關取を呼びねえ、オイ、關取此方へ來ねえ、お前は誰の弟子で何といふのだえ」相「私は珠數の音南無右門の弟子で櫻川五郎藏と申すもんでござんす」長「江戸相撲だな」櫻「ハイ、甲州から岩淵を下つて、府中へ出て興行をして居りますと、一人しかございませぬ母が大病で

頼み少ないから早く歸つて来てくれといふ手紙が届いて居ましたので、親方さんから無理に暇を貰つて、今漸く歸つて來たのですが、實は餘り急いだので、財布を落したと見えまして、此家で拂ひをしようと思ふと無いのです、此身體で錢がないとも言ひ憎いが、どうも背に腹は代へられませぬから、今頼んで居るのです」長「家は何處だい」櫻「入谷田甫の半程でございます」長「それは氣の毒だ此金は少ないが母親へ何か口に合ふ物でも買つてやつて下さい」と、長兵衛から五兩遣りましたのを乾兒が見て、二兩三兩と各自に遣りましたから、忽ち十四五兩となつたので、大層悦びまして、幾度か禮を述べ、取急いで出て行きましたのを見て、傍に居た兩人連れの男も、後から立つて往きましたのを、番頭が見て居て「番親分様、佛造つて魂入れずといふことをしましたね」長「番頭さん何故だえ」番「二人飯を食って居たのは向ふから來たのですが、それが又後へ復つて往きましたから、大方仕事にされるのだらうと思ひます」長「それは大變だ、駕を一挺さういつて皆は後から來い」と、機敏

い長兵衛は、直様支度をして駕へ乗り、後から飛ぶやうにして出掛けましたが、歩行を習慣にして居る小相撲取ゆる、仲々追付がれませんでした。駕屋も二度計り息を入れて、鈴ヶ森へ来ましたのが、恰當日が暮れた計りでした、折しも大勢の人聲が聴えるので、駕屋を遠ざけて長兵衛が來つて見ますると、一人の若い武家が七八人の賊を斬倒して、刀を鞘に納めやうとする所でした。長「暫くお武家……」と聲を掛けましたので、彼の若い侍、恠り致し、武「何か御用で御座るかな。長「イヤ別段でもありませんが、唯今のお手の内、餘り見事さにお問ひ申しました。武「是は、御見物に預り、恐縮致した、實は此へ通り掛けると、一人の相撲の路用の金を奪取り、身のまはりまでをも剝取らうと致すのを見て、餘りといへば憎くき奴原、將軍家お膝元間近なる鈴ヶ森に斯様な悪人が徘徊致せば、將軍の御威光薄きにも似たりと心得、ツイ匹夫の勇にはやり申して、斯くの如く、イヤ面目次第もございませぬ長「實は私は下谷幡隨院店に世帯を持つて居ります長兵衛と申す町奴、鎌倉より

の戻りがけ、恰途中で小角方の親孝行に感心して、少しの金を遣はしましたが、道中の物騒を聞きしゆる、後を追ふて參つたのですが、シテ先生は何國のお仁武「因幡鳥取の浪人にて、白井權八と申す者。長「是から何方へお出になりますので權「仔細あつて國表にて武士道より已むなく人を殺せし者故、今は日蔭者にて行方さへ定まらぬものでござる。長「それならば兎も角も私方へ御同道を……」と話して居る所へ、乾兒は大勢續いて來り、櫻川の衣類金子を一つにして、直に届けて遣なければと、駕にて江戸へ戻り、其金と品を届けてやつたが、翌日母は没しましたので、櫻川の歎きは一ト通りではありません、長兵衛も之れを聴いて、どうせ俗にいふ乗掛つた船だから、後の世話までもしてやり、櫻川を毎日家へ連れて來ては、強くなければ往かんのが相撲だ、誰とでも取つて見ると、大層魚負にして居る、所が茲に金町の平五郎といふ男がある、是は葛西郡の素人相撲の大關を取つて居た男でそれが先立ちで庭に土俵を積んで櫻川と稽古をする、五郎藏は漸く三段目の中程に

居る力士で稽古も怠らすするが、相撲は未だ強くないですが、親孝行の徳で大層長兵衛が肩を入れて、権兵衛や市郎兵衛に紹介させて呉ましたから、弱きを助くる町奴一統が氣を入れて本人にも勵みを付け、早く二段目に上がる様、又幕の内に成る様と、最負にするから、自然場所も働ける、仍で滅切々々出世して、二段目へ上ると、町奴一同よりは衣類羽織が出来るといふ、處が人氣だから相手の弱さうなのを選まふといふので、愈々本場所が始つた初日に、兩横根で今吹切らうといふ奴を出しましたから、櫻川は唯一突で勝つ、二日目がりヨウマチス、三日目が脚氣といふので宛然病院の受付みたいな工合ですけれども、妙なもので、相撲は土俵へ出た時の人氣で、櫻川ア〜とでも聲が掛ると、非常なる勢ひを増すものでして、櫻川は今度の場所では全勝といふことになりました、長兵衛は喜こんで、長『どうか來年の冬場所には二段目の頭にしてやりたい』と氣を入れて居ると、最負の力は恐ろしいもので好い工合に俗にいふ貧乏神、西の二段目の關取分まで出世致しました、所が其時分

の東の大關といふのが、旗本の水野十郎左衛門、近藤登之助などが最負に致して居ります大驚勘太夫といふ大兵な男です、所が其翌年の冬、深川八幡境内で大相撲興行となつて、初日が突然大驚と櫻川の顔が合ふといふのでございます、五郎藏が長兵衛の許へ來つて、櫻親分さん、今迄此弱い櫻川を、是迄の相撲にして下さいました御恩は何程だか分りません、其御恩返しには、せめて旗本の最負にして居る大驚を、土俵の砂へ埋めでも致さなければなりませんのですが、是は到底出來ない相談、明日は八幡で顔が合ひますけれども、御見物はないやうに願ひます長『さうか念の入つた事だ、横綱でも張らうといふ勘太夫と、どう互角に相撲ものか、若明日皆が往かうといつたら止めるから宜い、けれど櫻川、負けても拙いことはやるなよ、烈しく突いて出足で負けるなら知らず、自分の出た溜りの方へ抱出されるやうな事のないやうにしろよ』と吩咐けました、一方の水野の屋敷でも、町奴には長兵衛に限らず、度毎に喧嘩で遅れを取つて居るところですから、大驚を呼

んで 水「明日は初日たさうだが、相手は大概知れて居やうな 大「ハイ素人衆には三日目からでなければ顔觸れは分りませんが、二段目の十兩取までへは顔觸れが来て居りますので 水「さうだらう、さうして相手は誰だ 大「櫻川といふ奴でございます 水「町奴共が肩を入れて居る櫻川か、負けるなよ 大「へエ御前様、大關でございませう、二段目の關に負けるやうでは、年來の横綱は覺束ないやうです、大方明日は町奴共が揃って見物に参りませうから、其見物の来て居る方へ連れて行つて、振つてく振廻し、當分土俵へ上がれぬやうにしてやらうと心得て居ります 水「それは何よりの事だ、まア前祝ひに一杯やれ」と、徹夜同様に酒池肉林、鶏の鳴ふ時分に我家へ戻てまゐります、櫻川は待たぬ夜の明易すく、忽ち告ぐる明けの鐘、八聲の鳥に起されて、支度をしても氣は進まず、例諸方へ寄るの日に、今日は何處へも寄らずして、深川なる富ヶ岡八幡の境内へと出掛けます、町奴の頭がかつた連中が、幡隨院店へ来て、誘引ますると長兵衛が 長「今日は相撲は見たくねえ、夢の市

兵衛が 市「何故 長「ダツテ大鷲と櫻川だ、所詮敵はない相撲を見て、腹を立って歸るより、往かねえ方が増だらうと思ふせ 市「けれど初日だから其勝負は仕方かねえとして、外に見る相撲があらう 長「俺は心持が悪いから、今日は御免だ 市「それぢやアどうする」と相談をかけると、唐犬の權兵衛も金神の長五郎も『さうよ、幡隨院のいふのも理窟だな』と厭氣がさしたから市兵衛も 市「それぢやア一層止して、一杯飲まふか 幡「それが宜からう」と、酒になりました内に、談話も尾に尾がさいて、夕暮方になりました、スルと表から金町の平五郎が入つて来て 平「イヤ皆さんお揃いで有難い、どうですえお目出度… 市「何だか平五郎のいふ事は狐を馬へ乗せて狸が馬士をしたやうな工合だな 平「唯嬉しいのが先きへ立つて、口が利かせんのです 長「何を… 平「今日の相撲は十が一でも勝目のない大鷲と櫻川です、昔私も素人相撲を取つて歩いた者だけに、唯負けるツてこともあるまい、又後の顔合せの時の参考にもなりますから、二三人誘ふて内證で往つて見ると、旗本が惣揃に

なツて、鼻を齧かしての見物、其内に結びの相撲になツて、大鷲と櫻川の呼出しに
 なると、五郎藏の人氣も廣大なものです。櫻川くといふ聲で豊になるかと思ふ
 計りさ、大鷲といふものが少ないから、私は内々悦んで居ると、大鷲は其譽言葉の
 かゝる方を見てはニッコリとして、今に見なさい、勝負は知れたことだと云はぬば
 かりの顔色をして居るので、皆残念がつて居るうちに、櫻川は立が早いか、爰と思
 つた所があつたと見えて、ツと立つと、唐犬の親分濟まないが、斯ういふ工合に
 前袋を一本引いて、大鷲の左を殺して立た所は好い相撲になりましたね、櫻川それか
 らどうした、平「スルと大鷲の奴がさした腕を充分門に付けて、櫻川を振らうと
 したので、平「ナニ、櫻川を投げたと、平「イ、エ、それから櫻川を付けたまゝ、棧
 敷の方をキヨロく見廻はして居たのは、親分達が来て居るか来て居ないかといふ
 のを見て居たらしいのです、其油断に櫻川が差手を抜いたので、大鷲が自分
 の力に餘されて、少し反身になりました、平「其所が好かつた、反身にな

つた處を一ツドンと突つて渡し込むといふ手もありませうが、私は突くな、突くな
 つと思はず怒鳴りましたが、櫻川も下手でありませぬから、突すに待つと、大關でも
 周章では仕方のないもので、前へ出て来る所を此手を爰へかけて、左を爰へ逆ひねり
 といふやつで、充分にドツカリと音がして……橋「ア、痛えく、金町俺を投げた
 な、平「オヤ濟みません、話に身が入つたものですから……橋「申戯しちやア不可ね
 へせ、飛んだ災難だ、併し勝たと聴けば何よりだ、それから後は……平「櫻川が悦
 んで両手を高く上げて、土俵を廻ると、纏頭が土俵を埋めるやうに降つてくる、羽
 織や衣類を投げる、直ぐ脇で古着屋が始める、市嘘を吐け、平「旗本一統は青菜に鹽
 で、コソく逃げるといふ有様さ、長「櫻川には誰れかついて往つたか、平「イ、エ
 長「直に家へ歸つたか知ら、平「客があつて外へ往つたとかいひましたが、今に大方
 来るでせう、長「それは大變だ、手前直ぐに腕の出来る奴を連れて、櫻川を探して俺
 の許へ連れて来い、殊に寄ると大鷲が、櫻川を其儘には置ぬかも知れんテ、市「それ

は好い所へ気が付いた、平五郎俺の家の小午田の田松と、神田の徳を連れて行け、
 四「俺も一所に往かう、長」放れ駒が一所に往つてくれ、ば心配なした、少しも早く：
 ……四「よし合點だ」と出て往きました、成刻か亥刻になつても歸つてきません
 から、不思議だと又迎いをやりましたが、俗にいふ木伊乃取りが木伊乃とかいふ譬
 で、返事が更にありません、耐え兼ねて夢の市郎兵衛も唐犬權兵衛も金神の長五郎
 も出て往きました、後に長兵衛一人案じて居る所へ、庭の切戸を叩くものがありま
 すから、長「誰だ〜」櫻「五郎藏です」狸がものをいふやうに、長「ナニ、五郎藏だと
 ……」怪しみながら切戸を開くと、パツタリ倒れましたは櫻川、長「やア確乎しろ」
 と、耳へ口を付けて呼びましたが、唯モウ眼を開きながら長兵衛の手を堅く握つた
 まゝ物をいはんとすれど唇硬ばり、其儘往生なしたるは、さてこそ深傷と相見えた
 り、長兵衛は死體を抱入れ、密と殘留の乾兒に命じて改め見れば、如何に正面よ
 り二ヶ所、後より竹槍の如きものにて突きたるならんか、下腹部の邊より鮮血の流

出でたる有様、尋常の者なりせば、爰まで來るとも叶ひ難かりしならん、何處にて
 争ひしにや、血痕を慕ふても分らぬことはあるまじと長兵衛は支度に及び抱ひを一
 人引連れて立出でたり、入谷の櫻川の宅の近邊まで來て見れば、暗の内に眞劍の音
 さへ聽えて、烈しき有様なるにぞ、何の喧嘩か仔細は知らず、大方それとは心付け
 ども、敵味方の區別さへ分らねば、抱ひに吩咐け、其近邊の百姓家から役に立ぬ古
 兩傘を四五本取寄せ、思ひついたる早速の松明、二三ヶ所に焚立てれば、初めて物
 の色は知れたり、見ると覆面の武士七八人を相手として、權兵衛市郎兵衛を初めと
 して、皆一刀を引抜いて打合ふ最中なれば何かは以て猶豫すべき、長兵衛も抱ひも
 プラリ一刀引抜き躡込すで斬廻る、持て餘し居たる所へ長兵衛等の新手を加へし事
 なれば、相手は避易して、何處ともなく逃去ツたり、金町平五郎を呼んで聽くと、
 平五郎は櫻川の跡を聽くと、行つた先から駕に乗り、入谷まで送られたとの事だか
 ら、追掛けて來て見ると喧嘩をして居る、市郎兵衛長五郎は入谷を指して來て見る

と此有様ゆえ、直様加勢をしたんだといふ、様子がスツカリ分つたから、兎に角四邊を調べると、調べて見ると相手の死骸に内に、旗本水野十郎左衛門の家來、卜部の清藏といふ者も居るし、大鷲勘太夫の弟子も四五人死んで居るから、さては愈々昨日の相撲が喧嘩の原因かとは知れたが、櫻川も死んで居るのだから、先づ敵を討つたといふやうなことになる、一同は其儘引上げて來ました、又相手方なる水野の方でも其夜の内に死骸の片付やら何やら致して了つたから、表沙汰にはならんでしたが、併し撃てば響くの道理、況して二日目から大關と貧乏神が出場ないのですから、バツと此噂が世間へ立つて、其度毎に旗本の評判が宜しくありません、町奴も何かあつたら勘辨するものか、眼に物見せてくれやうと思つて居ると、恰當兩國の河開き、五月廿八日は晴天で、星を蒔いたやうな工合、極く暑つて宵からは所詮寢られぬといふ詭向き、町奴の夢の市郎兵衛、唐犬權兵衛、金神長五郎外七八人が、大傳馬三艘で花火を見に往き、大間の一ツ手前へ舟を繋いで見て居ました、スルト

二間程先きに繋つて居たのが、旗本の水野十郎左衛門を始め、近藤登之助、松平紋太郎、加々爪甚十郎などいふ連中で、飲めや歌へと騒いで居るのを見て長五郎が長「見ねえ大層來て居るワ、今入つて來たのは公方の尻押組だ、此櫻川の仇だ、何か意趣返しをしてやらう、權何か理窟を先きへ付けてやりてえな、長何か旨え事はねえかしらん」と、話をして居るのを、長五郎の乾兒の三軒家の又八と、牛若小僧と異名を取つた火事師上りの小屋の軽い爲吉といふ奴が兩人、任せて置きなせえ、驚かして遣る」と引受けた。船の漕げる連中計り七八人、腕の出来るのを呼上げて、小舟へ乗つて出て往きまして、水野の連中は、今酒が盛りになつて來て、面白く飲掛ける鼻の先きへ、糞船が一艘無理に狭い所へ入つて來た、それも宜いが蓋がしてありませんから、臭氣がする、其上田舎調子の野良聲で怒鳴るから、邪魔になつてなりません、侍「ヤイそんなに船を此方へ持つて來ては不可ない、甚だ臭い、馬鹿め甲「何だと、何が臭いんだ、そんな船とは何だ、俺はお肥料様といふ大切な物だ、第

一是は皆人間のしたものだ、それを臭えもねえもんだ、失禮な事をいふない、ヤイ』
 といふと、肥船の柄杓を取つて風上で搔廻はしたから、彌々鼻持ちがなりません、
 侍『無禮討に致すぞ 乙何だと、生意氣な事を吐すな、臭いといふが傍ではそれ程で
 もないぞ』といふなり肥杓子で一杯旗本の乗つて居る船へドツブリと明けた 侍『是
 れはく』と計り立騒ぐ、猶又二三杯肥を明ける、侍達は怒つて、此方の船へ近づ
 かふとすると、此方では、ヘン来るなら来て見ろ、其内にやア河へ飛込んで、船の
 底へ穴を明けて沈めさせるぞと云つて居るうちに船の底へ穴を明けたと見えて水が
 入つて来たから、侍は騒ぐ、女子は泣出す、船頭は鎮める、仲々の騒ぎ、此方は町
 奴の連中が『酷い事をしやがるな、併し心持が好いな』と手を叩いて喜びました
 旗本はソコくにして河岸へ船をつけさせて、お馴染の料理屋で、お召換えやら御
 入浴やら、髪結を呼べの、香を焚けのと大騒ぎ、町奴は大得意で、船を牛込の揚場
 で上り、市郎兵衛は仲阪下牛ヶ淵に居るのですから長五郎權兵衛に分れて乾兒の者

を連れて 市『酷い事をやつたぢやアねえか 甲』デモ當前ぢやア面白くないから、糞
 船の船頭に二歩やつて、悪口をさせて糞をまかせ、私と金太が船のシキへ穴を明け
 たのです、風變りの仇討を遣付けたのです』と自慢がてらに話して往くのを、出合
 頭に近藤、阿部、加賀爪の人々が聴いたから、扱はと思ふと理窟もなく、刀を抜い
 て斬つて掛りましたから、市郎兵衛も是はと驚いた、素より喧嘩には慣れて居るこ
 とゆる乾兒と共に左右へ別れ、同じく刀を抜いて、爰で喧嘩が始まりました、然る
 に長兵衛は此日は花火を見には行きません、屋敷の人の出入の事で、夢の市郎兵衛
 の所へ来て、花火の歸りを待つて居ります、スルト中坂下組 橋の川岸で今旗本と
 喧嘩をして居るといふ注進があつたから、支度を致して長兵衛は其仲へ割て入り、
 長『まア旦那様方、お待ち下せえな、オイく皆控えねえ、何だ公儀のお直參へ對
 して、失禮といふ事を知らねえか、旦那様方、此様な吹けば飛ぶやうな町奴と喧嘩
 をなすつた所が、勝つは當然、負ければ又斯んな割合の悪い事はありません、今夜

の間違ひはどんな事かは知りませんが、元はといへば大名衆へ町奴が出入をしたのが初まりで、大鷲と櫻川が枝葉となつて居る事は知れ切れた話、ナニ私共は命が幾個あつても足りない身體計りですから何共思やアしませんか、萬一表向きの喧嘩になり、幾十人の死人怪我人が出来た日には、旦那方の命計りではなく、扶持高にも及ぼしませうが、然う致しますと、御先祖様へ大の不孝、以來斯様の事のない様に願ひとう存じます 近「イヤ其方は幡隨院の長兵衛か、物の理窟は分つて居れど、既に其方が先達我々へ喧嘩を仕掛けて居るではないか 長「飛んでもないことを仰有ります、私共には決して左様な事はせしませんが多くの乾兒共の内には、事理の分らぬものがないとは必ず申上げられません、若旦那様方が町奴には構はぬと意地をお捨て下さるならば、町奴一同より揃ふてお詫に上ります、尤も御銘々のお屋敷へは出られません、何所へでも御差圖に従ひまして出ますから： 近「其方計りさう申しても、他の者が何といふか分るまい 長「イエ得心の參るやうに致します 近「然

らば某も朋友へ申送り、右様の計を致すであらう、萬事其方へ任せ置く」と、登之助等は立去りましたといふのは、今夜の悪洒落で困りましたからの事です、ソコデ左右へ引分れて、市郎兵衛の所へ来て長兵衛が、今夜の様子を聞いてさといふやうに長「何しろ今夜は少し大人氣ない次第だ、以來は旗本へ楯をつく事は止て貰ひ度、といふと俺が弱くなつたと思はれると困るので、先一通りの話をするから聞いて貰ひ度、實は此間町奉行所から、用があるから来てくれろといふので、私が出て見ると此間の入谷の喧嘩の一件が内密知れて居ると見えて、近頃旗本と其方等の間に、何か葛藤を生じて居るやうに思はれるが、能く事の始末を考え見よ、旗本の品行に就いては、多少非難する所がないではないけれど畏多くも曇祖權現様の仰せには、そも安城山中以來鎗に血を塗り、艱難に皮肉を削り、渴しては溝渠の水を飲み、辛苦を嘗めし甲斐もなく、食祿は外様大名などに比して至つて尠なければ、必ずや旗本の家格は、大略な横着があらうとも改易致すまじくとの御遺言なり、左れば當三代

將軍に至るも御祖父の御遺言をお守り遊さるゝ事を見て、旗本は之れを好き事に覺えての亂暴狼籍、然るに近頃其方等との争ひを見聞して、尤もには思へども、小の蟲を殺して大の蟲を助けるとの議論になれば、町奴といふものは江戸市中に廢せられ、其頭立ツたるものへは、相當のお咎めもあるべきかと心得るに依つて唯今の中に旗本等と仲を直し、穩便に取計ツたら宜からうとの御内命故、實は其相談もあり旁々來たのだ、夫故今の喧嘩に、幸ひといふのも可笑いが、斯云ツて仲直りを入れたのだ、』と悉皆話しましたので、此に相違ないのですから、市郎兵衛始め成程さうかと仲直りの事を承知いたしました、又た一方の旗本の方でも總集會を致して此相談に掛りますと、小普請組の頭から使者が參ツて、『近頃町奴との争論を見るに、兎角仕掛けることが多いやうだが、甚だ之れは宜しくない、譬へ町人より仕掛くるとも斥けるが武士の勤めといつて宜しい、若町奴の命知らず共と喧嘩の末、命にも及ぼす時は、如何様なる身を以て上へ御奉公を致し候や、能く相心得られよ』と

の達でありました、其所で水野十郎左衛門の屋敷へ町奴一同を呼出して、是迄の事を叱言をいッて濟ませやうと決定しました、結局叱言をいふのが仲直りといふ事なのです、何しろ天下の旗本と、江戸の顔役との仲直といふのですから、仲々大したことをごさいました、此和解で濟めば能いのでございますが、腹から洗ツて清淨にしたのでないのですから不可ません、其頃丁度木挽町の山村座で假名手本忠臣藏の狂言が大當りでした、七十五日も百日も打通したといふ程の大入でした、所が唐犬權兵衛の乾兒で唐茄子の嘉兵衛といふがありました、鼻の先きに赤い菊石があツて錢が吝ツて、守錢奴だといふので、唐茄子といふので、唐茄子と綽號を呼ばれるのです、それと長兵衛の乾兒で金町の平五郎の兩人が、一杯機嫌で此劇場の前を通掛ツたのです、唯今では芝居にありませんが、其以前は雨天でなくとも合羽を着まして客を引いて居た人があります、通稱合羽と之れを申します、合親分どうです唯今が丁度見頃はからが四段目、判官の切腹ですが、鳥渡如何です』と進められました

嘉『どうだい、一幕見やうか 平『萬更でもないの』と、二人が木戸から入って、七間の末の方へ入れられました、役者の聲も碌々聞えませんが、何だか面白くありません、所がヒヨイと右の方の棧敷を見ますると、水野十郎左衛門を始めとして、近藤登之助、松平紋太郎、加賀爪甚十郎と七八人揃って飲みながらの見物であります、餘程酒も廻って来たと思えて、水『イヤ唯今の判官が腹立は定めし残念であつたらう加『師直の悪體さは、町奴長兵衛に似て居るやうだ』と、一人が言へ 二人三人、ガヤ／＼言初めました、平五郎と嘉兵衛の耳へも入りましたが此方は酒の酔の醒めかゝって来た所ですから、何共言はず、其れにはまた長兵衛の教訓もありますから黙って居る中に、頓ての事四段目になると、御案内の通り茶屋の者も来ませんから寂として咳拂ひさへするものがありません、それにも構はず旗本連中が怒鳴って居りますから 嘉癡に觸るな平兄貴…… 平『イヤ、俺達が居ると思つて居ればア、は言ふまい、陰で言ふなら將軍様の事さへ悪くいふものもあらうから、仕方がない

と諦めねえな』と鎮めて居たのですが、外の者にも騒々しいので、中には旗本だと思つて遠慮して我慢をして居た人もありますが、氣の早い江戸ッ子は『騒々しいやい、そんなに喋舌りたければ外へ出る』位なことは言ひます、それを水野の家來で四天王だと異名を付けて威張て居る公時金平、渡邊綱右衛門が聽いて 兩人『侍に向かつて失禮だ』と怒りましたが、何處で言つたのか分りませんのに、突然渡邊の綱右衛門が棧敷から下りて、花道を大手を振りながら通ると、其時分は土間が板敷ですから、疊半疊位に切たものを客に出して敷かしたのださうです、舞臺で役者が氣に入らぬ事でもすると、其半疊が飛んで来たりすることがあるので、半疊を入れるといふ言葉が今でも残つて居るのです、誰が投げたか知れませんが其半疊が一枚、歩いて居る渡邊綱右衛門の横面へピシヤリと當つた、唯でさへ怒つて居る所だから猶々腹を立って 綱『誰だ、俺へ失禮千萬な、斯様ものを打付けたのは……』と見廻はして居る、生憎其下に居たのが金町と唐茄子の二人でした、顔は知りませ

んけれども、風體が町奴でありますから綱、ヤイ手前達だらう、打付けたのは……平『イ、エ、御申戯を言ッては不可ません、私共は御覽の通り兩人共半疊を敷いて居ります、それは向ふの方から来たのです。綱『黙れ、汝は町奴だらう、サア尋常に氣に入らんのなら敵手になるから立合へ』と二人と侮ッて喧嘩仕掛、平五郎は頻りに詫て居る内に、木が入ッて五段目が明くと面倒だと平『それぢやア旦那表へ出てゆるりとお詫を致しませう』と嘉兵衛に目配をしたのは、表へ出たら逃げて仕舞へといふ心なものでした、それを唐茄子が組打と判じたものです、表方も町奴といふのは承知して居るから心配して居る、綱右衛門は然らば表へ出やうと、表へ出るなり嘉兵衛は突然綱右衛門の足を取ッて引倒し、穿いて居た下駄で綱右衛門をばボカボカ殴りましたから、公時の金平が見て金『己れッ』と一刀を引抜きましたから、劇場の表ゆる何堪りませうワイ〜といふ大騒ぎになつた『喧嘩だ〜』東奔西走一反の布を裂くかと思ふ計り、折柄金神長五郎、夢の市郎兵衛は山村座の劇場茶屋

大和屋へ来て、五六人連れで劇場へ是から見物に往かうといふのを茶屋の女房さんが、女まア親分一杯飲あがッてからでも宜うございませう』と、酒を出されて迷惑ながら嫌とも言はれませんが飲始めると今の喧嘩、敵手は誰だと聴くと、市郎兵衛の乾兒と長兵衛の乾兒だといひますから、市郎兵衛が市『困ッた事だ、又旗本と紛争を起すと厄介だが……』と来て、見ると金町の平五郎と唐茄子の嘉兵衛は何處へ行ッてか逃て了ッて、後で見物が大勢、甲『馬鹿野郎め、相手を逃して居らア、乙』ダカラ餘り戯れずに食ッて了ふといふのだ』長五郎も市郎兵衛も逃げて了へばそれきりになつたんでせうが、捨てゝも置かれぬと思ふから市『旦那方、何うか又乾兒の奴等が失禮をいたしましたか、甚だ申譯がムいません、乾兒等に成代ッてお詫を致しますから、御勘辨を願度う存じます。綱ハ、ア長五郎と市郎兵衛か、好い所へ来た、また大方其方等が吩咐けて置いたのであらう、不都合千萬な市『イエ仲々持ちまして……金』何がどうしたと』突然下駄に掛けて蹴ましてから、市

郎兵衛の眉間は破れて血が染む、だが元來詫に來たといふ心持だから、只管に詫入
 ツて別れましたが、市郎兵衛も好い心持は致しません、此事を長兵衛に申送りまし
 たから、長ア、困ったな又喧嘩か、どうも仕方がないが、成るやうにしか成るまい』
 と諦めて居りました、スルと水野十郎左衛門の屋敷から、明朝四ツ時長兵衛に相談
 をしたい事があるから來て呉れろといふ使が來ましたので、長兵衛が勘考ましたに
 は、長ハテナ何だらう、劇場の一件かしら、それは濟んで了ったことだから別段祟
 りもあるまいと思ふが、外に何か用があるかしら』と思案を廻らしても分りません
 所へ、唐犬權兵衛が來て、權變な事を聽きに來たが、水野の屋敷から使が來はしな
 いか』來たといつて騒がしてもと思ふから、長イ、エ來ない、權ハテナ、來る筈だ
 が、モッ來ても往ッちやア不可ねえせ』と歸ると、其後から夢の市郎兵衛が來て同
 事をいふから、長兵衛も心付いて、長ハ、アそんなら矢張殺すんだな、それにして
 も何故俺ばかり眼を付けるんだらう』と思ツたが、是は旗本の方の心持では、長兵

衛が辻文次郎の仕込みの腕前で、町奴一統に勢力があるといふのは知れ切つた話、
 彼をさへなきものにすれば驚くことはない、斯う考えたのであります。夫故にま
 だ長兵衛が覺らない其内に、呼で殺して了へとなつた、ソコで使を寄越したのです
 長兵衛も覺悟をして、長呼に來たものを往かぬといつては、俠客の名が落るだらう、
 旗本と葛藤を生じて居た所が仕方がない、俺が一人死んだら、水野の家も其儘には
 して居まい、又町奴も我を折つて以後は喧嘩も自然止むであらう、目指されたが因
 果だ死なう』と決心して、人には決して言ひませんで支度に取り掛りました、水野十
 郎左衛門は是迄度々長兵衛始め町奴の爲に失敗を取る事のみが澤山ですから、長兵
 衛を殺して了へば後の者は有て無が如く心配はないといふ積りで、さてこそ茲に長
 兵衛を迎ひにやりましたので何れ來るに相違なからうから、其支度をして置かねば
 なりません、公時金平、渡邊の綱右衛門を始めとして、旗本の連中七八名を誘ひ合
 して當日は長兵衛が來たら彼の度胸を試した上で、一寸試し、五分刻み、嫩り殺し

にして、それを酒の肴にしやうといふので、悪肴の支度といふのです、綱右衛門と金平と赤條々にして床の間へ立たせて、置物の如くに見せかけて、イザと云つて盃を投げる合圖に左右から飛掛らうといふのです、其外に殺す手段も種々出来て居て、来るか、来るかと噂話をしながら待つて居る最中に、長ハイ御免を蒙ります、今日お招きに預りました幡隨院長兵衛でござります、御前様へ宜しくお取次を願上げまする』といふ事ですから、侍ソラ来たぞ』といふと、屋敷の内が俄に騒出しました水野は聽いて、水ナニ、長兵衛が来た』と實は水野も来るだらうとは思つたものゝ斯う早くは来まいと思つたから悔りして、掃除其他にも注意して、長兵衛を案内いたす、長兵衛の衣類はと申すと、羽織袴にて髪を短かく揺を永く結び立てござります、凛々として犯すべからざる有様、先づ廣間へ通して後、十郎左衛門より叮嚀に挨拶に及ぶ、水イヤ長兵衛、今日は能く参つたな』長兵衛はいと感慙に、長身分賤しき町奴に御叮嚀なる御挨拶を下されまして、有難き仕合せに存じまする、水イヤ

ヤさう叮嚀なる挨拶にては迷惑いたす、今日は余の誕生の祝ひであるから、朋友七八名を集めて、唯一杯を酌むといふのであるけれど、日外より旗本と町奴が、軋轢に相成り居るなんといふ事を、世間で取沙汰致すものがあるゆへに、幸ひ今日の酒宴に其方を招いで連ならしたらんには、少しく其内の疑惑を解くことにならうとも存じての事ぢや、身體をゆるめて飲んでくれろ』と奥底もなき待遇振りに、長兵衛もいくらか安心して居る内に、客も次第に來ると見え、人の足音も大分致しまする其内に案内の侍が、來』さアどうぞ此方へ……』といふので、長兵衛は頓て廣間へ來て見れば、床の間には二幅對の大軸物をかけて、九谷焼の花瓶にフサクしたるその花物は、時知り顔に咲出しており、傍に公時金平と渡邊の綱右衛門が赤條になりて飾物の如くに突立ッたるは何か仔細あらんと長兵衛は覺悟して、油断せず、其内に旗本衆も七八人集つて來て座に着きますれば、膳も運び酒も出ました、長兵衛チラト我膳の上を見ますれば、コハンモ如何に缺虫、芋虫の類をば、山のやうに煮つ

けて皿に盛ッてあり、此方の器の中を見ると、名さへ知らざる虫の多く居りて、其恐ろしさ身の毛もよだつ有様なりけり、豫々斯くあらんと覺悟する身の長兵衛は、悪びれたる氣色もなく、盃を上げて波々と酒を受け、長「頂戴を仕ります」と、飲み終りて箸を取り、彼虫類をムシヤリ〜と平氣な顔で食べ始めましたから、水野十郎左衛門も驚きました、自分等は口取刺身の上等物を膳の上へ並べてありまするのですが、毛虫の腹の中から青い腸がニヨロリと出たり、蚯蚓とけらの類を頭から食べる工合を見ては、食べ居る當人よりは、見て居る人の方が心持が悪くなりましたから、仲々膳の上の物を食べる所の勇氣はありません、十郎左衛門は長兵衛の度胸の強いには驚きましたかして、水「コレ長兵衛の膳を改める」と命じましたので、家来「ハッ」と答へて、此度は改まりたる膳部の獻立を前へ並べました、水「イヤナ、二長兵衛、實は唯今までは失禮を致したが、町奴の長兵衛は度胸の強きもの、由、話には聽いて居たれど、今日唯今感服いたした、以來は此十郎左衛門、必ず其方を

敵とは致さん、改めて盃を受けてくれるやうに……」と、差出しましたから、長「是れは〜御挨拶を受けまして、恐入ります、水「唯今の悪魚で心持悪ければ、口を嗽いて風呂へ入り、姿を改めて来たが可からう、夫迄にマ一つ受けてくれよ」と大盃を澄して長兵衛に渡しました、長「難有いことで、實は汗染みて居りますから……」水「風呂場へ案内を致して遣はせ」言葉の下より二人の侍、長兵衛を随へまして、風呂場へ来ました、新たに建直したものと見えまして、まだ少しも汚れて居りませぬ、木の香が残つて居ります、檜の風呂は角になつて居つて、水溜には絶えず水が溢出て、結構言はん方ありません、長兵衛は湯衣に着換えまして、風呂場へ入りましたが、是が今生後世の永の別離となりましたので、長兵衛が赤條々で入浴して居る所を、卑怯にも十郎左衛門、突如長鎗を携さへて出来り、長兵衛の横腹めがけてズブリ突貫した、長兵衛は素より覺悟の上なれば、敢て抵抗せず其儘朱に染つて絶命致しましてございます。

長兵衛が身の上に、恚様な變事がおらうぞとも、いさゝか以つて知るよしもなき、夢の市郎兵衛と金神の長五郎は所謂蟲が知らすともいふのでありませうか、翌日長兵衛の處へ出て来て見ると、鈴ヶ森で助けて、長兵衛が己が兄弟同様にして居ります。白井權八を頭にして、大勢輪のやうになつて何か相談をして居る所へ入つて来ました。市「どうした家のは……權オヤ親分さん方、お揃ひですねえ、家の親分は昨夕お屋敷の旦那様方に連れられて、大川筋で網を投つて、それから品川へ遊びに往くと申して、出て往きました限りまだ歸りません、モッ少し待つて歸つて來なれば、誰か見せにやらうと思つて居ります」と常に變らない言葉の様子ですから市「さうか、そんなら俺達も後追かけて往くとせう、長五郎どうだ 長可からう」と二人は支度をして出て行きました。吾妻橋の上總屋から船を一艘出させて、二人船頭で、ズッシリ祝儀も渡つて居るから、勢ひよく船を出して、仙臺堀の角まで來ると、網へ掛つたものがあります、船頭も打手も、ハテナ、鯨ちやアあるめえし、

何だらうと、絞つて上げて見ますと、首のない男の死骸でありましたので、流石の二人も「アツ」と驚いて、突流さうかと思ひましたが、何處か身形が幡隨院に似て居るやうだと、引上げて能々檢ると、コハ如何に首のない長兵衛の死體に相違ございませんから、直ぐに漁網を止めて、市「内では屹度知らないのだ何ンでも、早く知らせて遣らう」と、二人は釣臺の用意をさせて、吾妻橋際から人眼にたゝぬやうにして、幡隨院店へ送込んで來ましたので、之を見た家の女房は「女ハ、ア左様でございますか、實は長兵衛が黙止て居ると申付ましたから、失禮とは存じました。申上げませんでしたが、誠は水野の屋敷から一昨日呼びに參りまして、出て往つた。り歸りませんから、今朝死骸を頂戴に出しましたら、大小羽織袴をのみ頂きましたのみで……」と、涙ながらの物語りに、市郎兵衛も長五郎も之れを、聽いて市「それは大變だ、無論仕返しをせねばならぬが、當分は先方も油断をすまい、といつて二年も三年も経つては人が敵討とは思ふまい、何しろ皆を寄せて相談をすることにし

やうと、立歸ッて、それから町奴と名のつくものは残らず飯田町仲坂下の夢の市郎兵衛方へ集まつて来るやうにとの廻状でありますから、江戸中の町奴が續々として仲坂へ来ることに引きも切らず、忽にして七八百人、千人といふ事でありませうから、其近邊の騒ぎは、一方なりませぬゆる、直様牛込の菊店に屋敷のある水野十郎左衛門の屋敷へもこれが聞えて、旗本連中も油断は元來致しませんのみならず、人を出して様子を探ッて見ると、まだ評定が一決しませんので、今日や明日には切込む氣遣ひもないやうだからと、先づ安心をして居た、スルと其翌晩の事、水野十郎左衛門は、モッ寢やうといふので、雪隠へ參ッて、龍頭を捻ッて手を洗ッて居ると、植込の葉蘭の蔭から、ヌーと一人立上ッた者がありました。水「サテハ……」と身構ひをする間もあらばこそ、侍長兵衛の恩を報ずるもの、水野覺悟……」と聲を掛けた水「何を……」と後へ退がる所を、バラリズンと一刀兩断に斬ッて落しましたのは、刀は名に負ふ青江下坂、斬人は名代の白井權八、倒れる死體の首を刎て、其儘に逐

天いたした、さア屋敷は俄然の騒動となりましたが、首がないのだから仕方がありません、急に公儀へお届けを出さなければならぬのではありますが、夜中の事ではあるし、夜が明けたらば早速にと、騒いで居ると、翌日小普請頭若年寄松平若狹守様のお屋敷へ、白井權八が自訴を致して、水野十郎左衛門を殺害致しましたる趣きを申立てました、内々に致す譯にはかりなりませぬから、直に水野へ手入れになると全く十郎左衛門の首が無くなつて居ることが明白になり取調となりました、それから又江戸町奴中から、長兵衛に對する口供を上げまして、權八の命乞を致しましたけれど、假令不品行にもあれ、旗本の一人水野十郎左衛門を殺した罪過は決して免れられません、權八は鈴ヶ森でお仕置になつて相果てました、さて又長兵衛の葬禮は仲々の盛大でございまして、淺草新寺町源空寺といふ寺に之れを葬りました最も唯今では此新寺町邊は、之れを北清島町と申しまして、新寺町とはいひませむが、源空寺は立派に大きく現存して、其境内にいと大いなる石に、地藏菩薩を彫り

浮べたる二つの内の其一つに、一代の俠骨幡隨院長兵衛と其名を刻むた墓が建てられてあります。

花川戸助六

寶井琴凌口演

第一席

俠客と一口に申しますが、其身博徒などの宜しからざる事を致しながら、や、義
俠心のある人と、純粹の任俠を以て任じて居るものとは、大に相違いたして居りま
す、先づ此の江戸表開けまして俠客と名を附けましたる初めは、元和より寛永に跨
り、夢の市郎兵衛といふものが、抑々江戸表で町奴といふ名義を取りまして、弟に
放駒庄兵衛といふものがあり、市郎兵衛は山東京傳の漫畫などに悉とく賞め立ッて
あります。この市郎兵衛が四十の坂を越して、隠居をいたしてから、二代目夢の市
郎兵衛の世と相成り、是亦名代の男で御座いまして、彼の幡隨院と義兄弟の契約、
尤も此幡隨院長兵衛は寛永の末から承保慶安に跨った男でこれは前席にも申上げて

ある通り、旗本水野十郎左衛門が牛込の屋敷に於て、慶安の三年四月の十三日水野が卑怯なる槍先に懸り最期を遂げました人で、其の長兵衛より五人、明暦の大火後江戸表に於て男を賣り出し、津々浦々の端までも、其の名前を轟かしましたるのが、花川戸の戸澤長屋に住居をいたし、黒手組といふ一派を立てました助六でございませ、此の人生は何處だといふに、出羽の國山形の城主戸澤大和守の家來、前名を花澤助六郎といつた者で、早く両親に別れまして、年若ながら劍術柔術が能く出来ます上に、生れ付いての其れは美男、まだ御新造もなく、家來も何んにもない自分一人、一人が寧ろ氣が合ふやうなものであるが、何にかに附けて不自由でございませ、併し助六郎は行ひの正しい人だに依つて、一人だからといつて差支がある氣遣ひもない、然るにどういふ次第で出羽の山形を浪人したといふに、或る日の暮方、窓の處から往來を眺めて居ると、年齢二十七八にならうといふ、脊の高い色の淺黒い、足拵へも嚴重な博徒らしいのが、血刀を提げて飛込んで参りました ○「エ

エお頼み申します』助六郎玄關に出て 助「何んだ、人の家に血刀を提げて、何んの用だ ○「左様でございまして、誠に旦那濟まねえが、俺ア無職渡世でございませが、無職の遺恨で今當地の貸元を打た斬り、大勢を斬ッ拂ッて此處まで逃げては來ましたが、何んしろ先方は大勢、小哥ア一人でございませから、やツと此處迄斬り抜けて來ましたが、息が切れて堪まりません、濟まねえが暫時隠匿ッて戴きてえもんで 助成ほど、窮鳥懐ろに入る時は獵師もこれを撃たず、武士と見込んで頼みに來たのなら、拙者も男子だから隠匿ッてやらう、此方に來い』と助六郎は彼の男を草鞋を穿いたまんま、戸棚の中に隠してやる、ところへ △「御免ねえ、眞平御免ねい △「ドレ」助六郎大剣を左に提げて 助「何んだ △「エ、旦那、早速申上げませ、小哥ア此の先きに居る當地の貸元で長九郎といふもんの子分でございませが、唯今其親分を殺し、大勢に傷を負はして逃げた野郎があつて、跡を追駈けて來ると、確にお前さんの家に這入ッたと見切りを附けて來ましたが、どうぞ其野郎を此處へ出し

てお呉んない 助「左様か、拙者はそんな者は知らん △戯談言ッちやアいけねえや
旦那、知るも知らねえもねい、お前さんの家へ這入ッたに違ひはねえと、小哥が何
處までも睨んだ眼の玉は外れはねえんだ、お出しなすッてお呉んなせい 助「知らん
といッたら覺えない、一石取ッても武士だ、決して覺えない〇「オイ〜〜旦那、
覺えねえ〜〜としらア切ッて居たッて、乃公の方にやア證據があるんだ、強ッて覺
えねえと言やア仕方がねえ、これから踏込んで、燧箱みたやうな家だが、家探しを
するからさう思へ、武士だといッて驚いて居るんちやアねえから」助六郎眼に角立
ッて 助「何んだと、我家に踏込んで家探しをする、横に口の裂けあればとて不埒な
事を申すな、假令鳩の餌ほどの祿を取ッて居ても花澤助六郎、汝等如きの破落戸に、
玄關敷臺へ泥臈を一足たりとも掛けさせる氣遣ひはない、ならば手柄に踏込んで家
探しの出来るものならして見ろ、汝等の首と胸の生別れだぞ」左の母指で鯉口を切
り、身構へをしたに依ッて △「何んだと、篋棒奴、武士が怖クッて世の中が渡ッて

歩行るものか、大層もねえことを吐しあがるな、サア兄弟、親分の敵がこゝの家に
居るんだ、踏ん込んで家探しをしろ □探さずに置くものか」と、玄關の敷臺へ足
を踏掛くる 助「無禮な奴」と助六郎は、右の手を延ばして一人の肩を向ふに突く、
△「野郎、生意氣をするな」と跡へ下ッて一人の博徒が長脇差の柄に手を掛くる、
助「エ、面倒だ」と短氣の助六郎、刀の柄に手が掛るが否や、抜く手も見せず 助「ヤ
ッ」といふ聲と共に、左の肩先より袈裟掛に斬ッて落す □「野郎、兄弟分を殺ッた
な」と、一人が飛下ッて、抜きに掛かると、二の刀に真向より斬下ろされ、血煙立
ッて玄關へ倒れた、死骸を眺めて助六郎 助「こりやア大變なことをやッた、一時の
怒りに兩人の命を取ッたが、峰討を食はせやうと思ッたのを誤マッて斬ッて仕舞ッ
た、どうも仕方がない、これまでだと覺悟をして、血を拭ッて鞘に納め 助「これ戸
棚に居る奴、オイ出て来い、貴様を隠匿ッたばかりで、今兩人の博徒を拙者が手に
掛けたが、これも行懸り上己むを得ない、人を殺せば其の身の下手人は御定法だ、

併し拙者も命を惜むやうだが、まだ三十にならぬ命を捨てるも残念だに依ッてこれから當家を浪人致さなければならん、愚痴を翻すやうだが、其方のために拙者が浪人をするんだ、併し縁があつて貴様を隠匿ッて命を救ッて遣はしたのだから、これから先は萬事慎んで成るだけ喧嘩をするなよ、理の善いことなら喧嘩をして人に聞かれても賞められる、理の悪いことなら頭を下げてでも我慢をしるよ、決して弱い者いぢめをするな。○』どうも旦那、色々難有うございまして、第一お氣の毒様でございます、小哥のためにお前さんが浪人をして祿に離れるのはお氣の毒でございます。小哥は大鐘の權九郎といふ者でございますが、何れ縁と命があつたら、又何方何地でお目に懸るか知らねえが、萬分が一の御恩返しも出来ませう、随分共に旦那御機嫌宜しう世の中をお暮しなせい。助それは忝けない、貴様もまだ見たところが三十に些と間もありそうであるから、成るだけ身體を大事に萬慎しんで世の中を渡れ。これは少しばかりだが、其方に草鞋錢に遣はすから。○』旦那命を救ッて預いたり草

鞋錢まで頂いちもやア濟みません、權九郎が息があつたらお目に懸り屹度お禮はいたします、御機嫌宜しう遊ばしまして。』と流石悪黨の權九郎も、助六郎の厚き情に涙を流して出羽の山形を立出づる、後に此の權九郎が助六の身内になります、こちらには花澤助六郎、置手紙をいたして、住み馴れたる出羽の國山形、戸澤大和守のお家を立出でて何處を當てといふことはない、人間の掃溜とさへ譬へる所だから、武藏の國大江戸に來たッて様子を見やうといふので、これから助六郎は出羽の山形より江戸表を指して、夜を日に繼いで下ッて參ります、扱て江戸表に來て様子を見ると、何にか扱て土一升金一升の土地、流石に天下のお膝下、人間で眼を突くやうでございませうから、助成るほど井の中の蛙大海の廣さを知らず、住馴れて見れば出羽の山形位好い所はないと思ふが、扱八百萬石の大都會諸方の人の落込んで來る大江戸は美事なものである。』と何處へかに其の身を奉公住みをしやうと云ふ氣になつたが、何處に奉公しても、窮屈な思ひをしなければならず、僅かな祿に束縛されて居

るより、これは寧ろのこと町人にならう、斯う見渡したところが、この位の繁華な
 地だに依り、何にをしても生活の立たないことはない』と大小を棄て、仕舞ひ町人
 になりました、手蔓を求めて山谷の竹屋の渡守になりました、人間は沙彌から長老
 にはなれませんが、それ／＼艱難辛苦をして、伶俐と運とを合併をして財産家になり
 ます、親が譲りの財産を以て生まれた人は結構であります、一身から成立つもの
 は艱難をしなければ財産は出来ません、又身分も出世は出来ません、助六郎も江戸
 に出て来て艱難をして、竹屋の渡守になる、ところが此の助六郎が渡守をして居る
 と、渡守には勿體ない色の淺黒い美男でございますから、近所合壁の新造や浮氣な
 後家様などが、用もないのに向島に行ったり来たり、日に何たびするか知れたもの
 ぢやアない、花時分になりますと、其の竹屋の渡しは申上ぐるまでもない、年内
 の生活費を花中に取りらうといふ忙しいところ、茲に助六の連の宜いといふのは藏前
 の草分町入で、坂倉屋甚太夫といふ者の子息に治兵衛といふ方があります、湯水の

やうに金を遣つて居るので、吉原では飛ぶ鳥を落とすほどの勢ひ、向島へ渡りまして
 の料理店は、治兵衛が来れば外の客の五組も六組も遣ふだけの錢を一人で遣ひます、
 助六の氣質に感心をして、大層可愛がって居りました、或る日のことで、○助、向
 島へ乃公と一緒に来い』と助六を連れて、向島へブラリ／＼と行き、料理店へ上
 っ一杯飲みながら、□さて助や、貴様も昨今此の竹屋の渡守になつたんだが、貴
 様はいつまでも渡守をして居る人間でないから、寧ろのこと何んになつて暮すのも
 同なじ事だから渡守を已めて仕舞ひ、江戸にやア俠客の多い所だから、何になるに
 も志次第とはいひ乍ら寧ろを憐れ居るからは俠客になつて仕舞へ、外の世話は治
 兵衛に出来ねえが、金の世話なら決して嫌だア言はねえから』これが一番丈夫な
 後ろ楯でございませう、外の世話は出来ねえが、金の世話なら屹度しやうといふ、先
 づ明治の今日に至つても十人が九人まで、お前の氣象は知つて居るから、お前のこ
 となら私は何んでも世話をしませう、併し金づくのことならお断り申すといふデコ

ボコ連は多いか知らないが、金の世話ならいつでもしやうといふのは、助六の身に取って出世の始まり、助有難う存じまする』これから竹屋の渡守を已めて、淺草花川戸の戸澤長家といふ、裏家でありまして九尺二間の棟割長家、これを借りて助六が毎日部屋へを遊んで歩きます、今日は出来が悪いと思へば、二兩二歩負けても、五兩負けたと思ひ、あとの二兩二歩は部屋へに燻って居る奴に、一同で一杯飲むが宜いと小遣に抛ってやる、勝ちやア勝ったで一同にやつて一杯飲ませ、裸體になつて居る奴には又着物を着せてやるから、世話になる奴は助兄い、助兄いと言つて僅な中に兄哥と呼ばれる、俗に言ふと、ちやんと兄哥は馬鹿の通り名といふが、なか／＼さうでございませぬ、袁彦道で兄哥とまで呼ばれるやうになるには、随分無駄な金を拂はなければならぬ、誠に行ひの善い人だから、部屋へ／＼の部屋頭も助六に感心をして居ります、去りとして藏前の旦那がいつでも金に差支へたら来いよ、望みだけ貴様に用立ってやると言つて呉れますが、そいつを附込んで借りに行くや

うな料見では、江戸一番の男にはなれませぬ、何處で融通をするか、融通をしては勝てば勝ったで立派に利を附けて返す、困れば其處に行つて借りる、成るだけ藏前の旦那には借れないやうにして居る、治兵衛感心をして、『助、いつでも宜いから来いよ、△難有う存じます、いづれ私は卒さといふ時に、旦那の處に願つて出て御厄介になる心得でございませぬから、その時にどうか旦那、私が願つたら拜借いたします』といふのは助六がえらいからでございませぬ、此の治兵衛が肩を入れて呉れるから旦那千兩貸して下さいといつても、嫌といふ治兵衛でない、爰で助六が通常な人間なら千兩借ります、それを資本金にして身を立てるなら宜いが、錢があるので氣が緩み女郎を買つたり酒を飲んだりして、其の千兩を無くしたら坂倉屋の旦那に合はせる顔がないからと自分も考へて居るから、身分の出来るまで旦那に金は借りまいといふ決心、それだから治兵衛が餘計可愛がって、何處に行くにも助六に供をさせる、前申上ぐる通り、吉原は一杯に遊んで居る方であるから、助六を連れて行

くと座敷では騒いでも旦那が寢て仕舞ふと、左様なら御免なさいと、旦那を寢こかしにして歸つて仕舞ふ、決して女郎屋の二階に泊つたことのない男、それだから吉原中でも評判がよく、あの我慢は出来な第一男振は好し、年輩も今が眞盛りと、花魁どもまで助六の評判を高くして、いつでも旦那の供をして来て、座敷で旦那の相手をやつて、旦那が寢てから自分が歸つて行く、この行ひは出来んといふので廊中での賞められ者、ところが茲に助六が男を研ぎ始める瑞相は、淺草名代の無頼漢、切られ丹次といふものを打た斬つて、淺草中の憂ひを除き、これがために助六が御牢内に這入ります、然るに其後明暦の三年正月、丸山本妙寺から出た大火で、助六が御牢内で盡力をして、無罪放免に相成り江戸一番の俠客に相成る講談……

第二席

罪人は大火に相成りまして、御牢内切解きになつて、三日の間に立戻つて參れば、

罪を減せられるものでございます、それを役人が言ひ渡して皆切解いてやります、其の中すうくしい奴はそれ切り逃げ出して、後に捕まつて命を失ふ奴もある、志しの好い奴は引返して来て、罪を減じられます、其の中に右申上げた助六がお仕着せの上に荒縄の襷を掛けまして働いて居る、此の人は火事が始まつて切解きになる、直ぐ立歸つて參つた其れも、三度立歸つて參りました、それでお役人も感心をして居る中に、何處へ行つたつて仕様がな、御恩報じに冥土の土産に働かうといふのでお仕着の裾を端折つて、釣瓶の水を酌んで、ドシ〜〜〜牢の火を一人で消防して居る、申上げるまでもない、従前は此の傳馬町に御牢内がござります、唯今の弘法の堂がある所が、彼所が斷頭場の場所でございます、舊幕時分には雨がシヨボシヨ降つた晩などに、牢屋の裏門を通ると、火の玉が舞ひ出すなんといふ噂をしたものでございます、明治の今日になりましたは、弘法大師、鬼子母神、日蓮上人が店を出して、幽霊どころではない、白首の姐連が出来ますくらひ盛大になつて居り

ます、これだけ広い所の石出帯刀様の御牢内の火を夜の明けますまで一人で消して居る、それを石出帯刀殿が床几に掛つて御覽になつて、何者だとお尋ねになると、
△花川戸の助六でございませうと申上げるそこで此の助六が、如何に悪い奴とはいひながら切られ丹次を斬つて、自分で訴へて出て牢内に這入つたので本来助六の命は無い譯けです、それが三度も立戻つて助命になり、江戸構にもならず、此のたびの火事場の盡力によつて無罪放免になります、實に目出度いと言はうか、愈々助六が無罪放免で花川戸に歸るといふので、淺草近傍の者は一同に出迎ひをします、彼の坂倉屋治兵衛も、若者に助六の着物を持たして呉られる、淺草花川戸、山の宿、聖天町、馬道、田町は云ふに及ばず堅氣の人まで、助六を迎ひに来て呉れまして前代未聞の有様で助六は引取られました、其禮廻りの金が要ります、黙つて居ても坂倉屋治兵衛が五百兩といふ大金を直ぐ持たせて寄越しました、口でこそ五百兩といふが、明暦時分の五百兩は大したものでございませう其金で助六が出迎ひに出て呉れた

人の所へ一々禮をいたします、立派なもので、斯うなると助六が好い男になつて、乃公も身内にならう、子分にならうといふので、續々助六の子分になる人がある、すると前回辯じた出羽の山形で命を助けた大鐘權九郎が、流れくつて江戸に参りまして、助六の評判を聞いて、二六時中胸に忘れもしないのは花澤助六郎の名前、助六といふ名前は一寸と餘處あるもんではないと、そこで花川戸に尋ねて来て見ると案に違はず三年前に、命を助けられた恩人の花澤助六郎でございませうから、權九郎は即座に助六の身内になる、そこで此權九郎が頭で蝶々の源次、疳癩の藤吉、鐘尙の源造、塔婆の三吉なんといふ、變名異名の附いたのが助六の身内でも兄哥株で、追々身内が出来て、八十五人といふ子分に成る、これで助六が黒手組といふ一派を立てました、身内の者に鮫鞘の脇差を差さして、身分に依つて白博多の帯を締めさせる、身分の低い者は白の小倉の帯、黒の着附でございませう、それで身内の者を悉とく確めて、酒でも飲んで亂暴をする浪人でもあれば、飛込んで行つて仲人をし、

背かなければ向ふの浪人を擲き据へ又はふん縛つてやらうといふのでございます先づ助六が吉原廓内の防禦をしてやるので、飲食店などどの位助かるか知れませんが、或大雪の夜、烟酒賣の新兵衛が乾兒が呼込みましたのが、抑も助六の身に大難を醸した發端で、此烟酒賣の新兵衛が、生れは千住の掃頭宿で、素と金物屋でございませぬ、それが微祿をいたしまして、娘の音羽と申す者を、吉原揚屋町の判人紋兵衛に頼んで百兩に賣つて、其の金を持って立歸へる途中、千住小塚原で取られて仕舞ひ、跡金五兩を借りたのが金の字と五の字の間に十の字が這入り、利息が溜つて四十三兩二歩なければ、娘の身が樂にならないといふ、此の新兵衛の娘が吉原一の三浦屋の全盛揚巻でございませぬ、その話を聞いて助六が、可哀想だから、揚屋町の判人松鶴屋紋兵衛へ懸合ひに参ります、此の野郎は俗に閻魔紋兵衛といふくらゐ、これに懸合ふところがございませぬ、長くなりませぬから略しまして紋兵衛が不當の了簡から、神田の紺屋町に居りましたる、鳥居新左衛門といふ者と、助六

が喧嘩を致す、固より揚巻との色戀ではなく、ホンの俠氣づくで親子を樂にしてやらうといふ所志、決して助倍根性で揚巻が欲しいといふところからした喧嘩ではございませぬ、そこで浪人組と、黒手組が大喧嘩をしようとした時に、淺草阿部川町に住つて居りました肥後の國熊本の浪人、寺西延次郎貫心といふ、この人は先代貫心の名を貰つたのでございませぬ、初代は藪加藤の浪人寺西八十左衛門貫心と申しまして、十三貫八百目の鞭を突いて歩き、また紙衣に雲龍を畫いた伊達羽織を着て往來をいたす、この貫心は大阪阿彌陀池に住居をして居つたのを、寛永元年に夢の市郎兵衛が大阪に乗込んだ時、市郎兵衛と同道して江戸に下り、三代將軍様に願つて、江戸表で浪人取締といふ役をいたし、上意に依つて下谷の車坂に家を持つて、浪人の取締をいたして居ります、それで此人は天下三浪人の一人でございませぬ、其の寺西八十左衛門貫心の跡目を繼いだ延次郎貫心、前代の貫心が十三貫餘の鞭や、紙衣に雲龍を畫いた伊達羽織は家に傳へてあります、尤も助六が男になる時分には初代

貫心は居らず二代目延次郎貫心で、また助六が鳥居と喧嘩をする時に長兵衛の身内で残つて居たのが、淺草小揚に堅氣になつて三人居りました、金神長五郎、釣鐘彌左衛門、蝸の次兵衛、此の三人でございます、我々仲間助六の講釋を申上げますと、夢の市郎兵衛、離駒の四郎兵衛、唐犬權兵衛など皆出ますが、これは甚だ相違いたして居ります、左れば此の貫心が助六は人と喧嘩をする人間でないといふのを知つて居るから、此の人が仲人をして、助六の胸を聞いて、如何にも鳥居新左衛門が分らないといふので、新左衛門を確かめて、貫心が仲に入つて、漸く此の喧嘩を納めました、これから助六が吉原の紋兵衛に懸合をして事済になりました、其の金が何處から出たといふと、新兵衛の金ではございません、奥州は遠田郡涌谷の宿の、牛若小僧傳次といふ盗人の金で、此の牛若小僧傳次は奥州涌谷無宿の金物屋重左衛門の伴でございますが、宮崎若狭守からお配附人相書の廻つて居る悪黨、それが江戸に出て来て、賊を働いて居ります中、神田三河町の吉野屋といふ質屋の

屋尻を切つて、小判小粒で百三十兩盗んで来て、其の晩鍛冶橋御門外で、新兵衛のおでん爛酒を飲んだり食つたりして居るところを、中の御町奉行、渡邊大隅守様の常廻り渡邊角左衛門旦那に御用辨になつて、中橋五六の番屋に送られ、此處で繩拔をして傳次は逃げた奴、其の後本所お船藏前に於て正月十六日の夜、牛若小僧傳次は殺害をされた、其の百兩の金の一件で、助六と新兵衛が渡邊大隅守様の手で入牢をいたしました、然るに此の助六が喧嘩の後に、金神長五郎、釣鐘彌左衛門、蝸の治兵衛等が媒介をして、新兵衛の娘揚巻、これを助六の女房に持たせました、嫌だといふ助六をば到頭三人が無理往生にこの揚巻を女房に持たせました、然らば此の助六が入牢になつてから、女房揚巻が觀世音に七日の大願を立て、本所お船藏前の牛若小僧傳次といふ賊を探し出して、夫助六に出牢をさしたといふ、古今の貞女でございますが、此所等を辯じて居ると、枚數澤山になりました、甚だ恐入りますから、極く簡單にお饒舌をいたして置きます、偕て此の助六が出牢致した後、鳥居新

左衛門、これは前名小笠原帶刀といッた者で、西丸の御金藏を破ッて、大金を盗んで、町道場を出して浪人組の鳥居新左衛門となり、遂に千住小塚原で御處刑、又閻魔紋兵衛といふ奴は、前名を石川幸右衛門といッて、御家人でございませう、伯母殺しをし、大阪でおんぼうになッて、親方を殺し、その女房を拐ッて逃げ、江戸に來て紋兵衛と名前を變へて居た奴、それを渡邊大隅守様のお調べで、前名石川幸右衛門が露見し、小塚原に於て獄門の刑に處せられたから、益々名を揚げたのは此の助六でございませう、これから申上げますところは、劇場でいたします、助六は紫鉢巻をして髭の意休と喧嘩をいたします、之れは團十郎成田屋の家に遺ッて居る、歌舞伎十八番の助六といふ狂言で御座いまして、之れはどういふ譯だといふと、乃ち助六が恩人のために吉原で喧嘩をいたしました、其の恩人といふのは申上げて置いた坂倉屋治兵衛でございませう、この治兵衛の身の上を助六に書き直して、作者が綴り上げたものでございませう、坂倉者治兵衛は、町人ながら劍術も柔術も能く出來た人、

この人が差して居る脇差が、親譲りの彦四郎貞宗、金の象眼で濡衣といふ銘が這入ッて居ります、どういふわけで濡衣といふ銘を入れたといふに、治兵衛は吉原へ毎夜通ッて居ります、或る夜雨のビシヨ／＼降ッて居るのを、蛇の目の傘を左の肩に掛けて、彼の貞宗の一刀を打込んで、吉原土手を微酔機嫌でヤッて來ると、頭からズブ濡れで、衣の袖を結すんで襷に掛け鼠木綿の垢染みた着物、鴛鴦とか旦那、濟みませんが一錢頂かして下さいませし』と治兵衛の傍に寄ッて來る、治兵衛が、治今やるぞ』と左の肩に傘を擔いで居て、右の手を懐ろに入れ、錢を攫んでやらうとする其隙を窺ッた彼の坊主が、懐ろに持つて居た一尺二寸の鐵の如意、取出すが早いか、治兵衛の咽喉をのぞんで突かくる、尋常の者でないから治兵衛が體を開いて、右を上げて足駄の齒で其の坊主の膝頭を蹴たに因ッて、よろ／＼と踉蹌くやつを、貞宗の脇差に手を掛けて、拔手も見せず、二たび打掛らうとした彼の坊主の濡衣の上から斬ッて仕舞ひました、此の斬られた坊主が、上總の國木更津無宿の因果坊妙

達といふ大悪漢、坊主と見せかけて傍に寄り銭があると見込んだら、鐵の如意を以て胸を打ち、眼を廻はした奴の懷中に手を入れて、銭を取らうといふ奴それが治兵衛のために斬られました、爰で治兵衛は金の象眼で濡衣といふ銘を入れたのでございます、そこで吉原の喧嘩は、どういふところから始まったかと申しますと、坂倉屋治兵衛が吉原に遊びに行き、買馴染の花魁が、江戸町一丁目の大上總屋のお職を張って居ります大鳥といふ花魁で、此の花魁の許に通って居ります、或る時治兵衛が藝者翫間を連れて、大和廻に出掛けた、その跡の騒動でございます。

第三席

新吉原町の仲の町の葉木屋宗兵衛といふこれは治兵衛の行きつけの茶屋でございます、其の店先に兩人の侍が参り、侍「宗兵衛は居るか」宗「へエ、こりやア入來しやいます、どうぞお上り下さいませ」侍「我々は今日主人の使に参ったのであるが、晩ほど身共の御主人、最早御隠居であるが、一宵愉快をいたしたいといふお好み、併

しお身分が尊いに依って、粗末なことをいたして呉れてはいかんから、ど●立派な大店へ送って呉れるやうに」宗兵衛大きに喜び、金塊が飛込んで來たと、宗委細承知仕つりました、侍「我々兩人は供をいたして参る、その積りで居れ」と約束をして立歸りました、日が暮れる間もなく、大門口より駕籠から下りて、兩人の武士が附いて這入った儘、深い笠にて面を包み、侍「葉木屋宗兵衛は爰でございます」と兩人の家來が案内をする、宗兵衛夫婦出迎ひをいたし、これから二階へ上って、偕て藝者は誰れ、翫間は誰れと、擇んで出さうといふのに、兩人の家來が、侍「これ、宗兵衛、御隠居様は誰彼の容赦はないに依って、吉原中の藝者、翫間残らずこれへ呼寄せて苦しくないに依って、成るだけ賑かに座敷をいたすやう、金に差支はないぞ」宗兵衛は大喜びに喜んでこれから藝者翫間を呼んで騒ぎます、これらが本統の遊びで、金銭のことを考へながら遊んだ日には樂しみになりません、そこで送って行く先は何處が宜からうと考へたが、今大店で盛なのは大上總屋であるから、これ

へ御隠居を送りました、大鳥といふ花魁の妹女郎に春風といふのがあります、今年十八で頗る別品、女も美しいが、客取の名人でございませう、この春風を相方に出さうと、斯ういふ御隠居で身分があると吹込んだから、春風が手に燃を掛けて三盆の砂糖に龜甲萬の醤油、上等な鯉節を入れて、濃厚と食はせたから、隠居悉くどうも氣に入つて、夜の明方に家來を連れて立歸る、翌る晩來て、直ぐうらなじみと來る、偕て兩三度來る間に、段々く春風に様々な物を拵へて呉れます、其の中に春風へ立派な積夜具が出來ます、これはどうも娼妓の扮飾で、昔も今も立派なものを店へ飾つて置きます、如何に金錢にいとめを附けないと言ひながら、勿體ないくらいでございませう、其の金を貧乏人に施したら、どの位賞められるか知れないが、下間違ひの者は仕方がない、琴凌が出來ないから悪く言ふのではありませんが……春風の勢ひは大上總屋で飛ぶ鳥を落すばかり姉女郎の大鳥を物數とも思はない、大鳥もこの節は坂倉屋の旦那は大和廻りに行つてお留守であるし、旦那の歸るのを待

つて居る、吉原中の評判で、大層な隠居が來るが、何んといふ隠居だか分らないといふ、そこで藝者や翫間が皆々御隠居様くで居ります、お名前が分らないでは困ると、御家來に伺ひますと、侍「お名前は其方共には明かされん、唯だ八木の御隠居様と申上げろ」といふ、家來の指圖に、八木の御隠居様くと申上げる、でッぶり肥滿つて、長き髯は白銀を延べたやう、爰で八木の隠居が、藝者翫間に黒袖の二つ矢羽根の紋の附いて居ります羽織と着物を仕着せに出します、仲の町の茶屋へも残らず二つ矢羽根の紋の附いた暖簾を出します、其の物入は一通りでございません、益々隠居の評判が高い、ところへ坂倉屋治兵衛が大和廻りから立歸つて參りました、家へは容易に寐る人下ないのでございませうから、直ぐ吉原へ遊びに行く、誠に大した分限者で、大上總屋の大鳥へ馴染を重ねて來るといふ金に困る人ではないから、身受をしたら宜さうなものだと思召しませうが、偕て又奉公人の手前もあるし、親類の手前もあるので、遊女を身受をして治兵衛が妻にするといふわけに

はいかない、かるがゆへに其の折を待って、受出してやらうといふ心持で居ります
 それだから治兵衛があふらく通って居ります、大和廻りから立歸って参り、久々
 で吉原へ這入って参る、葉村屋宗兵衛の所に來ると宗兵衛夫婦は、いつも治兵衛の
 姿を見ると、土下座をしないばかりに飛出して來るやつが火鉢の前へ坐り込み、往
 來を見て居るところへ、治兵衛が門口に立って、治宗兵衛、久しく逢はなかつたな
 宗「ヤ、こりやア旦那お歸んなさいまし、いつお戻りでございました 治昨日歸って
 來た 宗「ア、さうでございませうか、まア一服召上がりまし」妙な挨拶をするのを、
 疳癪持の治兵衛、小癪に觸ってかなはない 治「ヤ、いづれ又來やうか 宗「左様でござ
 いますか、へエ、御免なせい」治兵衛は葉村屋を跡に、仲の町を來ながら 治「不
 實な奴もあるもんだ、乃公が十日か十五日來ない中に、ア、も薄情に出來るものか」
 と思ひ江戸町一丁目に曲り込んで、大上總屋の門に來ると、若い衆が居て 若「こり
 やア旦那入來ッしやいまし、葉村屋から誰れか附いて來ないのでございませうか、

治「ヤ、なに、乃公ア今葉村屋にちよいと行ッて來たが、大鳥を一寸呼んで呉れ」
 若「畏まりました」と、若い衆が二階へ行ッて、大鳥にこれを告げる、大鳥は嬉し
 喜んで、店の小暗い所に参ります、治兵衛門口に立ッて居たが 治「乃公も昨日歸ッ
 て來た、今宗兵衛のところへ寄ッて來たが、如何にも小癪に觸るのは宗兵衛、どう
 したのだ」と尋ねると、大鳥が涙片手に、八木の隠居が來て、妹女郎の春風が肩で
 風を切ッて、如何にも悔しいといふ、治兵衛が慰諭めて 治「それはいかねえ、先方
 は大名の隠居で乃公は町人、鼈とお月様ほどの違ひだから、まア時節の來るのを待
 て、つまらねえことを思ッて身體を悪くするな」と大鳥に五十兩小遣をやつて、
 治「乃公はもう二度と大門は潜らねえ、併し其の中に番頭を寄越して、貴様の根引
 はしてやるからそれを樂みにして居ろ」と別れて、治兵衛は懷ろ手をして 邊「ア、
 嫌だ、嫌だ、今まで葉村屋に棄てた金はどのくらいか知れねえ、實に呆れ返った、
 人間の薄情の揃ッて居る所とは言ひながら、見下げ果てたやつらだ」と、仲の町を

ブラリ〜と大門の方にやッて来る、後ろから「オーイ、旦那、藏前の旦那」と呼ぶ者があるから、治兵衛振返へると、黒袖の二つ矢羽根の紋の付いたる着物を着て、兩人飛んで来たのが、幫間の造酒八、徳助といふ者、△旦那、お歸んなさいまし、昨日お歸りの由を一寸承はりまして、早速御機嫌伺に上るべきではございしましたが、上りそびれました相済みません、今旦那が仲へ這入ッてお居でなすッたといふことを承はり、直ぐに葉村屋へ参りますると、あの宗兵衛のくを爺、旦那がお入来なすッたかと聞くと、今ちらりとお見えになッたが、歸ッて仕舞ッたと、澄し込んで居ります、太い奴は宗兵衛爺い、旦那のお蔭で、仲の町で引手茶屋の宗兵衛とか、上總屋とかいはれるやうになッたのに、其の御恩を忘れるやうな罰當り、今お歸りだといふから、私はちよつくり大上總屋にお寄りになッたかとお跡を慕ッて参ると、お姿が見えましたので、聲をかけては失禮でございしますが、お呼立て申したのでございます、眞、誠に貴様達にも久しく逢はなかつた、貴様達も大和廻

りに連れて行くんだッたが、漏れたのは氣の毒だ、併し此の節は好い客が仲に這入ッて来るといふから貴様達も幸福だ、まア大事に勤めて置くが宜い、眞、へい旦那、外の藝者や幫間は、襟元に附く世の中で、其の八木の隠居といふのに諂諛を遣ふかも知れませんが、口廣いことを申上げては済みませんが、この造酒八と徳助は金を山ほど呉れたッて、八木の隠居なんぞに真から恐れ入る氣遣ひはございませぬ、私は貴方の親御さまの代から御最負を蒙り居りますから、更に隠居に頭を下げやうとは思ひませぬ、旦那が葉村屋宗兵衛が小癩に觸ッてお歸りなら、これから造酒八、徳助が腕の續くだけ、一つ騒がうちやございませぬか旦那、先方は吉原中の藝者幫間を揚げて騒ぐ、私と徳助と兩人で、先方の騒ぎがえらいか、小哥共兩人の騒ぎがえらいか、浅吉へ行ッて腕に擦をかけて騒がうちやございませぬか、浅野屋吉兵衛も、親御さまの代からのお出入でした、が、ちよつとした失策から、旦那が葉村屋へ茶屋を變へてお仕舞ひなすッたが、ばんごと吉兵衛がお詫をして呉れ、お詫を

して呉れといふことを申しますが、其の中に申上げやうと斯う言ッて置きましたんで、葉村屋の失策ツたのが僥倖、元々通りどうか淺吉へお目をかけてやッて下さいまし、これは兩人からお願申します、それに付いて旦那、貴郎のお心持を私共が直しますやう、斯ういたします、これでどうぞお心持をお直しなすッて」と、上に着て居た、黒緋の二ツ矢羽根の紋附を脱ぐと、足に踏まへて、造酒八がビリ／＼に八木の隠居の仕着せを破つて仕舞ふ徳助も同じく脱いで、こいつを破いて 徳旦那もう今夜限り私は八木の隠居の前へ出やうとは思ひません、この通りふんざばいて仕舞ひましたから、これでどうぞ御勘辨なすッて、引返して一口召上がッて戴きたいものでございます 造、貴様達の了簡は實に見上げたものだ、色里に割間をなし居れど、其の心持が治兵衛は嬉しい、貴様達もいつまでもこの中にあふらくと、頭をばげらかして客の機嫌氣づまを取るのが能でもないから、もう宜い頃に足を洗へ、豫て約束通り、どうなり斯うなりの手拭店の一軒ぐらゐは出さしてやるから、

造「エ、旦那難有う存じます過日のお話で、私共兩人が其の仰やッて下さるお言葉が命綱で、いつでも吉原の足を洗ッて、旦那の所へ行き、お臺所を手傳ッて、御飯を三度戴きやア 私共は澤山でございます 徳如何でございます、引返して遊びを願ひたう存じますが 造「イヤ今夜は止さう、又この頃に乃公が來やうから、これは貴様達に何にか土産を持つて來るんだが、何んにもねいから、これを兩人で取ッて、喚アに神纏の一枚も買ッてやッて呉れ」と五十兩出して兩人に渡すと 造「旦那、思召しは誠に難有いことでございます、併し旦那が私共へ下さるのを、お返し申すのは失禮でございますが、平生ならお座敷で、サア造酒八、徳助、何にをしる、これをやれと仰しやるから、藝をして戴くのが 私共の稼業、今晚は此の金子を戴いちやア天道様に濟みません 造馬鹿ア言へ乃公も治兵衛だ、貴様達の志しが如何にも嬉しい、のう、仇には治兵衛が聞て居ぬから、それを持つてまア歸れ 造「左様でげすか、ぢやア折角の思召しでございますから、此の徳助は何とも言はずお預

かり申します。それぢやア旦那様どうあつてもお歸りでございますか、造ちやア旦那、御免を蒙むつて明日伺ひますから……」治兵衛は大門を潜つて行く、跡を見送つて兩人涙を流し、造御氣の毒だなア、今まで芳原で盛に錢を遣つた旦那が耻を搔いてお歸りだ、返すくも憎い野郎は葉村屋宗兵衛、どうして呉れてやらう、鶴だつて造酒八、この五十兩は貴様取るつもりか、造取らなけりやア旦那がお怒んなさる、ン、良いことがある、この五十兩、これを土臺に一つ宗兵衛の野郎に、今夜といふわけにはいかねえ、明日戸を締めさしてやらう、商賣の出来ねえやうにしてやらう、乃公と一緒に來い」と造酒八が徳助を連れて、京町二丁目の始末屋にやつて來て、造ハイ今晚は、〇、オヤ、何んだい造酒八さん、造當家に土手の助さんが居るかい、九、助兄哥は今迄將棋を差して居たが、飯を食つて來ると出懸けたよ、角町の天獄羅屋へ行きやアしねえか、造さうかい、直ぐに引返へして、兩人は角町の天獄羅屋にやつて來まして、造御免よ、助さんは當家に居るかい、〇、ヤア、こりやアお

いでなさい、助兄哥は居ます、造ちよいと呼んで呉んねえ、天、オ、助兄哥、助なんだ、九、あの造酒八さんが來て、ちよいと逢ひてえと、助さうか……ヤア何んだ造酒八さん、造ちよいと兄哥、顔を貸して呉れ」と表に連れ出して、造外ぢやアねえ、今の、藏前の旦那がお入來なすつた、助乃公アちつとも知らなかつた、さうか、造それにて、斯うくいふ次第だ、助なにを、太い野郎だ、よし、乃公アこれから行つて、宗兵衛を擲つ挫いて仕舞ふから、造そいつアいけねえ、和郎が宗兵衛を擲き撲つたつて仕様がねえ、實はの、乃公が旦那に五十兩貰つたんだ、此の金を貰つちやア有難過ぎるから、そこで和郎に此の五十兩を渡すから、明日の晩……今夜といふわけにやアいかねえから、宗兵衛の野郎が商賣の出来ねえやうに、明日の晩戸を締めさしてやらうと思ふ、一つやつて呉んねえ、助よし、承知した、わけねえ、籠棒奴、花川戸の親分に話をしなくつても乃公の手でやつつけて仕舞ふ、こればかりのことを花川戸の大親分に話をしなくつても大丈夫だ、造ぢやア、助さん、頼ん

だよ、助『宜いッてことよ、確に此の五十兩は助五郎が預った』造酒八、徳助は助五郎に五十兩預けて立歸る、助五郎は一杯飲んで己が家へ歸り、子分に言付けて、遊廊に遊んで、ブラ〜として居ります者を吉原に集めて、宗兵衛の家に喧嘩を捻じ込まうといふので、品川から根津から、板橋から北は小塚原より千住近傍の仲間一同へ、子分に言ひ付けて觸れて廻り、その五十兩を土臺になんかん者を集め込み明日の晩は宗兵衛の家を打壊してやらうといふ助五郎が氣組であります、此方は又造酒八、徳助が幫間に似合はず、昔を忘れぬ其心根を痛くも打喜むだ治兵衛は大門を出て、五十軒から衣紋坂に掛つて來ると、左に建つた高札場、今はございませんが、従前は高札場がありました、その前に黒助稻荷といふのがあります、それから衣紋坂に上がる、その高札場を通り過ると後ろから○『旦那、藏前の旦那』と聲をかけられ治兵衛が振返ると、黒の着附に長脇差を打込み、手拭で頬冠りをし裾を端折つて草履穿き 治『誰れた 助』私でございませぬ、助六でございませぬ 治『オ

オ助六か 助『嘘ぞ旦那今夜は御残念でございませう、お察し申します、併し幫間に似合はぬ、造酒八、徳助は見上げたもんでございませぬ、彼奴等はどうか早く幫間の足を洗はして、目にかけて使つてやつて下さいませ、それに付いて旦那、まあ私のお家にお入來なされ、旨くなくとも今夜は女房に酌をさして、一口召食つて下さいませ、私から貴方にお話をするにございませぬから 治『さうか、それぢやアお前の家へ行かうか』そこで花川戸助六が家へ治兵衛を連れて参りまして、格子を開け 助『お音羽や、旦那がお入來になつたよ』助六の女房音羽元は吉原一の全盛揚巻花魁 音『これは旦那様、サアどうぞ此方に 治』イヤ、今夜は飛んでもない厄介で、音『どういたしまして……』用意の酒肴を出して、音羽が酌をして飲みながら 助『さて旦那、この節吉原に這入つて來る、あの八木の隠居といふ奴は、私はどうも大名の隠居ぢやアなからうと思ふ、がませ者に違へねえ、なせがませ者だといふのを私が悟つたといふのに、彼の八木の隠居といふ奴が、大上總屋に遊びに行つて、大鳥

花魁の座敷に這入ったときに、旦那が花魁に拵いてやつた積夜具を見て、これが藏前の町人、坂倉屋治兵衛の拵へた積夜具か、町人の拵へたものは粗末なものだなアと笑つて、春風に積夜具をしたといふことを、大上總屋の若い衆から聞きましたかねえ、旦那の前でございしますが、大名の隠居といふものはそんなところに氣の附くものぢやアございませぬ、木綿と絹を出して、何方が宜いと言つたら、手觸りが宜いから、絹に手を出しませうが、縮緬と絹を出して、孰方の方が高いといつても分りッこのないもの、それを旦那の積夜具を笑つたといふから、何んでも大名の隠居ぢやアございませぬ、みッしり金のある者に相違なく、それが大名の隠居と化けて吉原に這入り込んで來たに相違ございませぬので、私が今夜子分に言ひ付けて、跡を蹴けさせるやうに手當をして置きましたから、私の思ひ込んだ通り行つたらば、旦那、明日の晩は屹度貴方さまの耻辱を雪いで、助六が吉原中の騒ぎを一番拵へてやらうといふ覺悟でございませぬ、今まで助六は人と喧嘩をすることは嫌ひでござい

ましたが、今夜葉村屋の仕打を見るに付け、私が吉原中が引繰返る様な騒ぎをやつて見ませうから、まア夜の明けぬ迄、善か悪かの音沙汰をお待ちなすつて下さいまし、治さうい、そりやア忝けない、治兵衛は心持を直して飲んで居る、こちらは助六に言ひ附けられた子分の蝶々の源次、鐘馗の源造、塔婆の三吉の三人が御はんぎやうの後ろに忍んで様子を見て居ると、明七つといふ頃に、大勢に送られて大門のところまで出て參る八木の隠居、丸左様ならば御隠居様、又明晩お待ち申上げます、と、艶辭澤山、隠居は駕籠に乗り、兩人の武士は駕籠の左右に附いて出掛けに行く、跡から助六の子分三人が、見え隠れに附いて行くと、土手へ上つて禿坂を下り、田町の袖すり稻荷の前から、上總屋といふ呉服屋に突當り、右手へ切れて馬道の通りへ出ると二丁目を、右へと取つて西の宮の處から、只今の郵便局の角へ出る、淺草廣小路から左へ切れ、ば並木通り、真直に行けば門跡前に突當ります、この時分雷門があれば、雷門から門跡前に掛ると申上げたいが、雷門は寛政七年に

建立をしたのでございませうから、將軍家は四代の家綱公の頃、まだ雷門は立ちませ
 ん十一代の家齊公の頃でございませう、門跡へ突當つて左へ切れる、又右へ曲つて、
 門跡の表門から菊屋橋を渡り、真直に廣徳寺前に掛る三人跡を附いて來ると、櫻香
 といふ小間物屋の前から上野の下に出まして、左に切れて山下から上野の廣小路、
 三橋のところ來ると、駕籠を下りたから、三人が三方に分れて様子を見て居ると
 駕籠から隠居が出来ます、御機嫌克うと駕籠屋は空駕籠を擔いで井口といふ齒磨屋の
 横丁を曲つて行く、塔婆の三吉が其の駕籠の跡を附ける、蝶々の源次、鐘馗の源造
 は三人の武士の跡を附けて行く、源造「エ、兄弟、こゝで駕籠から下あがって駕籠を
 他にやつて、三人でブラ／＼來る、如何にも可笑しいな、何處の隠居だらう、源次「事
 に依つたら加賀の屋敷の隠居ぢやアねえか、源造「さうかも知れねえ」跡を慕つて來
 る中に、切通を上つて行く、源次「全く加賀の隠居だ」と跡を附けて來る中に切通を
 上つて枳殻寺の前から加州の目暗長家の下、本郷の通りへ出て、兼安といふ齒磨屋

に附いて左へ切れる、一丁半ばかり行くと土屋といふ小間物屋があります、今はあ
 すこは古着屋になつて居ります、それへ附いて曲ると壹岐殿坂、これを下りて突當
 ると水戸様の百軒長家、水戸の隠居かと跡を附けて來ると、左にあらず、堀端に附
 いて真直に、どん／＼橋を渡つて、牛込御門を左に取り、神樂坂を右に取り、堀端
 をどこまでも行くから、源次「ハテナ、尾張の隠居か」と附いて來ると、市谷八幡を
 右へ取つて、堀端に附いて行くから、源造「ア、こいつは事に依ると紀州の隠居だ」
 とやつて來ると、その中に四谷御門を後にして、赤坂の紀國坂に掛る、紀國坂を下
 りて豊川稻荷を横に見て、左に切れて赤坂御門へ掛る、源造「ハ、アこいつ、松平出
 羽守様の隠居か」と、源次、源藏が附いて來ると、赤坂御門を潜らずして、右手へ
 切れて桐畑に掛る、黒田の中屋敷がありますから、黒田の隠居かと附いて來ると、
 黒田の屋敷の下を通つて、榎木坂へ出ます、右に行けば大和坂に出るが、左に切れ
 て葵坂に掛るから、源次「事に依ると金刀比羅様の神主だせ、源造「さうかも知れねえ」

話をしながら附いて来ると、金刀比羅様の前を過ぎ、虎の門の所より右に切れて、櫻田兼房町を通り、久保町の原に来るから、兩人呆れ返って 源次「何んていふことだらう、馬鹿に道を歩かせるやアねえか」愚痴を翻しながら附いて来ると、新橋の通りへ出て、銀座通りを真直ぐに京橋を渡って、四日市へ曲りこゝで、江戸橋を渡って、荒布橋を渡り、照降町から人形町通りへ出て、高砂町から久松町、矢の倉に出で、兩國へ出て、兩國橋を渡って左へ切れて、駒留橋を渡って、百本杭の河岸を真直に御藏橋を渡って行くから 源次「何處を行きやがるんだか、呆れ返ったものだなア」程もあらせす吾妻橋を左に取り、二つ列べた枕橋を渡り、向島の土手へ掛る、三圍稻荷も早や過ぎて、牛の御前を跡となし、白髭の社を後ろとして、本母寺へ突當たる、あれから切れて千住へ出る、逆に引返して千住の大橋を渡り、小塚ッ原のお處刑場の前から、山谷へ掛つて、痔の神様の横丁に曲ったから、さては親分が見込んだ通りと、こゝで源造と源次が二手に分れ、鐘馗の源造は山谷橋の上

行ッて見て居る、蝶々の源次は今戸橋の上に来て見て居ると、痔の神様のところから曲り込んで新町へ這入る、申上げるまでもない堀端に一塊茂れる森のある屋敷は、新町の彈左衛門尉の屋敷でございます、唯今は昔の新町を龜岡町と申します、彈左衛門の屋敷に這入ると、もう東が白んで来る、山谷橋と今戸橋の上から見居た兩人は、ホット息を吐いて 源「ア、草臥た、どうだいまア江戸中大概歩きやアがッて……」兩人一緒になつて 源造「どうした源次 源次「へとくになつちまつた、併し内の親分の眼は高いなア、確に睨んだ眼は外れねえ」これから兩人は、ドンドン花川戸に飛んで歸ッて来て 源次「親分今歸りました 助「どうしたんだ和郎達は、三吉は先刻歸ッて来た 源次「三吉は幸福だ、小哥と源造は驚ろきましたよ、親分まア江戸を大概一晩に歩いちゃった、饒舌ッても草臥れるんで歩いた日にやア堪らねえ、これく斯うだ、親分の見切った通り、新町に這入りましたよ 助「フン、さうか……どうでげす旦那小哥が今お話をする通り、饒に彈左衛門と見切を附けて置い

たのに間違ない、サアこれから耻辱を雪ぐのは今夜だ、まア御緩りお休みなすつて』と治兵衛を寝かして、これから助六は身内を充分集め、晩になれかしと待つて居る、さて充分に日は暮れ渡りました、助六は間者を入れて様子を探つて見ると、八木の隠居が相變らず、吉原の葉村屋宗兵衛方に乗込んで来て大騒ぎだといふ、時刻を測つて助六は、大門の會所廣兵衛に届けて置いて、助六一まきが仲の町に乗込んで来る、此方は葉村屋の門口は隠居の遊興で黒山のやうな見物。○「逃げく、見物は退きな」振返つて見物が見ると、男の中の男といはれる江戸一番の黒手組の親分助六、黒の着附に、白博多の帯、鮫鞘の長刀を打込み、助六の前に、古渡唐綾の着物、茶献上の帯を締め、立派な人物のやつて来るのは、これぞ坂倉屋治兵衛、白木の兩ぐりの駒下駄に、黒の鼻緒のすがた下駄を穿いたまんま、葉村屋の家にノッソ上り込んだ、宗兵衛夫婦は驚いて、宗旦那、氣でも違つたんぢやアございませんか、私の内へ下駄を穿いてお上んなすつて、宗兵衛の家も蟻が敷いてございます

助「何んだと、やかましい、和郎の家に蟻の敷いてあるのは、旦那に言はなくとも助六が知つてらア、穢れた家に下駄を穿いて上つたのが何んとした、餘計なことを吐しあがるな、和郎に用があるんぢやアねえ、二階の八木の隠居に用がある」と治兵衛の跡から助六が附いて行く、唐紙をガラリと開けて、治兵衛駒下駄穿きで、○「アイ御免よ、近頃この吉原に乗込んで、大層花を飾るといふ、八木の隠居といふ人に藏前の町人坂倉屋治兵衛が近附に来たんだ」兩人の家來が ○「ヤア己れ無禮者、素町人の分際として、御隠居に對し無禮者、目通りかなはん、そこ下れ 治何んだと、大層もねえことを言ひなさんな、目通りが叶ふも叶はねえもあるもんか、隠居に逢やアそれで宜いんだ」正面にでつぶり肥つた、赤ら顔の髭を撫でて居た八木の隠居 丸これく、兩人控へて居る、其方が聞傳へた町人坂倉屋治兵衛か、如何にも近附になつて遣はさう 治「さうかいそいつア忝けねえ、近附の盃は、隠居、町人ながら治兵衛の方から差すから受取つて呉れ」懷中に入れて置いた駒下駄を取出

しましてその上に盃を乗つけて、片襪を捲り上げ、下駄の前緒を足の拇指と食指で挟んで、ズイと隠居の前に差付け、治「サア隠居、治兵衛が差した盃だ、これから先きへ受けて呉れ、鬻「ヤア己れ不禮者、町人の分際として、何にゆへ足で盃を差すし、いふ法があるか、治「何んだと、篋棒奴、足で盃を差しても苦しくねえ、乃公は天下の町人だ貴様は八木の隠居といふのは全くの偽りで、眞實は新町の彈左衛門、誰れに許されて此の吉原へ遊びに這入った、巫山戯た謔言を吐くな」と駒下駄を向ふに蹴附けた、三人ながらアツと驚き、顔の色が變つたので、助「サア能くも迂奴等は巫山戯て居る、大東なことを吐しあがったな、藏前の旦那に代つて助六が相手になるから、片ツ端から蒐つて来い」と呼はる聲を合圖に、ドカ〜と上つて来た助六の子分、忽ち皿小鉢を打き壊し、三人を捕へてポン〜擲る、障子唐紙嫌ひなく打壊し、葉村屋夫婦をボカ擲り、箆筒だらうが何んだらうが用捨なく打き壊し、大八車に砂と鹽と積んで来たので、〇「ソレ家の中を清めろ」とドン〜と助六

の乾兒が、家の中に砂と鹽を撒き始める、〇「ソレ喧嘩だ」といふ中に、吉原中の騒ぎになつて来る、前に助六から會所に届けてあるから、會所からは何んとも言はぬ、併し外の家を壊すのではない、葉村屋一軒のために仲の町の騒ぎといふものは一方でない、引手茶屋は片側から戸を締めるほどの騒ぎ、ところへ彼の造酒八、徳助の依頼を受けて居た土手の助五郎、手後れになつたから、助五「花川戸の親分に先きを越されて面目ねえ、サアこれから先きは大上總屋に乗込んで、春風花魁の部屋を清めろ」と鯨波の聲を揚げて、乗込み来たり、大上總屋の家にドン〜上がるから若者「助さん、何んだい、亂暴しちやア困るぢやアないか」助五郎が、助五「分らねえことはしねえや、和郎のところへ来た八木の隠居といふのは、新町の彈左衛門だ、坂倉屋の旦那が遊びに来る大鳥の座敷に踏込まれちやア、花魁の座敷が穢されるから、清めに来たんだ、まご〜しやツがると片ツ端から打殺すぞ」と大勢二階へ上つて、大鳥花魁に、助五「お前さんこの座敷に居ると汚されるから外に出てお居な

せい今座敷を清るから』と大鳥の座敷へドン』砂と鹽を撒き散らし 助五『春風の部屋を打ッ壊して仕舞へ』と、箆筒から鏡臺を打壊し、積夜具でも何んでもビリ〜に引裂いて仕舞ひ、大上總屋の家は大騒ぎ、さて助六は仲の町を引取ッて、土手の助五郎の一組は江戸町一丁目から引揚げる、仲の町で助六の組に出會ッて 助五『アこれは大親分でございますか、御苦勞様で 助オ、助か、御苦勞よ、サア来い』といふので、鯨波の聲を揚げ、吉原中に鹽と砂を撒きて十分に清めをして、大勢目出度〜の若松様よ』と有る丈の砂と鹽を撒いて一統引揚げ、花川戸を指して行く大上總屋の春風は相手が彈左衛門と分り、何に面目あッて、人に面を合されべきかと、十八歳を一期として、哀れにも春風は自殺をいたして仕舞ひます、さてそれから夜が明けると、仲の町の二つ矢羽根の紋の附いた黒紬の羽織と着物が山のやうに打棄ッてある、ところが誰れも拾ひ人がない、下卑張ッてる古着屋がこれを拾ッて山の手の方なら知れねえと山の手の方に賣りに来る 古着屋『今日はどうです、斯う

いふ屋敷の出物があるが、買はねえか ○』何んです 古着屋『黒紬の紋附で ○』紋は何んです 古着屋『紋は二つ矢羽根だ ○』戯談言ッちやアいけねえや、二つ矢羽根の黒紬は、そりやア彈左衛門の仕着せちやアねえか、そんな物を乃公の所に持つて来られちやア、家が穢されて困るちやアねえか、昨夜吉原でこれ〜と大騒動があつたぢやアねえか 古着屋『もう何にか此方にも響て来たかな ○』巫山戯なさんな、山の手だつてお前江戸ぢやアねえか、吉原の騒動が知れずに居て堪まるもんか』劉頭持つて来た一包をお荷物にして、田舎に逃げ出すやうになる、さて此の吉原の大騒動で、治兵衛の物入はどのくらゐだか知れませんが、併し金に換へられないのは悉く治兵衛が耻辱を助六に雪いで貰ひ一層前より坂倉屋治兵衛は男を磨いて来た、なにも此の方は藏前の町人だから、俠客の名前を賣りたくはないが自然と名が上がります、或る夜のこと、雨の降つて居るのに吉原で遊んで居るところに、藏前のお宅から迎ひが来たといふので、長刃を打込んで、治兵衛が大上總屋を出て、吉原の土手

へ掛ると、數十人に追取巻かれて、八方から斬立て、来る、治兵衛はたつた一人で大勢を相手に斬結びます、其の中に氣轉の利いた者が、助六の方に注進をする、助六は韋駄天の如く吉原堤に飛んで来ると、鯨渡の聲が揚つて居る斬合に、腰に帯びたる脇差を引抜き、助六、卑怯未練の奴輩、片ツ端から助六が相手になるから来い』と乘込み、當るを幸ひに、吉原土手へ大勢の死人の山をなすばかり、ここで助六が腕の續くだけの働き、これや前代未聞の吉原土手の働きをいたしました、坂倉屋治兵衛は數ヶ所に手疵を受けました、其の中に一方は吉原に知らせたから、吉原の大勢が治兵衛に怪我があつてはならんと繰出して来る、助六の身内は一同支度をして吉原土手に飛んで参ります、これが吉原土手の二度目の騒ぎ、さてこの騒ぎの起りは彈左衛門が吉原葉村屋に於て、治兵衛助六のために恥辱を與へられたのを遺恨に思ひ、彈左衛門の手下の者が集つて、偽手紙を治兵衛の許に持たせてやり、首尾能く治兵衛を吉原土手へ誘き出したのでございます、然るに坂倉屋治兵

衛は數ヶ所の疵を受けて、其の場では落命はいたしません、これが原因に成つて間もなく此の世を去りました、其の時に助六に自分の差して居た濡衣と鎧を打つた貞宗の脇差を下さいました、惜しいことをしたのだが仕方がございません、廊内一統の者この坂倉屋治兵衛の最期を聞いて、泣かぬ者はございませぬ、助六に於ても大恩ある治兵衛に先立たれて、悲み極まつて、一時は唯茫然として仕舞ひましたが、かくては成らじと氣を取直して、後々の追善供養怠らず相勤めましたのは、流石に男を磨く俠客の、義を重んずる致方と、誰れとて感せぬ者とはなく、其名は益々高大と相成り、引續き勇ましき御話しも御座います、餘り長く相成りますので、先は此邊で讀み切りと致し置きます、此の助六も惜いかな、三十五歳を一期といたして世を去りましたが、その女房の揚巻は夫助六の初七日の墓参りをして墓の前で、毛氈を敷いて立派に装束をして自害をいたして相果てました、寺は淺草新鳥越佛頂山易行院でございまして、そこに揚巻助六の比翼塚が遺り、其名前は天下に響いて

居ります、劇場では坂倉屋治兵衛では出来ませんから、助六の名にいたして、彈左衛門の名前を罷の意休といたして、助六が吉原で揚卷の身に付いての喧嘩をしようと、いふ狂言を仕組みまして、これが成田屋の歌舞伎十八番に遺る、江戸紫鉢巻といふ下題でございます。

金看板甚九郎

桃 川 實 口 演

第一席

金看板伽羅の兄い、紫紐甚九郎といふ俠客の傳記を申し上げます、これは安永の年間、京橋の丸屋町に居りまして、炊出しを渡世とし、大名方の出入もいたしましたもので御座います、でこの甚九郎といふ人は何んで賣出したといふのに、上州の木崎無宿の瓜の仁助といふものの事情を憐れと察しやつて、遂に其者の代りに、日數十三日の間頼まれて入牢をしたといふ所から、その名前が江戸市中に弘まりました、尤も此の人は信州松代の城下、巴屋と申します宿屋の伴でございます、一體此の信州からは随分名物が出ました、松代からは金看板甚九郎が出るし、小諸在千代田村からは雷電爲右衛門といふ桶胴一枚肋の力士が現はれました、上田からは昔時真

田幸村といふ智將が出て居、裏善光寺からは直助權兵衛といふ一人兩名の大賊が出ました、こんなものは出なくても宜いのです、それですから信州の人は國のことを自慢して、俺の國のことを江戸の人さへ一步譲つて、おの字を附けておしなと呼ぶ、おしなと呼ぶのがどうも餘り尊敬をしたわけではない、おしなと呼ばれて喜ぶのも可笑なわけ：：餘事に涉つて恐入ります、此の甚九郎と云ふ人が三十六の時でございます、北の町奉行曲淵甲斐守、前名山淵正九郎といつて、先づ町奉行では江戸表で屈指の人でございます、奉行といへば大岡越前守に一を占められて居るやうでございますが、必ず越前守忠亮公ばかりが名奉行といふのではございません、近くは遠山左衛門尉、池田播磨守、筒井伊賀守などいふ名奉行もありました、遠山左衛門尉など、いふ人は、前名遠山金四郎といつた御家人でございます、本所の北割下水に居りまして、武士の癖に文身を腕から足まで彫つて、朱鞘の大小を手扱み、吉原へ出入をいたします、ソレ遠山の金さんが來たといつて、安店の女などは待ッ

て居るくらゐでございます、吉原の地廻りなどは、遠山金四郎を見ると、逃げるといふくらゐ悪かつた人で、それが實家に立戻りまする間もなく町奉行にお召出しになる、そこで遠山左衛門尉、けれども天下の奉行が文身だらけでは御威光に係はりまするから、手袋を箆めたり、或は衣紋留をしたりして、見へる處の身體の文身を隠してお取調をいたしますが、活断でございます、遠山様もえらいお方だが可笑なことがあつた、吉原で大店ではございますまい、小店の女郎が引合に出ました、女郎ばかりは昔白洲に出ますのに、ちやんと化粧をいたして、櫛笄を差して店を張りまする装で出たものでございます又女郎に限つて蓆に坐ります、白洲に坐つて居りまするには砂利の上に直接に坐るものでございますが、女郎だけは蓆を敷いて其上に坐りました、鶴本の玉照といふ女が坐つて居りますると、向ふの唐紙が開く遠山左衛門尉殿繼社袴を着けて、ツ、〜とお立出でになり、端近くお坐り遊ばしてジロリと一同の者を見た、すると坐つて居た女郎が左衛門尉殿の顔を見て 玉〴〵

お奉行様はどんな怖い人かと思つたら、遠山の金はんぎますね」大抵な者で御覽じろ絶口して仕舞ふ、何んぼ悟つた方とは言ひながら、與力同心、突這の者まで一同頭を下げて、嗚ぞお困りだらうと思つて居ると、遠山左衛門尉様莞爾お笑ひなすつて左「まだ其方女郎をして居るか、いつまでそんなことをして居るんだ昔吉原へ這入つた時は、遠山の金はんと言はれると嬉しかつたが、今は町奉行の遠山左衛門尉だ、貴様のやうに言はれると小哥は困る」氣樂なお奉行もあればあるもの、併しこれ十分出來て居るから洒落たことが言へる、其の呼吸で人を調べましたから、遠山左衛門尉も名奉行の中に數へられました、けれども其の中で一番有名なのは大岡越前守、此のお方は前名忠右衛門と仰しやつて、伊勢の山田奉行をしてお居でなすつた、其の時分に可笑しなことがありましたのは、松本村百姓總代與兵衛、これが願人で願書を出した、その願書が珍らしい願書でございます。

恐れながら書附を以て願ひ奉つり候、一二三四五六七八九十と、引續きて村方困

難仕つり候間、何卒お上様のお慈悲を以て、村方一同相治まり候やう、此段願ひ奉つり候以上

と目安方が讀上げますと、大岡越前守殿お聴取りになつて、越總代與兵衛といふは其の方か、與へーい、甚其の方差出したる願書はトント分らんではないか、斯様斯様なことで村方困難をいたす、これを取鎮め呉れと申すなら分るが、一二三四五六七八九十といふ數へ字であるから、何んのことであるか更に分らん、與恐れながら其の義に付きましたは手前から申上げたう存じます、越ン、どういふ次第か、與へエ、一々こ申上げます、二がくしくはございますが、三箇年この方四箇村の騒動、五穀も六々に實りません、七を置きますやう、八をかきまますやう、九はずに居りまするほど十箇村の難義……、越黙れ、どうも不届な奴だ、其方奉行所を何んと心得る、口上茶番の稽古場と心得るか十方もない奴だ、九はずに暮すなど、馬鹿者め、八を八とも思はん、七を置くなど、六な奴は一人もないわ、五公儀を

輕しめる、四罪と思へど、三代公の掟に任せ、二ツくい奴ながら一度は許す、罷り立て』と仰しやツた大變な御理解があるもの、これは其の作者の拵へたものがございますが、拵へた中に能く出来て居ります、俗にこれを大岡の鸚鵡返しおどりかへの御理解といふ、永く山田奉行をいたして居られました、八代將軍吉宗公のお見出しに預り江戸表南の勸役を仰付けられました、永年町奉行といふ大役をお勤めでございます、越前守殿が生涯お取調遊ばした其の口數ばかり千八百二十餘件といふのでございませぬから、大したお調べでございます、誰れも越前守殿の裁判に係りますれば、二年も三年も掛らうかと思ふのが、二月か三月でバタ／＼結局が着きます、去れば江戸市中の者も皆越前守様は名奉行だといふ噂をいたします、或る時將軍吉宗公、越前守をお招き遊ばして、吉越前、餘の儀ではないが、市中町人共其方を指して名奉行と申す由、全く左様か』越前守、恐縮いたしましたして、越上意恐入り奉つります、名奉行など、申しますること思ひも寄りません、吉併し如何なることでも速かに取調

べをいたす由だが……越それは天下の御威光を頭に戴き、是非善悪を辨へまするに、別段これが易しい、これが難かしいといふのはございませぬ、願書の表に依つて常人を調べ、善悪を判ちまするは、心易いこと、存じます、吉左様か、余は未だ其方の取調をいたして居るところは聴かん、余を調べて見よ、どうじや余を調べることは出来ぬか、越恐れながら將軍家として、調べるだけの箇條がございませぬれば、願書をお認めになりましたしてお差出しを願ひたう存じます、吉さうか、暫く待て』越前守を待たして置いて、八代將軍吉宗公、越前守の智慧を試めさうと思召ましたか願書をお認めになりましたが、其の入組んで居ること、調べるのに手の着けられないうやう、四五名の儒者をお呼寄せに相成つて、それで拵へた願書だから餘程むづかしい、第一願書の長さが彼れ此れ三間半もある、出来たすとこれを持つてお立出で遊ばし、吉越前、この願書を見て、これに基いて善悪邪正を速かに調い、越委細畏まりました』越前守その願書を取上げて見ると大層長い、何にさま長いから面倒

だといふわけではございませんが、無益なことに五日も十日も日を費やすやうなことはいたしません、才智の越前守願書を片側に置いて、越前申上げます、吉何んぢや、越前取調へは仕つりまするが、願人一人といふことはございませぬ、差添の者がなければなりません、吉フン、それは何者がいたす、越前先づ家主、名主代、五人組などでございませぬ、天下の法でございませぬから、吉さうか、宜しい所へやう、松平伊豆守がお側に居たから、吉伊豆、其方家主になれ、遠江、其方が名主代美濃は五人組、御老中、若年奇、皆んなお役を言ひ附けた、仕方がないから、三人、畏まりました、吉越前、この通り取揃へた、越前それからして願ひまするが、調べまするのは天下の役人、調べを受けまするのは天下の町人でございませぬ、調べをいたしまする者が下座いたして、調べを受けまする者が上座いたしまするやうでは相済みませぬ、吉尤も千萬だ席を譲る、越前守上座に来てピタリと着座をすると、八代公始め御老中、若年奇、一同下座に着いてお辭儀をして居る、越前守願書を見て居るか

ら、それに依つて調べたら一つ困らしてやらうと、八代公待つてお居で遊ばすと、願書はお手に載せたなりでございませぬ、越前願人一同揃つたか一同ウ……へエ、越前に出る、頭を上げい、一同ア、どうも……へエ、越前願人、江戸表、何處に住居をいたす、八代公弱つたね、詰らんことを聞く男だなア何處と申したら宜いか、本丸か……そんなことを願人が言はれまい……伊豆守が側から、伊豆様仰せ遊ばせ、天正の十八年八月、神君御入國の砌り、お供をいたした三河の町人に下し置かれましたるが神田三河町でございませぬ、三河町に住居いたすと仰しやたら越前咎めることにはござりませぬ、吉エ、神田三河町一丁目に住居いたします、越前フ、渡世は何をいたす、吉こりやア質が悪い、どうしたものであらうな、伊豆、無商賣と申さるか、伊豆無商賣は天下の禁制でございませぬ公の持高は八百萬石でございませぬ、八百屋と認めて八百屋など、申します、青物渡世八百屋ぢやと仰せられませぬ、吉成程、さうか……エ、青物渡世にございませぬ、越前フ、名前は何んと申す、吉越前つまらん

ことばかり聞いて居るな、伊豆、八代將軍と言はうか 伊「八代將軍が町奉行の調べを受けまする氣遣ひはございません、これは斯様遊ばせ、徳川の徳といふ字を取り、徳平らといふところから、八百屋徳平と仰せられませ 吉「成程これは旨い、八百屋徳平と申します 粵「神田三河町青物渡世徳平か 吉「左様でございます 左「家主、名主代、五人組、一同揃つたか」御老中も仕方がないから頭をビヨココく下げて一同斯くの通り揃つて居ります 越「徳平、面を上げる 吉「ア、どうも酷いな…… 越「願との越聞届け唯今願書の上から取調べ遣はす、が、先刻より奉行越前、其方の姿を見るに、葵御紋附を着用して居るな、これ徳平、徳川の御治世にありながら、葵御紋の大切なることを知らんか、近く分れた竹谷松平は一輪櫻、府高津松平は重扇と御遠慮申上ぐるに、青物渡世の身分として葵御紋附を着用いたすとは不都合な奴吟味中入牢申付ける 吉「もう澤山オ、驚いた驚いた、越前は酷い奴だ、願書の表は取調べんで…… 越「それが臨機應變と申しまするもの、公の御認めに相成りました

る願書は、餘ほど込入つたることと心得ました、左様な事に日を費すは無益な義にございませ、依つて當座の考、御紋附を以て取調べまして 吉「入牢だけは堪忍しろ併し越前、其方は奇々妙々、其の場に臨んで當意即妙の吟味をする、成るほど名奉行と申しても仔細ない」と仰せあつた、して見ると越前守様は大したもの、此等は全く即妙のお話であります、ところが曲淵甲斐守は北町奉行を永く御勤役になりました。瓜の仁助といふものは木崎無宿でございます、悪事の數も澤山にあり、どうしても死刑は免れません、今日お呼出しになつてお取調べ、仁助も悉く白状をすることになります、其の日は下げましたが、お仕着を着て、細い繩が掛り、繩取が後ろに附きます、牢屋同心が一人附いて、六尺棒を持つて今日で謂ふ新平民、小屋者が附いて數寄屋河岸まで参ります 仁「エ、旦那へ、少々お願ひでございます、繩取「何んだ仁助 仁「エ、どうも腹が痛うございまして、つめを願ひ度でございます」つめといふのは雪隠へ参りますることでございます 繩取「我慢しろくッ、傳馬町

へ行ッてから、つめへでも何處へでも行け 仁「旦那、そんなことを仰しやいませんで、どうぞお慈悲でございませ、こればかりは幾ら我慢をしようといッても、出掛けたやうな鹽梅で、どうも堪りません 細取「仕方がねえなア」丁度河岸の方に總雪隠がありました 細取「ちやア彼處に行ッて、つめをしる 仁「お慈悲でございませ、有難うございませ」左の手は緩めてやりました、便所に這入るんでございませから、どうしたッて兩方の手が自由にならなければ跡で始末をすることが出来ない、細取は細を押へて雪隠の前に立ッて居る、中に這入ッた仁助が出ればこそ、いつまでも脊屈んで居る 細取「ヤイ、早くしねえかい 仁「エ、雪隠に這入ッて、餘まりいさむと壽命の毒だと申しますから、私は平生から出次第にやつつけます 細取「馬鹿ア言へもう和郎婆婆が無えんぢやねえか、早くしろ 仁「そんなことを言はねえで、少し待ッてお呉んなさい 細取「あんまり長えなア 仁「そう急くと出掛ッたものが引込みます、どうぞさう言はずに少しの間…… 細取「少しの間ッていつまで待ッて居る

んだ、旦那も彼處に待ッていらッしやる」細取も少し疥に觸ッたと見えて、細尻をグイと引張ッた途端、ドブツと中で音がした 仁「ひどいことをなさいませねえ、私が出やうと思ッて、腰の始末を仕掛ッたばかりのところ、引張ッたもんでございませから、雪隠へ片足落しました 細取「ヤア落ちたか」驚いて雪隠の戸を開けて見ると、仁助は横になッて居る 細取「オ、臭い臭い、これ、なせ中をほだてるんだ、仁「なんぼ私が斯んなものだからといッて、細の先を引張られてはどうすることも出来ません」やう／＼のことで上げたが、まるで片足辛子漬みたやうになッて居る 細取「ひでえことをしたなア 仁「どうも仕方がございません、出来たことでございませから」牢屋同心がこれを見て 同心「ひどいことをするなア、貴様が無闇に細尻を引張るから、そんなことになる、仁助どうする 仁「旦那、この通りでございまして仕方がございませんから、どうぞ洗はしてお呉んなさいませ同心「何處で洗ふ 伊「この川に入れてお呉んなさいませ 同心「それでは片手を緩めてやるから、早く洗へ、

仁「へエ、旦那、なんでもこれぢやア歩けません 細取「早くしろ 仁「へエ、難有う存じます」それからお深の方へ下りて参りました細を持って居る者も成るだけ緩くしてやります、さうでなければ洗はれません 細取「仁助、早くしろ 仁「さう早くしろ早くしろと言ったって、今川へ這入ったばかりでございませうから、さうはいきません」ザブ／＼／＼頻に洗って居りましたが、洗って居る河岸には多くの人
が立って居る 甲「何んでげす 乙「罪人ですが 甲「何をして居るんでせう 乙「今不淨場に落込んだんで、洗って居るんです 乙「さうですかい」牢屋同心はあんまり臭いもんだから、少し離れて様子を見て居る、細取が 細取「仁助、まだか 仁「お前さんみたやうに疝癩持ちやア困る、心持が悪いからもう少し洗はしてお呉んなさい、細取「洗はして呉れたっていつまで洗って居やアがるんだ」丁度刻限が誰ぞか彼そか、火點し頃と夕間暮、細取が茫乎して居るのを見て、仁助は腰切り川に這入って洗って居る振をして、グイと細を引張った、押へて居た細を取られたものでござい

ますからよろ／＼と踰越けてドサーリ倒れる、向ふの持つて居た細を引奪て、其の細で横面を一つ撲倒し、その儘中に飛込んで逃出した ○「ソレ細脱けた」といふので、牢屋同心が 同心「ソレ一同は向ふに廻れ、こちらに人を遣はせ」と騒ぎをやった、ところが野郎それつきり浮いて来ません、沈む氣遣ひはないから何處ぞへ上がるだらうといふので、數寄屋河岸の騒ぎは大變でございませう。

第二席

甚九郎は長火鉢の前に坐り、これから一杯飲むつもり、傍に夜食の膳が出て居ります、ブーンと臭い香ひがしたから 甚「オイ／＼、今時分来ちやアいけねえせ、朝来ねえ／＼、肥取だらう 仁「エ、御免下さいまし 甚「ソム何んだ」臺所の口から這入つて来たのは、着て居るお仕着がピツシヨリ濡れて、其の上汚いものが附いて居ります、頭を見ると、能く芝居をする百日假髪といふやうな鹽梅、月代が延びて色が眞青、瘦容でございませう、中脊中肉、何んだか病人らしい顔容、臺所にチャント坐

ツて 仁エ、御免下さいまし 甚何んだく、何處から這入ッて来た 仁エ、親分様、相済みませんが、今臺所から這入りました 甚臭いなア、冗談ぢやアねえ、何んだ和郎は 仁エ、私は上州木崎の在、龍神村無宿瓜の仁助と申します者でござい
ます 甚なに、木崎無宿の仁助だ 仁へエ 甲何にしに來たんだ 仁エ、親方を男
と見掛けて、お願ひ申すことがございます、實は今數寄屋河岸で細脱をして参りま
した 甚エ、…細脱をして來た 仁へエ、私は今年三十六でございしますが、十四
の時から手癖が悪うございまして、故郷に居られませんが、越後、信州、加賀、能
登、越中と國々を廻り廻ッて、京都大阪にも暫く居りましたが、將軍様のお膝下江
戸に越したことはございせんから、江戸へ參つて盜賊もいたしますれば、又外に
チツト荒いこともいたしました、所詮天の網は免れませんもので、去年の三月お
召捕と相成り、お奉行は名代の曲淵様、右へ逃れば左から調べ、白と言へば黒い
と消され、なか〜私は娑婆がございせん、もう今生といふ間際になりました、

甚フン 仁とところが段々考へて見ると、盡した悪事で、私が死罪獄門になるのは
覺悟の上でございしますが、國に一人の母親がございまして、昨夜も牢内で母親が煩つ
て居る夢を見ました、今調べが濟んで出る時に、途中で見掛けた親子の者、母親と
いふのは七十恰好、まだ二十歳の坂を越すか越さねえくらゐの息子が手を引いて、
母親さん危のうございまして、お腰が痛ければ負ッて行きませうとかと言はれた時に
は、私は胸が一杯になりました、同じ人間でありながら永年家出をして仕舞ひ、手
紙一本出すじやアなし、母親の生死のほども知れませんが、昨夜の夢で考へて見りや
ア、まだ國に居るだらうと思ひます、一度母親の顔を見て、心残りのないやうにし
て、立派にお處刑を受けます考でございまして、付きまして私が細脱をした、ソラ
道中に出たといへば、八州に沙汰をして、定めし嚴重なことになりませう、それぢ
やア母親に會ふことが出来ません、お見受け申して願ふのは親分、弱者を助け強者
を挫く義侠心炊出しの甚九郎親方は大したものだと聞ききましたから、それを頼に參

りました、どうぞございませう親分、長いことちやアございませませんが、日數十日の間、私の代りに入牢をして下さることにやアなりますめえか、それをお願ひ申さうと思つて参りました 甚、フン、ちやアなにか、和郎がこれから母親の所に行つて別れを告げて来るその間、追手の掛らねえやうに、此の甚九郎に牢に這入つて呉れといふのか 仁、左様でございませう、御無理なお願ひではございませうが、御恩は決して忘れません、御承知なすつて下さる事にやアなりますまいか… 甚、さうよなア端た野郎だが男と見懸けて頼むと言はれたのを、断はるのも腹を見られる、よし、仁助、承知をしてやらう 仁、エ、それちやア親分、御承知下さいませうか 甚、乗り掛つた船だ、和郎も細脱をして来るくらゐちやア、能々だらう、乃公も親孝行をしてえと思ふが、両親にやア小せえ時分に別れ、故郷の松代へ手紙を出したところが他人ばかり、孝行のしたい時分に親はなし去りとても石に蒲團は着せられず、假令盗賊をしても、料見を改めて母親に一目會つて死にてえといふのは感心だ、行つて來

るが宜い 仁、そりやアどうも難有うございませう 甚、和郎手ぶらで行くのか 仁、エ、母親に幾らか小遣ひを置いて行きます積りでございませう 甚、そんな状アして、些たアなにか金でも持つて居るのか 仁、此處にやアございませませんが、武州の一の宮、氷川明神様の御神木の傍に、四年跡に百兩金を埋けて置きました、誰れも知つてる者はございませんから、その金を掘出して母親に土産にいたします 甚、フン、さうか、併し其の装ちやア行けめい 仁、そこをお願ひ申してえんで、親分のしたうまで宜しうございませうが、どうぞ一枚着物をお呉んなさいませ、路銀はいりません、途中でちつとづつ盗賊をして… 甚、これ…、さう事が極つたら、途中で盗賊なんかアするな、待て、乃公が月代を剃つてやる、旅装束も揃へてやるから待つてろ、 仁、そりやア難有うございませう、實はこの頭に困つて居ました、斯んなに髪が延びてちやア、途中にやりやア一遍にアングリ喰ふだらうと斯う思つて居りました、流石は丸屋町の親分、何にから何にまでお氣を附けられ難有う存じます 甚、此方へ來

るが宜い、臭いなア 仁「それア雪隠に落ッこちたんです、それを洗ふつもりで細取を川の中に引張り込んで、やう／＼今参りましたんで…… 仁「どうだ、一杯飲むか 仁「へエ、難有う存じます、御馳走様で……小せいものより大きなもので頂きたうございます 甚「さうか」兩人の者が話をして居るところへ、歸ッて来たのが甚九郎の女房おまさ、隣家の内儀さんと一緒に風呂に参りました、湯上りで 甚「ねえお内儀さん、大變ぢやアございませんか ○「本統にねえ、細脱をするなんて悪い奴でございませぬ、どうせ善い者は牢に這入りやアしませんけれど、嘸ぞ附いて居た者が皆んな迷惑をいたしませうねえ 甚「それアどうも仕方がございませんや、又晩に遊びに入らッしやいまし ○「行きますよ、御馳走して下さい」女同士は口の五月蠅もの 甚「今歸りましたよ……ア、臭い 甚「ヤイ／＼何んだ、門口から鼻ア摘んで這入るやつがあるもんか 甚「だッてお前さん臭いぢやないか、何んだいあの臺所に居る人は 仁「私でございませぬ、私は今數寄屋河岸で細脱をいたしました木崎無

宿の瓜の仁助と申す泥坊でございませぬ 甚「お前さん、何んで泥坊なんぞを呼ぶんだい 甚「呼んだんぢやアない、先方から這入ッて来たんで和女ちよッと剃刀を出して呉れ 甚「どうするんだい 甚「宜いから出せ……和郎此方に来ねえ、おまさ、表の障子を締める、誰れが来ても和女が其處で應對をして、此方に通さねえやうにしろ 甚「何んだッてお前…… 甚「用があるからさう言ふんだ……サア此方に来ねえ其處に水が汲んであるから頭を潤して来い、剃ッてやるから 仁「濟みませぬねえ丸屋町の親分に月代を剃ッて貰ふなんて、斯んな夢みたやうなことはございませぬ、どうかお願ひ申します」すツかり頭を潤した様子甚九郎器用な男でございませぬから 甚「どうせ和郎は首が無くなるんだから、痛え位は我慢をしろ 仁「幾ら首がねえか 甚「さう引ッかゝれた日にやアかたアございませぬ」どうか斯うか頭を剃ッて 甚「其の通り、それから油元結ですツかり仁助の頭を結ッてやりました 甚「どうだ

良い心持か 仁「どうも軽快いたしました 甚「おまさ着物を出せ、木綿で宜いや、それに襦袢から横鼻褌を出さなくツちやアいけねえ……なにさ、宜いから黙ッて出せ」女房も仕方がない、斯ういふ顔役の人でございますから、仕立下しの木綿着物の五枚や八枚は始終出来て居ります、晒綿を持つて来たのを寸法を測ッてピリ／＼と切ッて呉れた 甚「サア仁助、横鼻褌を締めろ 仁「有難うございます」金を五兩白い布に括んで 甚「こいつは少ねえが小遣にしろ 仁「何にから何にまで難有うございます」木綿の袷に薩摩の單物を重ね、博多の帯に上三尺、脚袢から甲掛すツかり揃へまして 甚「何にも忘れ物はねえかな 仁「どうか手拭を一本に半紙を…… 甚「違へねえ、さうだった、おまさ、その紙と手拭を出してやんな 甚「お前さん、どうするんだい 甚「どうしたッて宜いや……仁助、これで宜いな 仁「左様でござります、これでもう何にも忘れ物もございませぬ 甚「それちやアマ十日だな 仁「へエ、十日といふ約束をしたところが、六日か七日にやア歸りますが、二三日延べを打ッて置

きます、どうか親分お願ひ申します 甚「もう一杯飲んで行かねえか 仁「もうお酒は澤山でございます、斯うやッて居る中も、母親の顔が眼の先に散見やうに思ひますから、これでお暇をいたします 甚「おまさ、一寸表に行ッて見ろ、何にか手先でも立ッて居やアしねえか 甚「ハイ…… 甚「ハイちやアねえ、早く行ッて見ろ」亭主に言はれて、おまさは表へ行ッて見たが誰も立ッて居る者もございませぬ 甚「誰れも居ませぬ 甚「居なければ宜い、まア氣を附けて行け 仁「姉さん、飛んだことを親分にお願ひ申しましたが、早速御承知下せいでまして難有うございます、これから上州木崎の在龍神村まで行ッて來ますから、宜しくお願ひ申します 甚「さうかい何んだか知らないけれども氣を附けておいで 甚「草鞋があツたか 甚「今妾が出してやツたよ 甚「そいつは能く氣が附いた……そこらに菅笠が置いてあツたッけ冠ッて行け 仁「ちやア拜借して參ります 甚「まア／＼待て 仁「何にか御用で…… 甚「違へねえ、肝腎なものを忘れた」甚「九郎は箆筒の抽斗から道中差を取出し 甚「仁助、

犬威した、こいつを差して行け 仁難有うございませ、この支度で差して行きませ
 んと、却って目立ちますから、それぢやア親分頂いて参ります、御機嫌宜しく 甚道
 中氣を附けて行けよ 仁難有うございませ、いづれ歸りまして、その節お禮を申し
 ますから……」 瓜の仁助は其の儘に笠を下げて出て参りました まさ「ねえお前さん
 あの人の何にを頼まれたんだい 甚何にを頼まれたって、けちな野郎だが、男と見
 込み頼まれた以上は仕方がねえぢやアねえか まさ「仕方がないって、どうするんだ
 い 甚黙って居ろ」 仁助の脱いで行つたビツシヨリ濡れたお被仕着をぐるぐると丸
 めて、帯で胴中を括して下げるやうにしました まさ「お前さん、そんなものをどうす
 るんだい 現能く五月蠅いことを言ふなア、どうしたって構はねえ……それぢやア
 おまさ、ちよいと行つて来る まさ「何處エ 現北の奉行所に行つて、今夜は傳馬町
 の牢屋へ泊るんだ長へことはねえ、十日ばかりで歸つて来る まさ「なんだい、なん
 だって十日ばかり歸らないの 現實は彼の仁助に頼まれて、親子の別れをしに行く

といふから、野郎を助けてやツて、彼奴の歸る迄人代りの入牢をして遣る、十日經
 ツて歸りやア宜いが、人の心は知れねえもんだから、宜いことにして野郎がそれき
 りになりやア、仁助の代りに乃公がお處刑になるんだ まさ「呆れたねえ、お前さん
 を頼む奴も、又頼まれるお前さんも、あんまり變つて居るぢやアないか 甚仕方が
 ねえ、斯ういふ渡世をして居るから、随分難儀なことも引受にやアならねえ、それ
 ぢやア行つて来るせ まさ「あれまア冗談ぢやアない、行つて仕舞つた」 甚九郎はお
 被仕着を證據にして、北町奉行曲淵甲斐守様のお役宅に、夜中ではございませが願
 ツて出ました。

第三席

昔時の奉行所は今の裁判所でございます、夜分でございますから、丁度宿直が
 八丁堀にお集りに相成ります、吟味與力大澤藤九郎殿でございます、訴所から小
 使が参りまして 小使「エ、申上げます 藤「何んだ 小使「京橋丸屋町に住居をいたし

まする炊出し甚九郎と申します者が、急にお白洲を願ひたいと申して参りました
 藤明日のことにしたら宜からう 小使左様申しましたところが、當人何んと申し
 ましても歸りません 藤然らば白洲に廻せ 小使畏まりました」と小使は右の由を
 申します、甚九郎は濡れて居りますお被仕着を帯で結んで、これを提げ、白洲
 に出ました、藤九郎殿御覽になりまして 藤甚九郎といふのは其方か 仁左様でこ
 ざいます、夜分出まして相濟みませんが、晝まで待つわけになりません、一通りお
 聴取りを願ひたう存じます 藤何んの件だ 仁今日數寄屋川岸で細脱をいたしましたし
 た上州木崎無宿の瓜の仁助の一條でございます 藤ブン、仁助は其方と何にか別懇
 の者か 仁さうではございませんが、實は斯様く云々で、瓜の仁助に頼まれて、
 お被仕着を證據に入牢をいたしたうございます、就いては十日の間、仁助追跡の儀
 は御猶豫に預かりたい」と、甚九郎の達辯でございますして申上げます、大澤藤九郎
 殿驚いた、世の中に頼まれる事に事欠いて入牢を頼む、……けれどもこれは私事

に處分するわけに相成りませんから、夜中とは申しながら右の次第を曲淵甲斐守殿
 に御照會に相成ります 甲斐守殿御聽濟に相成りまして 甲當人願ひの通り入牢申付
 けるやうに」とありました、そこで甚九郎は其の晩大傳馬町の大牢へ入牢といふこ
 とになる、ところがもう甚九郎が入牢をしたとありますと、其の翌る日から差入
 物がどツさり這入る、自分が悪い事をして入牢をしたんぢやアない、頼まれて仁助
 の代りに十日間入牢をして居るといふものでございますから、江戸表の顔行が色々
 な物を差入れますので、牢内の富貴は別段でございます、甚九郎も牢へ始めて這入
 った様子を見たところが、今の監獄とは違ひまして、従前徳川幕府の頃はひの傳馬
 町の牢内は厳しうございます、併し此の牢内のことは詳しう申上げたうございます
 が、實はまだ這入ったことがございせんから申上げることが出来ません、併し彼
 處ばかりは知ッて居ても、詳しく申上げないのが花かと思ひます、俗に地獄といふ
 くらゐ、善い事をして行くべき所でございせん、随分同業者には、牢名主が疊を

何疊敷いて居る……隅の隠居が斯う、詰番は斯ういふものだとか、知ツたか振り
 に話をしますがこれは却って耻かしいことかと存じます、甚九郎は別に呼出しも何
 もございませぬ、十日の日を待つて居りました、ところが十日経ちましても頓と安
 否が知れない、十一、十二、十三と、約束の日から三日も後れまして、十四日目に
 甚九郎をお呼出し、北町奉行所に於て曲淵甲斐守殿白洲に出られました、白洲の模
 様は毎度申上げますから、大略をして申上げます、白洲には一杯小かい砂利が敷い
 てあります、突這の同心、御祐筆、吟味方始めとして、一同居列んで居ります、曲
 淵甲州眼下に甚九郎の容子を御覽に相成り、山京橋丸屋町家主茂吉店炊出し甚九郎
 甚へエ、其方義木崎無宿の仁助の代理として、十日間入牢をいたした、然るとこ
 ろ今日に於て十四日に相成ると雖も、仁助更に行方相知れん、察するに其方を瞞か
 り、上を偽り逃亡をなしたるものと心得る、頼まれたとてそれを承知した其方、覺
 悟いたして居るであらうな、甚へエ、さういふ者に頼まれたのが私の不運、今更ど

うかうお奉行様に申上げたところがお許もございませぬから、本人が戻りませんと
 いふお見込が附きましたら、今日にもお處刑仰付けられました苦しうございませぬ
 甲「フム、能く申した、然らば今日口書爪印をいたし、近日處刑申付けるゆる、左
 様心得ろ」と仰しやる、曲淵殿は名奉行でございませぬ、當人の代理に牢に這入ッて
 居るものを、仁助の行方の知れぬ中に、お處刑にする氣遣はない、けれども甚五郎
 の膽を試めさうと思召されて、口書爪印をさせ、近日死刑申付けると仰しやッたら
 當人顔の色でも變るかと思ツたが、當人少しも顔の色が變りませぬ、甚へエ、恐入り
 ましてございませぬ、どうか今晚にもお處刑に相成り苦しうございませぬ、既に家を
 出て参ります時に家内にも暇乞をして参りましたから、口書といふことを早速い
 たしたうございませぬ、甲「フン、どうも其方は強膽な奴ぢやな、口書爪印が濟めば、
 其の後に仁助がよしや自訴いたしても、其方の罪は逃れんが、どうだ、甚どうも仕
 方がございませぬ、仁助の安否の知れるまでお待ち下さいといふのも、あんまり男

らしくございませぬから、もう仁助のことは忘れて仕舞ひまして、私が永年悪事をしたものだ、斯う思つて、天命を知つてお處刑を願ひます 馬然らば別段苦情はないな 藤「イエ：私から願つて口書をいたしますからは、此のお白洲で苦情なぞは申上げませぬ 馬「ソレ」と御下知がありますから、御祐筆早速に口書の用意、甚五郎はもう爪印をするばかりになりました、ところへ 訴へでございませぬ、木崎無宿の仁助、唯今立歸りましてございませぬ」と、曲洲甲斐守殿へお届け、好いところに間に合ひました、こりやア仁助が、何にも命を惜み、それがために十日と約束をしたのを十四日まで逃げ隠れをして居たわけではございませぬ、悪事を爲した者を賞めるといふのは、奇怪な講談でございませぬが、仁助も改心をして見ると真個の人間の義心に感じて、すつかり旅装束まで貰つて、それを着けて江戸表を出立をして、武州の一の宮氷川神社の社に参り、御神木の大きな杉があります、その根方に四年以前に埋けて置いた金が百兩、誰れも知るものがあるから、そつ

くりして居たのを掘り返して、これを懐中をして木崎の在龍神社に参ります、晝間は歩けません、夜道を行くのでございませぬから、どうしても後れまして、四日目のこととございませぬ、燈火が黠いて間もなく、自分の生まれた所でも久しく歸りませぬから、道を忘れるくらゐなもの、母親はどうしたか知らぬ、さうでもねえ己が悪事をして居る間病死でもしたか、兄弟はなし、外に子供といふものはなし、嘘ぞ心細からうと思ふと、何んとなく胸一杯になりました、我家の門に來まして、内を窺くと眞暗な行燈が一つ、燈火も茫乎して居ります、その脇に床が敷いてあります 仁「はてお母親が知らぬ、彼處に居るのは：エ、御免下さいませぬ 老「ハイお入來なさいませぬ 仁「少し物をお尋ね申しますが、當村の仁左衛門さんの後家さんのお宅は當家でございませぬか 老「ハイ、仁左衛門の後家は手前でございませぬが、去年から身體が悪うございませぬ、臥たきりで居ります御用ならどうぞ此方に這入つて下さいませぬ 起さることも出來ませぬ様子 仁「へエ」四邊を見たが、誰れも附いて來

る者もございませぬ、仁助は着て居る雨合羽を脱ぎ棄て、笠を片側に投げ棄てまして、其の儘這入って母親の傍にピッタリと坐り、兩手を突き、頭を下げて居ります。母親は驚いた。『オヤお前さんかね、今お尋ねになつたのは……いつの間に其處へ來なすつた。仁阿母さん、誠にお久振でございませぬ、申譯もございませぬ、私は仁助でございませぬよ。』『エ、……お前は……作か、あれまアどうして仁助歸つて來た。』
 大方お處刑にでもなつたらうが、何處の何んといふ所でお處刑になつたか知らん、回向の一度もしてやらう、お念佛の一度も唱へてやらうと思つて居たが、丸きり行方はずれ、迎も生きて居るものでない、小さい時分からあの通り手癖は悪し、博奕は好なり、どうせ終始はお上様の御厄介、及の錆になるんだらうと思つて居たに、どうしてまア此家へ歸つて來た。仁何にからお詫をいたしませうか、私も國を出まして、永年日本六十餘州を飛歩きまして、金が無くなりやア人の物は自分の物と思つて、悪いことをいたしまして、積る悪事はなかく山より高く思ひます、到頭

天の網を逃れませぬ、去年江戸でお召捕になりました、暫く御牢内に這入つて居りました、ところが迎も今度は助かりませぬ、他のお奉行と違つて、今評判の曲淵甲斐守様といふ名奉行、私の悪事を見抜いてのお調べ、もう御年貢の納め時と、死罪獄門にならうと覺悟をしましたが、それに付いて貴母のことを思ひ出して、一度お目に掛けて、これまでの不幸のお詫をした上で、潔くお處刑にならうと存じまして、人目を忍んでやうくこれまで参りました。母、どうして此方へ歸つて來なすつた、一旦お召捕になつたものが……仁それやア話せば長いことござりますが江戸の京橋九段町で炊出しをして居ります甚九郎といふ俠客がございませぬ、その人に頼んで、私が道中に出たあとで、十分に追手が掛りましては、貴母にお目に掛ることが出来ませぬ、そこで私が歸るまで、代りに牢に這入つて居て呉れと頼みましたので、親方の氣性でございませぬから大方願つて出たに相違ございませぬ、それゆへ別段に捕方も向ひませぬ、貴方にお目に掛けて少しばかりでもお小遣ひを

差上げ、それから私は再び江戸へ歸つて、親方に禮を致しどうせ此の首は三尺高い木の上にあがります、不幸の伴を持つたと思召して下さいまし、取別け御病氣でおいでなすつては、嘸ぞ心細うございませう、金さへありやアどうでもなります、阿母さんえ、こゝに百兩金を持つて來ました、此の金で村の人達に頼んで、傍へ兩人も人を附、醫者と藥で介抱をしたら、癒らんことはございませう、私共も亦彼世から屹度御全快を祈りますから、お受取り下さいまし』と百兩の金をそれへ出すと、起直りました母親が、穴の明くほど仁助の顔を見て居たが、母仁助や、ぢやアお前改心をしてこれから願つて出て、お處刑になる氣かえ、仁へエ、もう世の中に申譯けなく、重ねくの悪事をいたし所詮免れぬ不孝の身の上、天道様は見通しでございませう、左様なら阿母さん御機嫌宜しく、母「まあ、待ちな、段々聞いた物語、何にも言はず此の金は私を受ける、受けるが、改ためてお前にやる、その甚九郎とかいふ親分に、切めては私の志、しだから此の金を江戸に戻んなすつたら禮に上げて

下さい、所詮悪い事をして生涯安樂に暮せるものではない、佛様の教へがある私はちつとも早く阿彌陀様のお傍へ行きたいと思ふところへ、なんの錢金がいりはませう、どうかお前これを持つて歸つて甚九郎さんとやらへ……、仁「イエ、甚九郎といふ人は、錢金で喜ぶやうな人ではございませぬ、本當の義侠心、頼んで参りました上は、金などを持つて歸りますと甚九郎さんに怒られますからどうか阿母さん、この金で跡々の事をして下さいまし、母「仁助や、お前の顔を見たんで、急に斯う氣が緩んだか、どうぞ水を一杯持つて來てお呉れ、仁「宜しうございませう、水を今汲んで來ます、母「イエ、臺所にあるからそれで宜い、仁「阿母さん、なんでげすかい、誰れか手傳にでも來る人はございませぬか、母「晝間の中は向ふのお竹さんが色々世話をして呉れます、仁「へエ、あの武兵衛さんのお内儀さんですか、母「武兵衛さんは死んで仕舞たが、あのお竹さんが色々親切にして呉れる、仁「それはまあ、結構でございませぬ、私が居りませぬでも、外に世話をする人が出來るのは、矢張貴母の幸福

でございます。サアお上がんなさいまし』と差出す水 仁「貴母は大層手が戦へますね 母「これは私の持前だ』一口飲んで 母「仁助、この餘った水をお前がお飲み、これが親子の水杯、モウ別れだと思つて飲んで下さい 仁「へエ、左様でございますかちやア阿母さん戴きます』強悪な仁助も、人の性は善なりとやらで、其の場に参りますると兩の眼に涙一杯、母親は亦仁助の顔を見まして 母「五倫五體を具へたる立派な件でありながら、どうしてさういふ心になつたか、お上様の御厄介になるやうな悪漢者、死んだ連合が見られたなら、嗚かし嘆かれることであらう』と流石女の愚痴に返つてワツと泣く

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道にまよひぬるかな

子をおもふ親の心は四ツ手駕籠

しばしやすむる息づるもなし

よく寝れば寝るととのぞく枕櫃
あんまり子供が能く寝ると、息でもなくなりませんかと臥床の中を窺くをいふ、親子の情は又別でございます。

去られても宵は見に来る幟竿

といふ狂句がございます、これは夫婦の情でございます、自分が離別をされても、彼の子の初幟はどうしたか知らん、幟を立て呉れたかと、其門に来て見て、幟竿の立ッて居るのを見ると、安心をするのが親子の情、五情と申しまして親子、主従、夫婦、兄弟、親友などの情といふものは深い者でございます、その五情の外にまた深いのが祖父祖母と孫の情でございます、藍は藍より出で、藍よりも青く、氷は氷より出で、水よりも冷かなりと申しまして、孫はわが子の生みましたものでございますが、現在己れの子供よりも其孫との情は深いと申します、これ祖父祖母と孫の情、この五情六情を漏れて深いのが、かの戀の情ださうで、色戀の情は大層深

いさうでございませす。一朝迫るとそれがために兩人共に情死をする、死ぬくらの眞實なことはございません、けれども戀の情といふものはどういふ鹽梅に申し上げて宜いか、實今日五十餘歳に相成りまするが、いまだに戀の情の濃かなる處に出會つたことがない、歸らうといふ處を留めるのが戀の情でございませすか 女「ようもう一日お居でな、妾がどうでもするからさア」なんて、娼妓が襟着を遺棄つたり何にかして、男を留めて遊ばしたり何にかするのが戀の情でございませすか……これが女房がやりますと 女房「お前何處に行くの、仕事になんぞ往かなくつても宜いやアね、絆纏と羽織があるから、あれをころして一緒に飲まうよ」そんな戀の情でございませすは、身代限をするやうになります、餘事に亘つて恐入ります、流石惡黨の仁助も、跡に老母を残して行くかと思へば心後れ、母も亦一人の伴ではあるし、これから江戸へ行つてお處刑になるといふ事に極まつて見れば、胸は張裂くばかりでございませす、仁助は後ろに廻つて介抱をいたしました、その中に張詰めた氣の抜けま

したものでございませすか 母「ウーン」と母親は其の儘氣を失ひました、吃驚り驚いた仁助が 仁「阿母さん確乎して……そんなことぢやいけません、確乎なさい」介抱はいたしたが、藥は何處にあるやら我家ながら分りません、あんまり大きな聲をすゝるものでございませすから、向ふのお竹婆さんが来て呉れました、見ると驚いたのは、家出をして長らく歸つて参りません仁助の顔を見たばかりで、名主の八右衛門のところに飛んで参りまして 母「旦那様、大變でございませすよ、向ふだなの婆さんが今オツ死にました、其所に泥坊が來ましたよ 八「泥坊が……何んだい泥坊といふのは……竹「何んだところじやございません、あの大泥坊の仁助が戻つて参りました、八「そりやア大變だ、仁助が戻つて來る氣遣はねえが、人違ひだらう、お尋ね者の仁助なら大變だが……」と飛んで参つて様子を見ると、手を突いて仁助が 仁「決して惡事をいたすのではございません、實は斯ういふわけでございませす」と百兩の金をそれへ出して委細の話、名主の八右衛門といふ人はなかく分つた人でござ

います、もう老母の方は助からんといふ豫て醫者の見込が立って居ります、して見れア仁助が何にも殺したわけではない、此の上は吊ひ葬ひをしてそれを見て江戸に歸るが宜いといふことになりました、今と違つて昔のこと、それに田舎屋のことでございますから、何事も質素でございます、菩提所の念佛寺の和尚立量といふ人も老母とは少々親戚筋でございますから、これもそれへ立出まして、遂に老母の死骸萬端を扱ひ、念佛寺に葬むることに相成ります、百兩の金は立量に預けて 仁とどうぞこれで後々のことを宜しく願ひ申します、小さくも石塔の一本も立って下さるやう』併し昔のことでございますから、百兩といふ金は遣ひ場がない、石塔料として二十五兩、二十五兩は念佛寺に納めて、永代のこれが回向料、五十兩の金は米にいたし、龍神村一村の人に施與を出しまして、母親の初七日まで寺に止まつて居りまして、回向供養をしたものでございますから、そこで十日の日が十四日まで掛つたやうな勘定、心残りのないやうにして仁助は木崎の在龍神村を出で江戸表に參る

途中別段の御話もなく、取急ぎ通し駕籠でございまして江戸に來て、北町奉行所に願つて出る。丁度其の日に甚九郎の口書といふことでございます、假牢の口が開くと、差して居りました道中差、懐中物を其所に投出し、そこでお白洲に遣入つて來た 仁、エ、遅くなりまして相済みません、唯今歸りました』遅くなつたもねえもんだ：：甚九郎ジロリと見て 甚、仁助か 仁、イヤどうも丸屋町の親分、飛んだ延引をして済みません、コ、十日の日を貰つて行つたのが、家に歸つて見ると母親の臨終際、云々、斯ういふ譯で』と委細の話をすると、甚九郎もそれを聞いて 甚さうか、實は今日口書爪印で、乃公がお處刑になるところだつた 仁、誠に何うも相済みませぬ、實は途中でもう一つ用を達して歸らうと思ひましたが、遅れて居るに少も早くしねちや成らぬえと思つて來ました：：お係りツ奉行様に申し上げます、この通りの次第でございませぬ、どうか丸屋町の親分は唯今から放免を願ひたうございませぬ、私は何時でも口書をいたし、爪印が濟んだ上は、お處刑になります覺悟でこ

「さいます」甲斐守殿この様子を御覽なされ 甲斐ながら仁助能く歸つた、この先き行衛知れずと相成れば、天下の御威勢を以て取押へやうと心得た、母の佛事を營んで歸つたといふ、賊ながら賞め遣はず、甚九郎の細を解き、其の細を仁助に掛ける』手先が直ぐに甚九郎の細を解き仁助に細を打つ、甚九郎が 甚仁助、何んで斯んなに遅くなつた 仁「ハイ、一生の思い出に小哥が話を聞いて頂きます、悪いことをされた者は何れ程迄怒つてるか知れませんが、豫て盗んだ金が埋けてあつたのを、母親の薬の代にもと存しまして、持つて歸つて始終の話、大層母親も喜びましたが、この百兩の金を親分の所に土産に持つて行つて呉れと申しました、そんなことをすると親分がお怒んなさるからと話を致しまして、それを石塔料と村中の施行に出しました」と細附になつて居ながら委細の話、甚九郎それを聞いて 甚よし仁助、手前がお處刑になつて、三日の晒しは當然、四日目にやア屹度乃公が首を引取つて、上に願つて乃公の菩提所、山谷の寺に葬むつてやるから 仁「難有うございます、それま

で目を懸けて戴きましてハ、小哥はモツ、世の中に心残りはありません、誠に親分お禮は口ぢやア申しませんが、親分のお蔭で親子の對面、母親の臨終際に行つて、死水を取つて來ました、仁助は此の上の喜びはございません、これから親分お身體を大切に、どうぞ長く生きて下さいまし 甚「オ、能く言つて呉れた、これも何にかの縁で、和郎がお處刑になるかと思ふと、乃公も何んだか心持が悪いが、後とのことは心配するな」兩人は白洲に於て別れました、サア 愈當日に丸屋町の甚九郎が放免になるといふので、白洲に迎ひに參りましたる者には大勢でございます、其頃ひ江戸で有名の顔役といふ顔役は、皆な乾分を廿人も卅人を引連れ、同じ稼業をして居ります炊出し連中はかりではございません、消防の人までも甚九郎の迎ひに出ました、それこそ數千人の人山奉行所を出まして、一旦この本町三丁目の通りに出て來ると、往來の人は足を留め ○「話に聞いた丸屋町の甚九郎親分が今日出牢だ、どうだい此の迎ひの人は、好い男になつたなア、顔役もあのくらひになれア宜いな

あ、立派な俠客だ』と云つて、群集の中に見て居りました、其の時丁度本町二丁目人參五臟圓といふ、彼の元祖す屋清兵衛といふ名前でございます、其後本町通りの方に看板を掲げました、その看板といふのが、人參五臟圓、上のところに免許としてあります、傍にす屋清兵衛謹製、金銀の短冊が三十六枚附いて、紫の紐が形容に附いて居ります、先づ看板ではこの頃の第一といはれまするぐらゐ、其の五臟圓の看板を今掲げやうといふので、消防人足大勢で木遣で附き上げる途端に、甚九郎が通つた、その時に往來の人が 甲』どうだい、大層な金看板ぢやアねえか 乙』さうだなア、彼所に來たのが丸屋町の甚九郎親分だぜ 丙』宜い金看板だなア、エ、紫紐實にどうも、美事ぢやアねえか 丁』金看板に甚九郎親分、どうだい金看板、甚九郎親分、看板と甚九郎と同じやうに賞めた、甚九郎も其の時に見上げますと、今江戸一といはれるぐらゐな金看板が上がりました、其の時附いて來た者一同が 〇』成るほど斯りやア好い練名だ、金看板伽羅の兄哥、あれが紫紐の甚九郎』と仇口に

申したのが、終ひには名前やうに人が呼び、これを金看板甚九郎と申しました、ところが半月ほど経ちまして、仁助は千住小塚原に於て死罪獄門、約束の通り三日の晒が濟みまして、甚九郎は仁助の首を貰つて山谷の菩提所に葬むつた、これで尙ほ一層人が甚九郎の義心に悉く感じました、甚九郎といふ人は其の後屋敷稼業を手廣にいたしましたして、年六十四にして、一旦信州の在所へ引取りまして、在所に於て病死いたしましたとのことでございます、これまで申上げました甚九郎の傳記、これで結局といたします。

奴 お 初

金城齋貞玉口演

第一席

「本所に過ぎたるもの三つあり津輕大名鬼勘解由女奴の姿なりけり」とまでいはれ
ましたる本所原庭の俠客達磨庄兵衛の養女、奴お初と綽號を取った女俠客の傳記を
申し上げます。

さて江戶の兩國橋といふは、武藏下總に跨り居りましたゆゑ斯く命けましたもの
であります、先づ江戶市中で繁華な所といへば、日本橋についで此兩國でござ
います、頃は寛政二年五月廿八日河開らきといふのでございまして、花火を打上げ
まする當日、方今では七月か八月に河開らきをいたしますが、昔は五月廿八日に限
つたもの、近頃は餘り花火が珍らしくはないといふのは、或は宴會だとか祭典だと

俠 客 傳

かいふと、彼方此方で打上げまして、寒中になつても上げることもあるから、自然
と人の目について了つて、左程珍らしいとは思はない、所が昔は五月廿八日に河開
きと極つて居つたもので、江戸名物の一つになつてゐます、彼の寶井其角の句に
壹兩の花火わづかの光かな

といふがあります、是を何時か人が間違へて、

千金の花火わづかの眺めかな

餘り金高を殖やして肝腎の名句を傷くした心得違ひの人があります、それはどうで
も宜しいが、此日は兩國の兩岸の料理茶屋、又は河岸通りの並茶屋などでは、前か
らそれ〴〵準備をして、河へ小屋掛などをいたし、美しい姐さん達がお客を呼込ん
で居ります、其日一日で此近所へ金の落ることは大したもので、されば露店などで、
白玉、果物、寒天などを並て商ひ居るものは數知れぬ程であります、又兩國橋は、
今でこそ人道車道が別つてありますが、其頃は今とは違つて橋幅も狭ふございます、

奴 お 初

それに橋の袂に番小屋があつて老爺さんが一人番をいたして居つたもの、併し年寄の番人だから、何の役にも立ちません、さて花火の當日になると、晝間のうちから人が橋の上へ立って居て、晩に此等邊で見物うといふ了簡で、炎天に曝されながら、日の暮れるのを待つて居る、日の暮れる途端打上げる花火、見物は一齊に玉屋ア鍵屋アと唱へます、此玉屋といふは仲々大きなものでございまして、鍵屋より上であつた、それですから今でも花火を見ますと、玉屋アと申します、所が以前公方様がお成りの當日とかに、疎忽をいたして自火を出しました、それがために火薬を取扱ふ家だに依つて、欠所になつて了つた、夫故唯今では鍵屋が遣つて、此鍵屋が一手で製造することゝなりましたから、仲々盛んなもの、上る流星、星下り、又は虎の尾、柳に蹴鞠などと、種々のものを仕掛けます、『吹けや川風揚れや廉なかのお客の顔見たさ』なんといふ小唄があります通り、當日は屋方、屋根船、傳馬に荷足など追々橋の左右へ集つてまゐりまして、河中も陸上も船と人とで埋まるばかり、其群

集は一ト通りではありません、兩國の花火をもつて江戸名物の一つに數へまするも又無理ならぬ次第であります、今や花火も盛んに打上げ、見物も出盛りといふ頃、兩國廣小路の方に當つて『喧嘩だ』といふと、ワーツと群集が動搖渡る『ソラ抜くぞく、怪我すると不可ねえ、危険えく』口々に罵しりながら、彼方此方へと迷惑ふ有様、喧嘩は江戸の名物、嫌なものが名物です、何ういふ喧嘩であらうと遅くまゐつたものが後方から仲長つて見ると、喧嘩は武士同士であります、孰方も浪人者であります、一方は年齢五十八九にならうといふ老人、衣類とても汚なく、袴も破れて居ります、餘程酩酊して居るものと見えて、顔は猩々のやうに眞赤だ、又相手はといふとまだ漸々二十三四かと思はれる青年、是も酩酊いたして居ると見え、眞赤になつて居る、同じく見苦しき衣類、大小の鞆は禿げ、薙刀のやうな草履を履いてゐます、年若の武士『コレ御老人、無禮だ、大道廣い此往來、拙者は酩酊いたして居るに依つてよろけた、お手前もよろけた、お互ひによろけて鞆が鞆に當

ツたのだ、執方に罪があるといふ譯ではない、それに無禮の一言は何だ老年の武士、黙れ、小僧、拙者はな、いくら酔ふても往來をよろけて歩くやうなものでない、不届な奴だ、さア抜け、早く抜刀て見ろ 若「イヤ御身からお抜きなさい 老「其方から抜け 若「我から抜け」と、刀の柄に手をかけて、チリ／＼と詰寄る其様子、見物一同は「さア愈々喧嘩が眞實になつた、こりやア花火より餘程面白い」物見高い所だから堪らない、人々面白がつて見て居る 老「汝から抜け 若「お手前から抜け」暫くの間詰め寄つて居たが、どうしても抜かない、少々見物は退屈し始めまして 甲「オイ八公、抜かねえよ 乙「そうよな、容易に抜かねえな、ア、臭え、誰か屁こいた奴があるな、オ、臭え 甲「ヤイ／＼人を馬鹿にするな、此中で屁なんかしやがつて……」などと騒いで居る、其内に兩人の武士はチリ／＼と詰寄つて来て、どうしても抜かないわけに往かなくなつた、一足後へ退りながら、互にやつと抜くと、バタリ、ゴツと音のした、此バタリ、ゴツの音のしたのは何だといふと、老を寄つた

方は先きのない鉈を抜きました、若い方の抜いたのは竹刀でございます、此鉈と竹刀を合せたから、バタリゴツと音がした、さア見物は 甲「やア妙なものを抜きやアがったぢやアねえか、人を馬鹿にして居やがる、先刻から抜かねえ／＼と思たが、抜かねえ筈だ、竹光に鉈だもの、ゴツリボタンが面白いや」と冷笑して居る、其内に老寄の方から口を開いて 老「ヤ、お若いの、誠に面目ない、お身も竹刀を抜いたな若「イヤ面目次第もござらん 老「夫故、先刻から抜かずに居つたのだが、實は拙者はモウお手前の刀の露と消る覺悟で居つた 若「御老人、手前も劍術指南をいたすものので、未熟ながら一刀流の免許皆傳を受けたものでござるが、酒が好きで親に勘當をされ、已むを得ず國を飛出し、江戸へまゐつては居るものゝ、懷中に蓄のな所から、好きな酒さへ飲むことが出來ず、三日前までは、敢て名劍といふではござらんが帯して居つた、併しどうしても酒が飲みたくてならぬゆゑ、刀身を賣つて酒に換へ、之れを飲んでしまひ、武士の看板だによつて大小を帯さんわけに往かん。

已むを得ず竹を削ッて鞘を止め、斯の如きものを帶して居る。夫故拙者とても抜かずに居ッて、萬一貴殿が抜いたら、已むを得んから刀のさびと相成るつもりで居りました。誠に面目次第もござらん。考「左様でござったか、イヤお身こそお若いによッて無理もない、拙者とても同様、これでも一時は劍術の道場も出したものであるが、矢張酒が好きで、門人等も呆れかへり、一人二人と減り、今では唯彼方此方ぶらついて居るが、矢張刀身を賣ッて酒にかへてしまつた、面目次第もない、拙者當年最早五十九歳、定命より九年も生延びた老爺の癖に、どうしても酒はやめられず、先月店頭、備前物の一刀を賣ッてしまつたが、お手前のいふ通り、武士の看板で、刀を帶さんわけにも往かんから、古道具屋の店へ並べてあつた鉈を買つて此通り間に合せて居ッた、併し今お身の體の構方は實に感心いたしました、確に一刀流皆傳の腕前と見ました、お手前は年が若いからまだ宜いが、私は年寄の身で、誠に面目ない、見物に對しても恥かしいことであるから、モウ立合で是で止めやう」と酒の酔もス

ツカリ醒め果て、喧嘩は和解になりました、此時彼老人は見物に向ひまして「老」エエ夥多の御見物の内に武士も居られやうが、我々兩人をどうか存分お笑ひ下さい、酒が好きで斯くの如く浪人となり、尾羽打枯した此姿、武士の大切な刀の中身を賣ッてしまひ、恥をかいたのも皆心柄から起ること、手前共の如きもの、品行を見ても、酒はどうぞお慎み下さい御見物衆、精神の腐つたものと思召せ、誠に面目ない、どうぞお笑ひ下さい」と我身の罪を後悔して、見物に懺悔をして居る、所が世の中といふものは、盲目千人目あき千人といふが、仲々目あきは千人どころか、百人もな

酒のためにあのやうなことになる、心からの愚人でもないと思へる、ア、やつて懺悔をすれば、罪もなにもないといッて居る、心ない人は、何だ人を馬鹿にしやアがる、酒に酔ッて刀を賣つたものないものだ、笑はせやがる、竹と鉈の打合ははじめて見た、と冷笑ふものもある、兩人の武士は喧嘩も和解したから、右と左へ立別

れやうとする途端、見物の人を左右へかき分けて、其處へ出て来た大の男があるから、何者だらうと見ると、朱鞘の大小打込んで、黒木綿紋つきの羽織、小倉の袴をうがち、身丈五尺七八寸もあらうといふ大の武士、大手を揮って、武見物、退け退け、アイヤお兩人お待ち下さい」と聲を掛けた、見物はどうなるだらうと脚かけたものも再びあとへ立戻るといふ有様、此時彼の武士はハツタと兩人を睨み、武兩人待て……今聴けば何だ、酒の上にて身をもちくづし、許してくれ、面目ないと見物に詫て居るが、まッ何といふ意氣地のないコツた、手前如きへコタレ武士が居るか、兎角町人のために、武士があだけられるのだ、如何に酒が飲みたいとはいひながら、武士の魂まで賣つて了ふとは何事だ、心得違ひの汝等、決して此儘に許すこと相成らん、手前はな、下谷車坂に道場を開いて居る、大山東馬と申すものぢや、向後刀を帶すなら斯ういふ刀を帶せ」と、突如腰をひねって引抜いたのは、ドキッとするやうな業物、之れをば兩人の目先きへ突付けて、大「イヤ馬鹿者、斯様な業物を

させばこそ眞の武士といはれるのぢや、酒を飲みたさに、竹光や鉈など帶して居るやうな似非武士とは一つにならんぞ」と、さも自分が名劔を持つて居るといはないばかりに、大勢に見せびらかし、刀の平で二人の頬をペタリ〜と叩いて居る、何といはれても致方がないから、さも面目なげに、大地へ兩手を突き、眼を閉ぢて老人の方が、考何と仰せられても身共等兩人が悪いから致方がない、どうぞ幾重にもお見免しを願ひたい。大山東馬はいよ〜圖にのつて、大「ハ、不可思議〜、武士が大地へ兩手をついて居るわ、見物、笑つてやれ、笑つてやれ、此様者は誠の武士ぢやアない、コレ何處の何といふ奴だ、何といふものだ、姓名をいはんか、コレ姓名を申さんか」と、突如青痰をふくんで、二人の横面へハツとばかりにかけた、心なき連中は之れを見て、甲「豪いもんだ、彼人は車坂に居る劔術の先生で、大山東馬といふ人だとよ、彼等が眞個の武士とでもいふのだらう」と却つて東馬を譽めて居る、大「さア早く姓名を申さんか、姓名を申さんと決して釋さんぞ、老」どうか

姓名だけはお釋しを願ひたい 若何分共に大目に御覽を願ひたい 大ナニ、どうあ
ツても姓名を申さんか、然らば斯様いたしてくれるぞ」と、突如穿いて居った雪駄
にて、老寄の方の眉間を望んで打々と滅多打にいたした、除りのことに彼の老人、
クワツとばかりに堰込んで、飛掛らんといたしたが、又氣を取直し、自分が悪いの
だから仕方がないと思つたか、再び大地へ兩手をついて居る、此時大山は又も若き
方に打向ひ 大「ヤイ、汝もまだ姓名を明さんな、以後の見せしめに斯様いたしてや
る」と、同じく雪駄にて眉間を望んで滅多打、此度は力を籠めて打つたと見えて、
ガラ／＼と血が流れた、大山東馬之を見てニッコと笑み 大「コレで宜い／＼、ハ
ハ、除程命が惜しいものと見へるテ、斯様にまで恥辱を受けながら、一向に手出し
のならぬといふは、腰抜の骨頂だ、ハ、ハ、笑つてやれ／＼」と、腹存分嘲弄して、
其儘大手を振つて立去つた、後で兩人口惜涙をぬぐひ、立上がつて砂塵を落して居
る所へ、見物を掻分けて入つて来たのは年頃十三か十四にもならふといふ女兒、玉

のやうな右手に大刀を携へ居ましたが 女「さア叔父さん、此刀で彼の武士を斬つて
お終いなさい」見ず知らずの女兒が、刀を持つて来てくれたのだから、變に思つて
老「其お刀を下さるのか 女「ア、貸してあげるから、早く斬つておしまい 老「それで
は今の大山東馬とやらの仕打が如何にも傍若無人でござるから、其刀で斬つてしま
へと仰せらるゝのか 女「さうともさうとも、傍で見ても餘り腹が立つから、今
お父さんの刀を借りて来たのだ、早く彼の武士を斬つておしまひ 老「コハ辱けない、
然らばお言葉にあまへて拜借いたして、大山と先づ拙者が一騎打仕まつるから、若
拙者が殺られたら、貴所が代つて打取つて下さい 若「承知仕つた、二番手は小生
が控へて居るから、充分に殺つて下さい 女「そんなこといつて居るうちに彼武士が
往つてしまふよ、早く追掛けないと… 老「御尤／＼、然らば此お刀、暫時拜借仕
つる」と、ズラリ引抜いたまゝ、大山東馬の後を追掛けた。此老人の武士の本名は長
州萩の浪人にて溝口源右衛門といひ、若い方は會津の浪人にして上田金彌といふ男

であります、さて又爰に兩國の橋際に、一枚の莫座を敷いて其れに座り、編笠を被りまして傍には大小を置き、破れたる衣類、手に破扇をもち、頻りに謠をうたうて往來の人の情を受けて居る浪人がございます、如何なるわけか眼が盲いて、兩眼とも物の色が分りません、此人の素性は、常州茨城郡水戸の御城主、御三家の一人、水戸中納言の御家來であつたのが、仔細あつて浪人いたし、今は衰しいかな兩眼潰れ、先づ乞食といつても宜しい姿となつて、今宵は花火の當日で、遅くまで此處に居るわけに往かないから、日の暮れぬうちに歸らうと思ふ所へ、馳來つた娘のお初が「初父上様、お刀を拜借……」兩眼見えんから「父コレ」何をする何をする「喧嘩の助太刀をします 父ナニ、馬鹿を申すな、子供の身で喧嘩の助太刀など出来るものか、危険から止せ」といふを 聴かず、傍にあつた父の大劍を持つたなり馳出したのが、前に申上げた喧嘩場で溝口源右衛門に刀を貸した娘でございませ、此方は大山東馬、兩人の武士へ思ふさま悪口雜言して彼方に半町程も來た時分、

後から追掛けた溝口源右衛門「金アイヤ暫くお待ち下さい 東ナニ、拙者を呼ぶとは……」ムム先刻の浪人、何か用事でもあるのか 源如何にも用事がある、能くも先刻は悪口したな、東悪口いたしましたのがどうした 源先刻姓名をば名乗らなかつたら、改ためて聴かさう、拙者は長州萩の浪人、溝口源右衛門と申すもの、今一人は會津浪人上田金彌と申すものぢや、凡そ武士の法は、強きを挫き弱きを助くるものであるに、お手前は拙者等兩人が、過を悔ひ、懺悔をいたし居るに拘はらず、斯くまで傍若無人の舉動をいたすとは何事だ 東黙れ、手前如き犬猫同様な奴は、後來のために辛き目に遇はせて遣はしたのだ、唐變木め 源己れ、一流一派の師範をいたすとか申しながら、武士相當の言葉遣ひも知らんと見えるな、さア相手をいたして遣はすから、尋常に勝負いたせ 東言はして置けば勝手の手をほざき居る、立派な刀を帶してこそ相手をいたす甲斐もあるが、竹刀や鉈では相手はならん 源「噫言を申すな、何で竹刀や鉈などを帶すものか、美事な名劍だ」とすでに抜放つたのを

見て、東馬は一足後へ退り、東「やア己、何處よりか盗すんで參つたな、刀盜賊とは手前のことだ、ヨシ相手になつて遣はさう」と、是もズラリ抜放なつた、此時見物を推分けて入つて來たのは彼の若き方の浪人、上田金彌と名乗る人と娘のお初でございませす、金「唯今溝口氏の述はるゝ通り、拙者は上田金彌と申すもの、能くも往來中で嘲弄いたしたな、東「黙れ小童、嘲弄いたす筋があるから嘲弄したのだ、武士の風上にも置けぬ奴だから後來の戒めに懲してやつたのだ、初「さア叔父さん、早く立派に立合なさい、アノ叔父さん、此刀はね、妾が確に貸してあげたんだから、此人が何といつたつて構やアしない、第一盗んで來んだらうなんて無禮なやつだ、東「何と、そんならお手前が此者に刀を貸したといふのか、初「左様さ、餘りお前の顔が憎いから、妾が刀を貸してやつたんさ、東「女の身としてどうして刀を……初「さう馬鹿にしたものではない、これでも浪人者の娘だ、お父さんの刀を持つて來て貸してやつたんだよ、東「さては小娘の分際として、餘計な手出をしをツたな、小供とて容

赦はせん、此兩人の息の音止めてから、其方も黄泉へやつてやるから、其處動くな、初「へん、大きなことをいひなさんな、叔父さん、何をグズグズして居るんだい、抜身を持つて茫然立つて居ちやアみツともない、早く立合はいのかい」と小娘に似氣なき大言に勵げまされ、溝口源右衛門「源「さア尋常に參れ」とお初から貸りたところの大剣をば、青眼につけた、東「何を小癩な……」と東馬は上段に振被ぶり、互に呼吸をはかつて居る、黒山のやうな見物はワイ／＼囃すやら罵るやら、お初の豪勇を譽るやら、大騒ぎをやつて居る、さて此眞劍の立合となると、仲々容易なものでない、能同業者が寄席などで演じますのは、チャキン／＼と二三合打合た、其早業は電光石火の如く、上段下段、虚々實々、雲てかく繩十文字、寄せては返し返しては又打寄する波に似たりなど申しまするが、是は言葉の文です、仲々さう飛んだり跳たりするものではない、双方聲をかけ見合つて居りますうちに、何れにか隙のあつたりけん、大山東馬、エイと叫けんで斬下す一刀、ヒラリ體を換して溝

口が、やツと叫びるま横さまに拂った一刀受損じ、シタ、カニ横腹に切込まれた、アツといッてヨロ／＼ツとよろける途端に、後に居った上田金彌が、足をあげて弱腰をボンと蹴ったから堪らない、ドサリ反向けに倒れた、見物は手を打ッて美事美事と譽めそやす、お初が『早く止めをおさしよ／＼』と注意をする、道理なりと溝口は直に止めをさした、其内に町役人も出張した、當節なら交番所もあり警察もあるから、直ぐに巡査も出張するが、其昔は仲々さうはいかない、漸く喧嘩の濟んだ時分に町役人が来た、兎に角一應兩人の武士を自身番へ連れて往かうとする、お初は『叔父さん、モウ用が濟んだら其刀を返しておくれ』『これは御娘子、種種難有う存じた』と血をぬぐつて鞘に納めお初に渡し改ためて『返さてお娘兒、何れのお方かは存せんが、男勝りの其御氣象、又大切なお刀をば、能うお貸し下された、何れ後刻お禮に罷出でまするから、御本名をお明かし下さい』お初は『伊エ妾は禮を云つて貰ふと思ッて貸したんぢやアないよ、用が濟んだら返してさへくれ』ば、そ

れで宜いんだ』と、刀を受取ッたまゝ、スタ／＼往ッて了ふから、源右衛門に金彌の兩人、モシ／＼後追駆けやうとして居るうちに、モウ見物の間へ潜ッて了ッて、影が見えなくなッて了ッた、ソコで兩人は一應自分番へ引かれたが、全く大山東馬が餘りに無禮であッたから斬捨てたといふことが分ッて、別段お咎めもなく、釋された、大山東馬は斬られ損となり、死骸は車坂の道場に居った弟子に引渡された、此方はお初の父吉田市郎右衛門は、モお初は何處へ刀を持って行き居ッたか知らんが、仲々まだ歸りさうもない、自分は眼が見へないし、それに今日は兩國の花火と来て、橋の近所は往來が烈げしく、長く居ることが出来ないから、困りぬいて居る所へお初が戻ッて来た、お初は『お父さんお父さん』と叫び、其方は誠に困るではないか、刀は如何に持ッて来た、お初は『貸してやッた浪人が、首尾克く敵を切殺して、返して寄越したから持ッて来た』市飛んでもない奴だ、女の癖に刀など持ッ出して、何れ後で宅へ歸ッてから仔細に聴くとして、モウそろ／＼立歸らう』と、莫座を疊んで娘

に手を引かれ、浪宅へと立歸つて了つた。然るに先刻喧嘩の眞最中に大勢の見物に交つて見て居つたのが、本所原庭に住む俠客の達磨庄兵衛といふ人、此は仲々の大親分で其頃には本所に旗本が澤山あつたもので、其お旗本や御家人へ周旋宿といふ稼業があつたもの、此周旋宿元締を庄兵衛はして居るから、大した勢力、又義俠心に富んで居る所から、貧窮者に金を恵んでやつたり、仲間の交際を好くするから、家に一文の蓄へといふものがない、千でも二千でも融通はいくらもつくが、家に一銭たりとも蓄へのない、所謂宵越しの銭は持たんといふ氣象で、何時もおあしがないといふ所から、人綽號して達磨庄兵衛といひます、今日乾兒の久四郎を連れて、柳原の仲間の家へ来て、少許りカスリを取つて歸る途中、此喧嘩を見てお初の舉動に感心をいたしたが、喧嘩が済むと直ぐ何處へか影がなくなつたから、其時は黙つて居たが、兩人の武士が自身番へ引かれて往くのを見て、若し罪にでも行なはれると氣毒だと、態々自身番までついて往つて、役人に自分の見て居たことを逐一話し

て、全く大山東馬が入らざる無禮をした、めに、武士の意氣地で據なく斬殺したんだから、決して兩人に罪はないと段々と辯疏した、役人も然うであらうと、難なく兩人の釋されたのは、全く達磨の庄兵衛の力でありませう、庄兵衛親分は、兩人の放免になつたのを見て、懐中から金を取り出して分與へ、畢竟御兩人とも江戸の土地不案内、且は大醉して歩行されるから斯様な間違も起るのゆゑ、以後餘り大醉ならんが宜いと、懇々と戒められて、面目なげにコソ／＼と溝口上田の兩人、何れ改めてお詫に罷出るといつたまふ、右と左へ立別れた、庄兵衛も役人に挨拶して本所を指て立歸る道途、氣になるのは彼の刀を貸した娘のことで、久四郎に向ひ『オイ久四郎、先刻のアノ娘はお前して居るかい』久四郎は知つてますとも、彼はね、兩國の橋の上で謠をうたつて銭を貰つて居る浪人者の娘でさア、毎日橋の上を通つて彼娘を見て居ますが、那樣に面白い氣象の娘とは知らなかつた』庄『さうか、それでは丁度兩國は歸途だから、遇つて様子を搜つて見てやらう』と橋の上へ来て見ると、

モウ父娘は歸つた後で、姿はない、今日は大方花火だから早く歸つたらうと其日は其儘立歸つた、翌日になると庄兵衛とくくく氣になると見えて 庄久四郎や、兩國へ往つてアノ浪人者と娘の様子を見て來な、さうして是非何とか言葉をまふけて此家まで連れて來な、事に寄つたら家へ置いてやつても宜いから……』とまで言ふものですから、乾兒の久四郎に甚七の兩人、委細畏まつて、兩國橋の袂へ來て見ると、莫座の上へ座つて頻りに謠をうたつて居る浪人があります、年齢は四十二三、眼は見へず破衣を着ては居るが何となく品格の好人 久『一寸御免下さい、お尋ねしますが、娘さんはお出ではございませんか 市『ハイ誰方でございます 久『私は本所原庭の庄兵衛の身内のものでございますが、昨日姐さんが、刀を貸しておやんなすつた所を親分が見て居て、大層感心をして、是非貴方と娘さんをば、宅まで連れて來い、是非お出でを願へと斯う申のでございますが、如何なものでございませうか 市『ハイ、どうも彼娘は兎角女の身でありながら、氣象が荒々しくて、男のやうな荒くれ

たことのみが好きで困り切ります、今又た何れへか遊びに參つたものか、其邊には居りませぬか』と言つて居る所へ、向ふから馳けて來た娘のお初『お父さんどうかしたのかい 市『ナニ、今な、原庭の庄兵衛さんの乾兒衆が、昨日の刀を貸した禮をいひたいから、私とお前に原庭まで來てくれとおいひのだが、お前往く氣はあるかの 初『何だとえ、刀の禮をいひたいから、原庭まで來てくれろと、いくら小娘でも武士の娘だ、町人から禮を貰ひたさに貸したんぢやアないよ、それに何だい、町人の分際として武士に對し、手前の宅まで禮をいひたいからお出で下さいとは何だ、用があるならお前さん達の親分も何もありません、自分出て來るが宜いぢやアないか、私の宅までお出で下さいとは何事だ 久『ようく、豪い、豪義なことを有仰る、それぢやア一應歸つて親分に話しまして…… 初『イエイエ唯は歸しません、お父さんの前へ兩手を突いて、誠に失禮を申しましたと謝罪しなければ歸しません 兩人『オヤ、これは酷い目に遇ふぞ』仕方がないもんですから久四郎甚七の兩人